
須上ユイナの地球救済

大塩杭夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

須上ユイナの地球救済

【Nコード】

N8909M

【作者名】

大塩杭夢

【あらすじ】

普通の女子高生であるはずの須上ユイナは、超能力やヒーローなどの非現実的な現象に憧れを抱いていた。

そんな時に地球の危機ですよ。なんかキーパーソンになってます。「地球の平和のためになんか頑張る！」

実は自分の欲求を満たすためだなんて言えない……。

SF 超常現象青春電波コメディー。

滅びの日、嘘

二〇一一年、十月二十八日。

終わるかも知れないという絶望と、何も起こらないかも知れないという諦め。

二つが混在して「うわあああああ」ってなる。興奮状態。胸の高鳴りは激しくなる一方ですよ。

世界は滅びるとか滅びないとか。

そういう日の夜って、ある意味大晦日みたいな気分になる。区切りをつけるというか。

一つの終わりを迎えて、死や滅びや新世界。新しい何かを受け入れるというかね。

……気持ちには、前向き。

生き残るのも良し。滅ぶのも良し。まあ、強いて言うなら若干滅び願望がリード中。調子乗った人類、そろそろ終わるのもいいんじゃないかなってさ。

十月二十九日。

朝は、いつも通りやってきた。

何の変化もない土曜日。虚しいほど空振りした噂。

昨夜片付けたばかりの机の上には、破かれた教科書。どうかしていた昨日の私が、そこに見えるような気がした。

「……結局、こうなるのか」
溜息ついて、布団を被る。起きたくない。もう二度と布団から出たくない。そんな気分だった。

次は、来年の冬にでも期待。……こうして希望を持つことが、そもそも災厄だって話、どうかで見たような気がする。

「私」紹介

馴染めない訳ではないんだけどさ。イケてる同級生の輪には入れなかった。

というか入らなかった。入ってたまるか。

恋とか何とか言っている奴も、進路がどうか言ってくる大人も、何というか全部が鬱陶しい。そんな感じの今日この頃。

進路がどうか考える前にさ、考えることがあるでしょうよ。人は死ぬんだよ。それに目を背けて将来の話なんてしたって、意味なんて無いに決まってるじゃんか。

私は皆と違う。

誰よりも考えてるからクラスではちょっと浮いてるけど。だけど嫌われてないのは多分私が聡明だからだし、何と言うか……。

そういう風に心の中でばやいてないと、怖くて潰されそうなんだよ。

「あーあ」

この深い溜息は若さの現れだって信じてる私がいるのである。うむ。

それでも色々と悩んでんだよ。

人生がこんなにつまらないなら、いつそ死んだ方がマシだと思った。辛いことなんて何もないけれど、心から笑えるようなこともほとんどない。

でも死のうかなーなんてことを少しでも思った瞬間、あの日のあれとかその日のそれとか思い出して、急に人生が楽しいものになったような気がして。

仕方がないから一日待ってみたら、やっぱりつまらなくてやってられなくて。

それじゃあやっぱり死のうと決心したと思って、やっぱり未練が溢れて来て。

考えたらそもそも死ぬにふさわしい理由が一切ないから、遺書も全然書けない。

退屈だったからなんて書いたら、死んだ後に呆れられて恥ずかしい。

生きる方が、楽といえば楽なんだ、これが。もういい生きる。

なんてバカらしい葛藤を繰り返し、私は今日も退屈な人生を歩むのであった。

すがみ ゆいな
須上結菜という一人の女子高校生、イコール私の日常である。要するに暇ってことですよ。

成績は中の上くらいで、部活はやってない。

……あと、テレビゲーム好き。……と、それくらいしかないかな。私の特徴とか人生とか語ろうと思っても、これ以上何も言えないんだ。振り返ると無意味な人生。きつとこれからも。

虚しい。価値も意味も何もない。生命活動をただ続けるだけの人形みたいな私。

きつと、意味が欲しいんだと思う。漫画やアニメの主人公がなんであんなに輝いているかって、スケールの大きな存在価値を持っているからじゃん。

私は何の変哲もない恋愛漫画にハマれない。普遍性なんて無価値を自ら語るようなモノでしょ？

だからさ、探してみた。

やりたいこととか、叶えたい夢。何なら小さな目標でも、これ！
って言えるものをさ。

でも、大体何をやったって、結局はテレビゲームの方が面白いって結論に辿り着く。

現実なんて所詮、そんなものだ。本当につまらない。

二次元のなんと輝いていることか。魔王とかドラゴンとか超能力とか悪の組織とか！

そういう未知なるものには、ロマンがある。

きつと、この退屈な世界も変わるし、そうなれば私にも、存在価値とか、そういうものが見出せるようになるんだ。

間違えても今生で叶う望みではない。でも私はやっぱり、そういう憧れを捨てきれない。バカって言われるかもしれないけどさ。

平穩とそーでもない事件・上

——波乱は突然やってくる。

夢の始まりは、本当に急だった。

二〇二二年 六月。

七色町 須上家。

深夜一時。

細い雨の音に負けるかって感じで、キーボードをわざと強めに叩く。

梅雨ですよ。降り続く雨の音にうんざりしながら、私はとりあえずパソコンでチャットをしていた訳です。

近頃の雨の降り方はおかしい。休校にはならなかったが、三日も連続で警報が出るなんてのはちょっとひどい。温暖化の影響なのかなーと思うと、世界の終わりつても、結構近いような気がする。

『ユイナ：そこで私はにらんだわけです。七色には超能力者がいるんじゃないかって』

実際に顔を合わせていなくても、ネットワークで離れた相手とコミュニケーションがとれる。

魔法じゃないですよ科学ですよ。神秘なんてどこにもない時代。悲しい時代に生まれちゃったもんだなホント。

『セオ：超能力というか、それはプラズマです。……あの、眠いでそろそろ……』

『ハンゾー：それにしてもすごい雨ですね……。そっちもですか？』

『ユイナ：ですねえ。そんなに服部さん家と距離ないですけど』

『セオ：こっちも降ってます。雷とか落ちるかもね……。』

——瞬間。ピカ。

私の部屋含み全世界が光に包まれいや全は嘘で頑張っても町内が限度だと思いますが！ 轟く雷の暴力的な音がどばああああんと響いた。

「うわぁ……すごい」

瀬尾さんは預言者ですか。落雷ですよデカイの一発。音の大きさから考えると、結構近所に落ちたのではなからうか。

子供なら、ワーキヤー言ってテンション高くなるんだろうな！。

でも私はこれくらいではしゃぐほど子供でもないんですよ。もう高校二年生ですよ。案外落ち着いてますよ。ここでワーキヤー言わないところが、可愛げが無いって言われる所以かもだけど。

「まあ、大人ってことでオツケーだね、うん」

独り言って独りだと言わないと思ってたけど、案外言っちゃうもんだってことに最近気付いた。大人だからね。こんなお化け屋敷みたいなパフォーマンスにビックリしたりしませんとも。

けどね、残念ながら雷は単なるパフォーマンスではなく、ちゃんと実害もあるのでですよ。

「……止まった」

私のパソコンの画面が止まりました。見事にピタリと止まったボーズ状態。

チャットの内容を映しっぱなしで変化無し！ やだもうパソコン死んだかも。いや、そんなヤワでもないかも知れんけど。……。

——雨の夜に一人ですよ。今なら凄惨な詩が書けそうなくらい、脳内独り言が溢れ出す。

「あーあ」

溜息だけ、一人ぼっちの部屋に響く。
電灯はつけてない。明りは今や止まりっぱのパソコン画面だけなのです。

だから、部屋は暗い。

外は雨。

暗い。

目の前だけ眩しい。

目痛い。

画面に羽アリ多い。

畳が臭い。

雨と夜とパソコンのバーカ。

「……落ち着け私」

自暴自棄になってきた。人恋しい感じって言った方が合ってるかも。キリが無いので落ち着いて部屋を見渡す。

……まあ、とりあえずパソコンは大丈夫でしょう。コンセント抜けば普通に改めて起動できるだろうし。多分だけどね。

チャットは……もどうでもよくなってきた。寝ようかな。

でも、寝るのもちよっと勿体ない。この雨には何となく惹かれるものだってある。「日常」とはちよっと違って、何となくロマンチックだ。

日本の雨がこれならスコールってやつはどんなに激しいんだろう。南国とかいいなあ。マンゴーとかいいなあ。ドリアンは……臭いよなあ。

と、いつも通りの妄想にふけてたら、そのうち結局眠気が迫ってきてやがった。

無限ループはもういいか。

「――寝よう」

席を立とうとした瞬間。

急に、部屋が真っ暗になった。部屋を照らす唯一の光が失われたのですよ。

ポツン。とね。

パソコンの画面が消えました。黒いよ。パソコンの画面も、私の視界全体も。

コンセントも抜いてないのに、急に消えちゃったっていうね。……なんだか、急すぎて逆に違和感。機械が反応を起こすには何かしら原因が必要だと思っただけど。まあ、そこまで科学に強くない私には、その原因がなんなのかなんて知るよしもないだけどさ。

……ちよつと気になって、画面を覗く。真っ暗で何も見えない……と思っただけど。

「――お」

気のせいかな。

ポツン。と。

真っ黒い画面の中に、白い光の波紋が一つ。瞬いた。水溜まりに細い雨粒が落ちたような……。そんな感じ。パソコンそのものは既に止まってた。それじゃ、画面が勝手にこういう画面を映してるってことになる。

……いやいやいや、何それちよつと。思わず画面に指を触れる。と、触れた部分にも波紋が立った。画面の感触は正常だった。タッチスクリーンではないはずだよこれ。

心霊というにはスリルが足りないけど、暇を持て余した私の心を刺激するには十分すぎる訳で。

ポツン。ポツポツと。今度は勝手に、画面のあちこちに波紋がいっぱい浮かんできた。

「……なにこれ、嘘、夢？」
誰に言うわけでもなく呟く。頭を叩く。痛い。起きてる。夢じゃない。

ポツン、ポツン。ポツポツポツポツポツポ。

「え、え、嘘、ちょ」

徐々に激しくなっていく雨と共鳴するように発生する画面の瞬き。私の持つている常識ではありえない光景を、私はただ茫然として見ているしかなかった。

「……あー……」

数分が経過した。まあ、部屋が暗くて時計は見えないから、ひよっとしたら数時間、なんてことも有り得ない話じゃない。

この部屋にある唯一の光といえば、パソコンの画面に映る波紋だけなのだから。

ポツポツポツ。瞬く光。この瞬間が現実なのか夢なのか。既に区別はついてません。

「……なに、これ」

喋りながら、私は自分の声がふるえていることに気が付いた。恐怖なのか感動なのか分からないけど、とりあえず興奮している。

ドクンドクンと脈打ちも早くなって、感情がミキサーにかけられたように落ち着かない。何というかべつとりしている。

波紋の発生は、時間が経つにつれて減ってきていた。……そろそろ終わりかな？ と思った頃。うつすらと……、

——少年が映った。

「おおお！？」

情けなくも腰を抜かす私。だって人が映ったんだよ？ その少年

は突然、突拍子もないようなことを言い出した。

「……マジで映ってんのか、これ。……はは、ははははは」
それ私の言葉だったの！

「はははは、はあ、はあ……。よし、早めに言いたいこと言わせてもらおう。これから僕は隕石を落とす。この隕石は一年後、地球……それも日本に衝突するだろう。食い止めたいなら僕が送った招待状を見てみな。世界を救う方法が分かるからさ」

そしてスッと消えていった。

「……え？」

もう一度言うけど、消えていった。

「……な、何じゃそりゃ」

ホントに言いたいことだけ言って去っていったよあの人！ 隕石？ いや、そりゃあ実際にそんなことが出来たら凄いけどさ。凄いけど……。何なんだろう。

この瞬間そのものが、ひょっとしたら夢の中なのかな、これ……。

案の定、起きたら朝だった。

朝だった。

「朝だった！」

昨夜のことが本当だってことを証明する跡は、どこにも無い。夢でした説がどんどん濃厚になっていく。

——認めたくない。でも……夢かな。やっぱり。

続く！

平穩とそーでもない事件・中

「うおおおおおお夢か……」

朝。

日光が窓から差し込んでます。

朝起きた時つて、自分が生きてることに疑問を抱いたりしませぬか。

と三十秒で頭を覚醒させ（多分してないけど）、とりあえず起きて、リビングまで行つて。

そして朝っぱらからとんでもないけど若干心当たりのあるニュースが流れてきましたよおお！

「巨大隕石が発見されました」

「このままだと地球に激突の可能性もあるそうじゃないですか」

「そうなんですよねえ。衝突も有り得ない話ではないそうですが、確率は低いようですよお」

大体そんな内容だった。そんでもって私の頭でフラッシュバック！ なーんか妄想が頭の中を支配する。昨日のあれは夢なんだと完全には割り切れていない私がここにありますよ。うん。

まさか昨夜に起きたことつて……。なんて思ってしまったが最後。とりあえず気になってパソコンの電源をつける。手が若干震えている。歯とかカチカチ鳴ってます。

恐怖というよりは、信じられないっていう驚きと期待。信じられないけど、もし本当にそうだったら……？

とりあえず困ってみた。

「うっわー……」

見慣れぬファイルが一つ追加されていました。名前が「神ゲー」

招待状」の時点でデスクトップをがち割りたくなった。

やり方が不細工過ぎるし訳が分かんねえ。もうちょい幻想的な演出はなかったかなと！ まあ、確かに立派過ぎると逆にフィクションっぽくなるけどさ。このチープ感が現実でしうか。

いや、気にしたら負けだよ。とりあえずダブルクリック。フリーズ。昨夜と同じ。まさか。

冷静に考える。一般論。イタズラ。

でもさ、それはただ、「未知」を無理やり「知」に変換してるだけだ。怖いだけ。そんなもんだの逃避じゃんか。

だって、それっぽく辻褄が合ってるんですよ？ しかも何かもう落ち着かないよ何これ。恋慕にも似たこの感情を誰か何とかしてくれ。

思うに、根拠らしい根拠は無いんだけど、隕石のこれからの進行ルートとあの少年には何らかの関わりがあるはず。そんなもって隕石が地球に衝突するのを防ぐためには、今すぐこのファイルを動かしてどうにかするしかないと思う。

けど、それが出来ない理由が二つ。

一つはそんなことを人に言ったら間違いなく私は異常者扱いされるってこと。他の人にとっては今日も昨日も明日も平和ないつもの毎日の訳だから、いくら私が隕石とか言っても私が社会から疎外されるだけなのは明白なのです。動くなら一人で、が望ましい。

二つ目。学校行かなきゃですよ。サボる口実に出来るかな、と思っただけど、そんなこんなしてると一つ目の理由に引っかかる。

本当は人に言いたくて仕方ないんだけどさ。しばらくは様子見とすることにしようってことで。

「んふふ……は、ははは」

と、笑いがいよいよ我慢出来なくなっちゃた。

正直なところ、私はとんでもなくワクワクしていた。常識人気取ってる普通の人には分かんないかも知れないけど、そういう人でも

心の奥では共感してもらえないんじゃないかと。

何かが変わる。非凡なことがきつとこれから起こる。そういう期待。形の違う恋みたいないな状態。

何かが起こる。何かが起こる！ 私はこの世を救うヒロインになる。……なってみせますよ、ええ！

非日常への扉……というか玄関を開ける。

よっしや命名。「須上ユイナの地球救済」！ ちよつとまあ馬鹿っぽいかもしれないけど、私の私による地球の為の物語が今、スタートした！

期待し過ぎた。

通学路から教室まで。ここまでの道で普段と変わったことは何もなし。日常はそう簡単には変わりません。明日世界が崩壊するとしても、世間はそのまま何も変わらないのかも……。そう思うと、鳥肌が立った。

私の通う七色高校は、廃校になった小学校の校舎をリサイクルして作られたエコ高校だ。陰気な雰囲気、そして七色という校名の影響もあってか、七不思議とかも結構ある。

入学した当初は「非日常の扉を開けちゃった」とか思ってたけど、結局一度も幽霊なんて見れてない。

さーて教室に着いて一息。ここまで来ても、隕石のことが気になつて仕方が無い。

私は口が軽い。無口な私に恋愛マイスター的幻想を重ね合わせたクラスメイトが「実はあいつが好きなんだけど」って言ってきた。

ったぜ、みたいな本当に絶対にばらしてはいけない秘密は守れるんだけど、昨夜のことや隕石の話は、私の中ではそこまでロックがかかっていなかったようです。朝の考えはどこへやら。

奇妙な話は奇妙な人へ。

学校に着いた後、すぐに上級生の教室に飛び込み、三年生の星野ほしの剣つるぎ（下の名前はもはや凶器）という先輩を屋上に呼んで話をした。名前と中性的な雰囲気からよく勘違いされるけど、この人は女子ですぜ。

自称、正義のヒロインで、書類とかの偽造という訳の分からん趣味を持つこの人は、女子なのに女子にモテるという不思議な魅力の持ち主だ。

まあ、男にも十分モテるんだけどさ。とりあえず、うん。モテモテですよ。私とは中学からの馴染みである。

昨夜のことと隕石のことを一通り聞いた先輩の感想はこうだ。

「……そりゃあお前、隕石のニュースを偶然いち早くゲットした物好きがだな、善良な一般人をからかってやろうとウィルスを撒き散らしただけじゃねえかな」

根は常識人なのである。

「えええー……。先輩もそういうか。……あー、でも、ありえなくはない……。ですね」

いきなり画面に人が映るようなウィルスなんて見たことはないけど無さそうとも言えないし。思わず納得する私。

「……でもほら、雷の直後ですよ！」

「偶然タイミングが良かったとか……では片付かないかも知れないけど、そんな感じだろ。俺もパソコンは詳しくねえから、そういうウィルス作るのが可能なのか分かんねえけどさ。すごいんだろ？

今時の技術は」

「……むう」

私もパソコンについてそこまで詳しいことは分からないから、先輩の言っていることが正しいのかは分からない。

……分からないけど、納得してしまった。けど、えーと、あああああ！

ちくしょおおおお！ 反論できなくなったあああああ！

こんな私は社会不適合者でしょうか。どことなく孤独なような何かそんな感じ。

平穩とそーでもない事件・下

——現実っていうのに抵抗しないのは、つまりは妥協だと思う。

受け入れるしかないっていうのは、受け入れないっていう選択肢を選ぶ勇気が無いだけであってさ。

……私は、勇気を持つよ。

私の名前は、たった百メートル先にも轟かない。……そんなもん悲し過ぎる。

いてもいなくても同じ？ ふざけんな！

たとえ今はそうでも、絶対見返してやる。馬鹿にした奴らも呆れた奴も全部ぶっ飛ばしてやる。

日常を全部ひっくり返してやりたかった。

「先輩の馬鹿！ 私の思いがどうして先輩に伝わらないんですか！」とか言う安っぽいドラマみたいな感じではないけど全く間違っている訳でもない、そんな展開終了後。

教室に戻っても静まらない心の高揚を何とかすべく、教室に帰ってから同級生の桜木春風さくらぎはるかに同じことを話してみた。春風は私の相手とも呼べる存在で、ちょっとつり目の女の子だ。髪が長く、ポニーテールで空を飛んでも不思議ではない。

笑われた。

「わんぱく坊主かアンタは」

私は何かもう涙流しそうだった。一般論か、と突っ込み入れたいけど、むしろ突っ込まれるのは私の方なのであった。

「世界を救う方法……そんなもん、うちだったら頼まれても信用でкин」

「う……。現実的か」

何なんじゃちくしょおおお！　と思いつきり叫びたい。多分、春風以外に人がいなけりやそうしてた。

みんな、昔は大きな夢を持っていたのにさ。高校にもなると進路とか学歴とかうるさいのなんのって。あの日の夕焼けの色を思い出そうよ。涙を流しながら見たあの夕陽をみんな忘れたのかよ！

こう、熱いものが心の中で燃えているのは私だけなのかよ！　誰かに物凄く力説したい。春風はどうせ聞いてくれないけどさ。

「実際にあの場に居合わせてたら、絶対に信じるって！　きゃー画面に变なん出たって感じになるって。春風だってわんぱく坊主状態になるって！」

「……まあ、確かに客観的な立場やから何とも言えんけど。じゃあアンタは今、冷静な状態で考えて、どうなん？」

「どうなんって……。今も冷静じゃないからなあ」
「アホか」

……へこむわあ。ストレートすぎるもん。まあ、それが春風の良いところでもあるけど、まっすぐすぎて毒舌の域に入るのも考えものだ。

そしてそんなまっすぐ少女にケチヨンケチヨンにされた私。

高校生にもなって、漫画やアニメのようなハチャメチャな世界に本気で懂れるのは私だけなのだろうか。羨まし過ぎてまともにアニメが見れなくなったよ私。共感者はまだ見つかってないです。

冗談とかじゃなく、本気でこの世が変わることを願ってる。そんな私の周りで隕石がどうのこうのとかパソコンの不思議な現象とかが起こっちゃった訳ですよ。ワクワクしない訳がない。

確かに私、わんぱく坊主並かもしれないけどさ。でも感じるんだよ。変化を。何かが変わるのを！

どうして誰も信じてくれないんだよ……。

「何というか、隕石の存在は本当じゃん。ニュースであつたじゃん。激突の可能性って」

「他の番組では全く心配ないとか言いよつたで。あの番組、結構大げさやん。スキャンダルとかもいつつも」

「……つまり、私が一人で盛り上がったただけってこと？」

「せやろうな」

エセ関西弁の攻撃！ 効果は抜群だ！

「断言か……」

夏祭りのくじ屋で欲しいものが当たらなくて、落ちこんだ時を思い出す。何年前だっけか分からないくらい昔の話。りんご飴もイカ焼きも我慢して、もらったお小遣いの八割を全部使って、小さい人形しか当たらなくてさ。

並べられたゲーム機は子供を釣る餌だ。そんな当たり前のことに気付いたのは、それからずっと後のことだった。

まさか、またあの気持ちを味わうとは夢にも思ってたなあ……。切ない。

「ちなみに、うち以外の誰かにその話したんか？」

「星野先輩にはしたけど。……他に言える人いないからなあ。友達少ないしね！」

中の下……いや、下の上辺りか。何故そついう位置にいるのか、自分でもよく分からない。

成績も良いし、決して落ちこぼれではないはず。……なのに、致命的な欠陥。友達が少ない。

リアルワールドは楽しくないですよ。隕石が壊してくれても、それはそれでアリな気がする。

二人の言つとおり。特に世界に異変はなく、今日も平和でした。泣きながら夏祭りを後にする子供のような気持ちで教室を出て二十分。現在私は小さな川沿いの田舎道を歩いている。

車一台が通れるかどうかくらい細い道。基本的には人がいなくて、割と大きめに鼻歌とか歌つても平気な感じの場所。私はこの道をウルトラお気に入り通学路と呼んだり呼ばなかったり。いや、呼ばないよ。

ただ問題は、それでもたまにいる通行人とすれ違ったりした時、鼻歌聞かれてたかなーとか心配になること。まあ、それを差し引いたって十分お釣りがくるマイスポット。もうなんか、この道を通る時が一番落ち着く。

iPodなんか持つてないし、携帯に音楽は入れてない。でも、それがいいって時もあるのさ。この前YouTubeで知った曲を憶えている限りで熱唱。鼻唄どころか普通に。若干小声で。

いつもの風景。

いつもの音。

サラサラと聞こえる川のせせらぎ。

名前も知らない虫の声。

雨は止んだけど、空を覆う雲の間からは燃えるものがゴゴゴゴゴと轟音を響かせて降ってくる。

「ええええええ!?!」

思わず肯定的な叫び。いや歓迎ですよこういう不思議現象。でも、まあ。うん。超やばい状況ですよ色んな意味で。

だってゴゴゴゴゴ。なんかゴゴゴゴゴ。ま、流石に不安にもなったけどね。

だって何か降ってくるんだよ。燃えているものが。それもだいた
い真上くらいから。私の傍に落ちてくるんじゃないのかこれ。

スピードは私が思っていたより早かったみたいで、それは十秒も
しないうちに川に落っこちた。

「……おお」

よく見ると人間だから困る。だって人間。

服装は黒い現代風のものだった。ジーパンっぽく見えるけどちょ
っと違うモノと、シャツに見えるけど何かちよつと違和感のあるモ
ノ。光沢があつてひたすら黒い。車のボディにも見える。

というか生身。何で焼けてないんだろう。しかも生きてる。目が
ぱちつと開いた。

彼はひとまず普通に起きる。それで土手を登ってきて、私の前に
こんにちは。

……戸惑ってるぜええええ私。落ちつけ私。

落ちついて、落ちてきた人を冷静に見る。綺麗で中性的な顔立ち。
男装美人かと思っただけ、多分男だ。

飛来してきた彼……彼女？ いや多分彼……は、私に言った。

「須上結菜さんですね」

「え、あ、はい」

声で男だということがはつきりした。なぜ私の名前を知っている
のかは置いて、いや置いておけないよちよつと、

「驚くのも分かりますが、まず結論から言います。おそらくあなた
は地球の運命を担っています」

「え、あ」

……え？

オソラクアナタハチキュウノウンメイヲニナツテイマス。

そのつもりだったから、漫画みたいに「ええええ！？」とか叫ばず、

あ、やっぱり？ と間抜けな感想言っちゃったけど。

「……えっと、あなたは……誰？ ……ですか？」

私が地球の運命を担っている以前に、そっちの方が気になった。ぱっと見た感じは、私と同じ年くらいの少年なのだけでも。登場があれですよ。空からジャジャジャーンだからね。

「ああ、申し遅れました。僕の名前はアルス。平たく言うと、宇宙人ってやつです」

同年とか言う前に、地球人じゃなかったよ。

アルスくんは早速、自分のことについて簡潔に説明してくれた。

「世の中のどんな星も、いつかは無くなります。星にも寿命がありますから。しかし、事故や事件など、何らかの理由で寿命より先に死んでしまう星が存在します。」

事故の場合は仕方がないと言えますが、事件。それも外部の世界からの人物が関わる場合、見て見ぬふりもできません。

異世界間の警察を自負している僕らは、そういった事件の臭いを嗅ぎつけると、僕のような派遣社員を送り込むわけです」

「……待つて待つて」

当然のことように異世界って言葉が出ましたよ。

「ということは、君はあれ？ 異世界人？」

「正確にはね。宇宙人の方がこの星の人には馴染みが深いようだから、そう名乗ったんだけど」

「異世界人……。え、異世界人？」

「異世界人」

「もう一回言つて？」

「へ、あ、えっと、異世界人……」

「……は、ああああ！ おめでとおおお！」

「え、な、何が!？」

まとめると、こうだ。

どこか危ないとこある？ あつこの世界の地球つてところ危ないんじゃない？ 行った方が良くない？ 了解。派遣向かわせます。

「ということでしょうか！？」

「平たく言えば、そうですね」

ふざけている風じゃない。一切疑いが無いってこともないけど、信じる率が大幅勝ち越し！

これこそ、私がずっと求めていた展開じゃあああ！

喜びと衝撃と困惑が入り混じる。

未知との遭遇に、私はなんでか涙しそうになっていた。

リアルワールド崩壊！

常識人とか大人とかライトノベルの主人公とか。ああいう奴らみたいに未知を拒んだりはしないのさ！

この世界に、ようやく変化が訪れる……！ 私は、世界を救う！

異常者と異世界人・壺

チャンスとか、好機とか。そんな言葉を聞く度に、根拠は無いけど嘘っぽいと思ってた。

でも、やっぱりあるんだよね、そういうの。

良くも悪くも、変わるチャンスは私の目の前に降ってきた訳で。

宝くじ一等賞より遥かにやばいよ。嬉しすぎて興奮し過ぎて気絶してもおかしくないかも。……ま、宝くじで一等当たって人生狂うってのもよく聞く話だけどね。

いっそ、この当選で世界が狂えばいい。人間が立って、キリストが生まれて。戦争が起こって。そうやって世界が変わっていった訳じゃないですか。

とりあえず私は、空から降ってきたこの異世界人アルスくんを連れて帰ることにした。

竹から出てきた女の子でも、川の上流から流れてくる桃でも。拾ったものは持って帰るのが日本人ですよ。勢いで即決。見つけた瞬間の喜びは一種の麻薬です。鈍い判断力で、異世界人だって持って帰りますとも。

たった今までこの星に存在しなかった彼には、当然だけど住居がなくてお金もない。けど、だからってホームレスになってもらうのも気の毒だし。もし出来ることなら、居候くらいはさせてあげたいじゃないですか。

相手が男だから警戒しちゃうぜなんて考えは、彼が空から降ってきた時点でぶっ壊れちゃってるよ。大丈夫。別に隣に寝かせる訳じゃない。

それに。彼とここで別れたら、このチャンス逃してしまいそうで怖いんだよ。夢から覚めたくない気分。嘘なら嘘で、もう少し浸っていたいのさ。

本当に居候させるかどうかは親の管轄だから、まだ分からないけど……。

「しっかし、さっきからどうも違和感あると思ってたけどさ。何で私たち、会話が出来るの？」

「そりゃあ、僕が日本語を使ってるからですけど……」
当然のように言う彼。

「なんで喋れるのよ」

「誤解されがちだけど、僕はここに不時着した訳じゃなくて、この星を救うためにこの文化を多少は勉強して来ているんだ。僕が選ばれたのも、この世界のことにについて、僅かだけど知識があったからだし。アメリカはギャンブル合衆王国だってことも、日本は侍や相撲取り、そしてガングロの国だってことも」

「いや違っつて」

侍もガングロも既に衰退した文化ですよ。そしてアメリカは合衆王国じゃない。王いらない。いない。何だか急に不安になってきた。……うちに居候する時、あんま変なこと言わないでね」

「ええ。頑張ります」

「あと敬語も禁止。使われるのは嫌いなんだ」

「あ……うん、分かった」

そういえば、彼を居候させる理由もちゃんと考えないといけない。記憶喪失のホームレス高校生でいいか。

「記憶喪失のホームレス高校生？ うわ、大変。うちでよければ是

非」

それでいいのか母さん。簡単すぎないか母さん。もう少しは考えるよ母さん。

我が家のセキュリティの甘さには呆れるばかりだが、今回に限っては感謝しなければ。何たって地球の運命が左右されるからね。

「ところでお名前は？」

げ。考えてなかった。

アルスなんて言えない。違和感あるし、ハーフ設定だと目立って後々動き難くなる可能性大ですよ。

偽名……。平凡すぎると自分たちで記憶できないし、目立ちすぎるのも考えものだし。けど、この肝心な時に限って、頭には坂本竜馬しか浮かんでこなかったりする訳で。

「……坂本竜馬。だよね、竜馬くん」

「え、あ、え……？」

じーっとアルスくんを見つめる。アイコンタクトで彼も理解してくれたらしく、黙ってくれた。びくびくしているように見えたのはきつと気のせいだ。

「そう、分かったわ。よろしくね、坂本くん。自分の家だと思って、好きに使ってちょうだい」

好きに使われるのも問題ある気がしなくてもないけど……。とりあえず、居候させる許可は下りた。まだ小さな変化だけど、退屈するのは結構簡単に紛れたりする。

……麻薬だけだね、それも。発見。楽しみ。快樂。そういう一時的な興奮に身を委ねるのは好きじゃないから、ここで満足はしない。

「ところでどうして名前だけは憶えていたのかしら……」

「え、あ、えーと」

言葉に詰まるアルスくん。多分、近々絶対にボロが出るよ……。

「一階がリビングと洗面所と……あと、母さんと父さんの部屋があるかな。二階に、私と兄貴の部屋がそれぞれ。アルスくんは廊下に寝袋で寝ると。そういう感じだね」

簡単に家の説明をしながら、家の中を案内してみる。

アルスくんには、こういう家の内装や雰囲気になかなか新鮮だったらしい。目を輝かせながら、興奮気味に相槌をうつっていた。

「すごいなあ……本物だ。ユイナさん、これが地球の文化ですか」

「いやまあ……そんな大層なものではないけど、日本の二階建てはこんな感じね。あと敬語もさん付けもやめれ」

「あ、ごめん」

アルスくんは、興味深そうに台所を眺めている。……ま、逆の立場だったらそうなるだろうね。

魔法？ 何それ！？

シンク？ タワシ？ 何それ！？

ムエタイ？ アユタヤ？ 何それ！？ ……それはちょっとタイ人に失礼か。

「もう救いに来たというよりホームステイみたいになってるけど、やっぱり知らない場所の文化って面白いものだよ」

「うん。分かるけどね。でも何しに来たのよ、君」

よく宇宙人に代表されるような火星のタコも、地球に来たらこんな風になるのだろうか。……それはそれで面白いけどさ。

「どうよ、この家。満足行くかは分かんないけどさ」

「十分ですよ。外で寝るのを覚悟してたんで、屋根があるだけでも本当にありがたい」

「はは。大げさだよ。ていうか敬語。同級生とかに敬語使われるのって……あれ？ 待てよ、何歳だ君」

別世界の住人だから歳という概念があるかどうかすら分からないし、一年が三六五日ではないかもしれないし。

成長の仕方とかが違えば当然歳というものは意味のない数字にな

つてしまっただけど、とりあえず聞いてみた。

「歳？ この国の数え方でいくと、十七かな」

ホントにタメだった。ほぼ地球人じゃん。ちよつと。

「……なーんか君、本当に異世界人なの？ ほっとんど人間と同じじゃん」

冗談っぽく聞いてみると、彼は意外そうな顔をした。

「あれ、言つてなかったっけ？ 僕は異世界から来たっただけで、生物学的な区分でいえば、ほぼ君達と同じ人間だよ」

「……マジで？」

それって有り得ること？ 全く別の場所で同じ種類の生物が発生するなんて、全く一致した指紋を持つ人がいたああ！ とか以上にとんでもないことだと思っただけど。

「……あ、元が同じってこと？ どっちかの世界で生まれた人間が移住して……みたいな」

「いや、その辺はまだ不明なんだ。僕らの世界の人間だって、万能って訳じゃないから……」

「ふーん？ 案外、神秘ってあるもんなのかな」

何となく距離のある、ちよつと親近感の持てない神秘だけどね。

……あ、隕石は遠くない神秘だよ。上手くこの違いを説明する自信はないけど、精神的な距離？ というか。

さて。外はもうすぐ夜になる頃。空は、隕石とかそんな不安を一切感じさせないような、キレイな紫色をしていた。

「そういえば、ユイナさん……じゃなくてユイナ。君って簡単に僕の存在を認めたけど、あれは地球の危機っていうものに関して、何か心当たりでもあったからなのかな。異世界の存在を知らない人にとっては、僕のような存在は衝撃的なことじゃないか？」

アルスくんが言う。そういや彼は遊びに来たわけじゃなかったんだった。

「……うん。一応、心当たりというか何というか」

私はパソコンを指さした。

「昨日、私は常識捨てちゃったから。……だから君の登場にだって、大袈裟には驚かないよ」

異常者と異世界人・貳

夜十時。雨もすっかり止んだのはいいけど、それはそれで静かな夜の到来な訳で寂しささえ感じられる。

さて、朝と同じように、パソコンの画面に出てきた「神ゲー（招待状）」というファイルをクリックすると、画面そのものが凍ったように動かなくなった。

一分経過……。二分。三分。……アルスくんが欠伸した。分かるよ。私も同じ気持ちさ！ この五分の長さは耐え難い。

「……ユイナ、これって誤作動じゃあ……」
我慢できなかったのか、アルスくんが呟く。

「いや。昨夜も今朝も同じだったんだ。しばらく待っていると、画面が急に暗くなってくんの。きっと……」

予想通りだ。画面が暗くなり、次第に円が瞬き始める。しばらくそのまま待っていると、少年が映った。

「うん、同じだ。ちよつと、始まり方が違うけど」

前の時は雷でパソコンが停止してから始まったけど、今回はプログラムによって私が半分意図的に開始した。つまり、受動と能動、テレビとビデオの違いがある。ま、それだけなんだけどさ。

画面の中の少年は、昨夜よりも饒舌に語り始めた。

「このプログラムを開いたということは、君たちもこのゲームに無条件で参加することになる。

世界の運命を変えるかもしれない、神のゲームに。ちなみに無料ね。俺の場合、稼いでも意味無いし」

意味無いんだ……。

アルスくんは画面を睨み続けている。険しい目がちよつぴりセクシー。一人じゃないせいか、私も昨夜よりリラックスしているみた

いだ。

「……彼が、地球の生死に関わると？」

「確信はないんだけどね。……隕石を落とす、だってさ」

「隕石、か……」

胡散臭いよね。

星野さんや春風の言っていたように、単なる隕石ニュースネタのいたずらだって考え方もできるし、どこまで信じればいいのか分からないといえそうさ。

でも、そうだとすると、アルスくんが私の前に現れた理由がなくなる。

この少年が実際に隕石に関わっている証拠は確かにないけど、そうじゃないと、私の周りに起こっている出来事の一つ一つが合っていない。

まあ、この「神ゲー」とは全く無関係なところで、私が地球の生死に関わるんなら納得だけどさ。

つまり、アルスくんの登場が彼の行動を裏付けした。絶対にはまだ言えないけど、隕石は多分落ちる。画面の中の彼が言うことは、きっとデタラメじゃない。

……そういえば、画面の少年がさっき、「君たち」って言わなかったか？ 複数ですか？

「僕の名前はヤシャ。これ偽名。勘違いされそうだけど、地球人だ。僕はひょんなことから、未来の力を手に入ってしまった。詳しくは語らないが、この力を使えば僕はこの世界の神になれる。

それでさ、運が悪いことに……俺は人間が嫌いなんだよね。だから来年の今日、僕の仕掛けた隕石が、地球に衝突する。

怖いかな？ だったら阻止すればいい。これから始めるゲームでね。

腕っ節だけじゃない。人間としての知能、協調性……。社会の逆

風や誘惑に打ち勝つ、本当の強さを持つものがいるなら止めて見せるよ。言っておくがこれは余興だよ。まさか隕石一発で終わりなんという呆気ない終わり方はしないよな」

……まあ、頭のネジでも外れたようにしか聞こえないけどね。

「どうよ、アルスくん。この人、隕石とホントに関わりあるかな」

「……そうだね。とりあえず、彼は元々この世界に生まれた人間みたいだね。確かに隕石を落とすっていうのは凄いいけど、それで神を名乗るなんてのは、僕からすれば大袈裟だ」

異世界など視野に入れない。確かに、アルスくんよりもよほど規模が小さい。

「まあ、ちゃんと最初に地球人だって自称しちゃってるけどね。でも……」

外部の世界から現れた人物が、星の生死に関わる場合に、自分のような派遣社員がウンタラカンタラ。

画面に映った少年ヤシャが元々この世界に生まれた存在なら、アルスくんがここに理由つてないよね。あれ、裏付けとか全然出来てなくね？ 色々繋がらなくなってきた。

「でも、未来の科学力とか超能力とか言っている時点で、かなり異世界とも絡んできてるんじゃない？ なんもんこの世界にはないし」

「……どうかな。断言はできない」

アルスくんが言った。

「なんでよ」

「一個ずつ言うけど、まず、超能力というのはどこの世界にもあるもので、この世界だって例外じゃないんだ。生物、特に、知能の発達したもの……まあ、代表的なのという人間が先天的に持って生まれる飛びぬけた才能で、食文化とか親の遺伝とか、そういう環境

境には左右されない。つまり、そこがどんな世界であろうとも、とりあえず生物なら能力を得るチャンスがある。例外として、石が超能力を持つている場合なんかもあるけどね。だから、他の世界との関連があるかどうか、超能力だけでは判断できない」

アルスくん本領発揮である。輝いてるぜ君。

逆に私の理解力はダメダメだ。

「……えーと、まとめると、そこら辺ですれ違ったオッサンが超能力を使える可能性もあると？ 存在しないんじゃないかって、確認されていないだけだ」と

「そうだね」

あっさりと認めたアルスくん。マジでか。今度もし電車に乗ったら、隣の人をよく見よう。

というか、アルスくんはそんなことを普通にペラペラ喋っちゃってもいいんだろうか。

「で、未来の科学力って言うのは……これは、まだどこの世界にも存在しないんだ」

「え、でもなんかこう、この世界より発達した文明を持った世界だってあるんじゃないの？」

「そりゃあ、あるけど。でも時空を超える方法っていうのは、まだどこのどんな世界にも無いんだ。ここより進んだ世界の科学という意味なら、未来の科学なんて言い方は正しくないしね」

「タイムマシンは未だ出来ずか」

「一方的に未来へ行くモノなら、もうすぐどこかの世界で完成しちゃうんだけどね」

どちらにしろ、文化や物質を過去に持ち帰る術はない、ということか。確認されてないだけかも知れないけど。

……えーっとうーんと……まあ、要するに、

「総合して言うと、このヤシャって人は、地球滅亡とか君がここに
いることは無関係かもしれないってこと？」

「まだ分からないけどね」

なるほど。……と、ここまで来て、ゲームの説明を聞き流しまく
っていることに気がついた。

「……以上で、説明は終了。一年後、世界がどうなっているのか、
楽しみにしとくよ。……じゃあ、またいつか」

すいませーん最初と最後以外、全部聞き逃したんですけど。

まあでも、録画だから、また聞け……なかった。やり方が分から
ない。

普段使っているような便利ソフトならともかく、「神ゲー」のプ
ログラムには説明もついていないし、対応のしようがない。不便。
ふざけんなヤシャとかいうアホ。

「ただいまー」

兄貴が帰ってきた。

さて。アルスクんのことをどうやって説明しようか。

「兄貴だったら多分、普通におかえりーと言ったら気付かれずに
済むと思うよ」

説明はいらない。兄貴なら分かってくれる！

「そ、それはさすがにないと思うけど」

「私を信じる！」

階段を上る音。さて、どうなるだろ。

「おかえり、兄貴」

「おう」

「お兄さん、お帰り」

「オマエ誰ええ!？」

分かってくれませんでした。

高校生の戦場

母さんたちとは違って、兄貴だけはアルスクんの居候に反対した。理由はまあ、いっぱいあって覚えてない。真面目で頭の固い人間だからさ。こういう異常事態にはとりあえず反対してくるんだよ。ま、なんとか説得したけど、納得はしていなさそうだった。

ザーツと、激しい雨音で目が覚める。梅雨。

……目覚めの悪い朝である。

警報でも出ていれば、今朝はパソコンやり放題だったんですがね。中途半端に強い雨って一番困る。

「天気めコノヤローふざけんなああああ！」

みたいに叫びたいけど飲み込んだ。

まあいいよ。昨日は良いことがあってごきげんだし。異世界人と出会ったかった訳だからね。奇声も飛び出しますよ。だから雨くらい許す！ という訳で仕方なく、私は今日もこの通学路をてくてくと歩いているわけです。

昨夜から始めた「神ゲー」は、言ってみるとスタンダードなロールプレイングゲームだった。

それぞれのプレイヤーが、自分のキャラクターを操作して世界を駆け回り、モンスターを倒すというありふれたもの。

ネットゲームの特色として他のプレイヤーとの協力や駆け引きなんかがあるのも、意外とありきたりでさ。とても現代に通用するような特徴とは言い難いのでありまして。面白いけどね。

隕石がどうだこうだっていうのも、プレイヤーを増やすためのハッタリかもなーなんてね。

そう思われても仕方がないよ主催者さん。……実際そうなのかなーとか思うと、何となく切ないけどね。

さて、喜ぶべきか嘆くべきか、今日も通り魔や何かに襲われずに、無事に七色高に着いた。何も変わらない通学路とか、何も変わらない教室にはうんざりする。

あんなゲームまで出回って、この普通さってなんで？ もっと、漫画やアニメみたいな展開になったりはしないのかな……。

というか、そうなれよ。

……ならないよな……。

と、教室でぼやっとしていたその時だ。

「よ、ユイナ。昨日の隕石の話、結局どうなったんや」

いつものようにエセ関西弁で、いや私も本物知らんからなんとも言えないが多分エセ関西弁で、春風が興味なさげに聞いてきた。

……どうなったんや、ときた。もしかして、内心は気になってんじゃないのかこいつ。

けど、異世界人がどうとか言っちゃっても大丈夫なのかな。と心配にはなるよ、そりや。

「……えっと、あんまり言わない方がいいかもしれないんだけどさ……」

心配なんか関係無く、普通に全てを話す私。己の口の軽さに呆れるってのも悲しいもんだ。

自業自得じゃねーかなんて突っ込みはやボですよ。意思の弱い者にしか分らない心境だってあるもんなのさ。

と、まあ、一通り話し終えた私。春風のやや呆れた視線が痛い。
「……ホント、くだらん話もええ加減にせんと、いずれ頭腐るで」

どんだけ冷めてんだよーこいつの頭。そして直球である。結構、心にダメージ。

世間的に、まともで正しいのは春風の方であって、私はバカルートを進み中だつてことがはっきりと示されるこの構図は、私には効果抜群だ！ うわーん。

アルスくんのことでもネットの話も本当なのに、それを証明する手段がない。さあ困った。困ってちゃあ見る見るうちに弱者だ。

だったら、現実的。そんな彼女の生き方の方が生きやすい。けどさ、それって楽しいの？ 生きやすければそれで幸せなのかよ。違うでしょ？ そんなんつまらないじゃん。

夢を見ていたい。ありえないことを信じたいんだよ。昨日、彼は上空から、燃えながら現れたんだ。異星人や超能力者はいるんだよ。

なーんて言つたところで、私が頭おかしい人扱いされるだけなんだよね。

しばらく春風と言い合いをして、もうそろそろ先生が来るなんて思つた瞬間、扉から先生が現れた。

ちよつとは未来予知に自信がついたが、まあこれが明後日にはほぼ完ぺきに忘れきるレベルの問題だと思うと無意味な収穫だったり。

「よーし出席とるぞー。赤井ー」

「休みー」

「何だと。まあいいか。井野ー」

「はいー」

自分の名前が近付くと、何故か少しだけテンションが上がる私。緊張感からだと思うけど。この感覚が皆にあるものなのか、人見知り特有のもののかはずっと疑問に思っていたことの一つだった。

「桜木ー」

「はい」

「須上」

「はい」

達成感。

「瀬尾」

「はい」

過ぎた後は急速に熱が冷めていく。

……。と。クラス全員の名前を呼び終わる。すると、先生は唐突に、
「転校生紹介するぞー」

などと言いだした。

「出席取り終わってからかあ……。勿体ぶってたのかな」

「しかし、まーた中途半端な時に来るもんやなー」

春風は表向きどーでもよさそうに呟いた。多分、内心ではワクワクしてるよこいつ。

「……あー、でも、確かに変な時期に来たね」

なーんて軽く言いながら、心の中ではお祭り騒ぎな訳ですが。

新たな出会いってやつ。ここから始まるドラマだってある訳じゃん。

先生が手招きすると、廊下から転校生と思しき人物が現れた。や、他に転校生候補はいないけどさ。

「おお……」

外見だけの話だけでも、思った以上にハイレベルだった。クラスの男子数人が、一瞬動揺したのが読みとれた。転校生は女の子だった。

ぱつと見た感じは、おとなしそうな子って感じ。背はそんなに高くないで、中一……いや、小六くらいと言われたら信じてしまいそうだった。不機嫌そうな目つきとかは、誤解を呼びそうだった。若干俯いていて、明るい子……には見えないや。春風や私に近い子か

もしれない。いや、子って言っちゃいけないか。ともかくそんな転校生さんである。

ミステリアスキューティ威圧感。何かちよつと暗そうな。……いわゆるクーデレ？ いやデレてねえけど。

「……転校生の、光村、零。です」

殺気を含んだような声で、彼女が言う。タダ者ではなさそうだ。最近の私の周り是一体どうなってるんだろう。そのうち私、死ぬんじゃないだろうか。

「じゃあ、光村。……は、そうだな。あの空いた席に座れ。そろそろ席替えもしないといけんな」

まじか。空いた席は私の隣だったりする訳で。

右には春風、左には転校生さんというこのフォーメーションはなかなか厄介な……。

……なんて思いつつ、本音を言えばワクワクしているんだけどさ。

朝の授業が終わる。左に座った転校生の光村さんとは、まだまともに話していない。

だって、なんか話しかけづらい雰囲気をかもし出してるんだもん。緊張しているのか嫌われているのか分からないけど、なんかふとした瞬間睨まれたりするし。

人見知り、直さなきゃいけないんだけどねえ。

「……ああ、もう弁当の時間か」

時間が経つのが早い。昼食はこつ、クラスの皆が群れる時間帯で

すよ。近所ってことで光村さんも誘おうかと思ったんだけど、いなかった。

席を移動するってことは、もう友達ができたってことだろうか。

……いやいや、ずっと私の隣にいて、友達作るなんて不可能じゃね？

「……ま、いつか。春風、どうする？」

「おう、食おうや」

教室には、複数の生徒……特に女子で構成されたグループが幾つがある。

何故か、私と春風はそういった群れには属していなかった。きっかけが無かったというのもあるけどさ、馴染めないってのもある。例えばこんな風に、

「須上さん、今日、こっちで食べない？」

あえて私のみを誘ったり、

「あー、いや、今日は遠慮しとく」

「……そう」

断るとなるとなーく棘のあるような無いような態度を一瞬だけ覗かせたり。そういつたある種の縄張り意識みたいなもの。それが何か性に合っていないというか……。と言いつつ真っ向から齒向かう私って何なんだろうね。何だかもう二人ぼっちですよ。

週に一度は、一番大きなグループのリーダー格、瀬尾さんに声をかけられる。春風と二人の時に、わざわざ私だけに対してだ。

ルックスも良く成績優秀でついでに毒舌な面がある春風は、男子からはモテるが、女子から嫉妬や敵意を受けやすい傾向にあった。

けど、小学生のような露骨ないじめをするほど馬鹿ではない彼女らは、至って自然にターゲットが孤立するよう、日々計画を進めていくのであった。完。

……いや、終わらんが。

春風はやや嫌悪感の混じった表情で瀬尾のグループを一瞥すると、私に言った。

「……行きたいんやったら瀬尾らのところに行ってもええねんで。うちとは別に一人でかまへんし」
強がりもいいところである。

瀬尾夏鈴。長い髪と、私程ではないが整った顔立ち（自惚れではなく本当に私は結構良い顔してるんだよ。いやマジで。告白されたことも一応ある訳で）、そして人当たりの良さとか会話の上手さとか何か色々で、クラスのトップ的な位置にいる奴だ。

金持ちで、ついでに何かよく分からんけどカリスマ性みたいなものも持ち合わせる才女。

私とは結構古い付き合いだけど、大体常に友達の友達的な関係だからあまり仲良くはない。……別に、悪い訳でもないんだけどさ。

別にお互いに話さない訳ではないけど、お互いに気まずい空気を恐れ、今まではどちらかが近付いていくということはなかったんだけどねえ。

「……瀬尾さん、か」

「行かんでええんか？」

「私が本当に瀬尾さんと言ったら泣いて悲しむくせにさ」

「ア、アホ言うな」

若干顔を赤くして反論する春風は、ちょっと必死で可愛かった。

「アホじゃないよ。孤独ってそういうもんでしょうが。……つか、

そついや光村さんって瀬尾さん達と一緒にじゃないね」

「ほんまやな。……席どころか、教室まで動いたんかな」

なんてアクティブ。……な性格には見えなかったけど。トイレでご飯とか食べていたらどうしよう。隣の席の人間として、何となく責任を感じてしまう私であった。

弱肉強食。瀬尾さんを見ると、何となくそんな言葉が浮かんだ。

ぱっとしない私らは、弱肉なんだろうか……。何考えてんだろ私。

昼休みが過ぎると、光村さんはいつの間にか私の隣に帰っていた。授業。ホームルーム。終了。放課後突入。何事もないですよ、もう。結構、人生ってすぐ終わるんだろうね。

クマさん

早いよ。時が経つのが。

夕方ですよ夕方。帰り道は一人ですとも。

春風も光村さんも一人でとことこ帰ってしまい、置いていかれた寂しい可哀相な私。瀬尾の奴もこういう時には全然誘ってくれんですよ。

何となく腹が立って、いつもと違うことをしたくなって。で、珍しく敢えて遠回りになる街の道を通ってみる。

街、とはいっても県の真ん中とかそんなじゃない。ちょっと外れた人のそんなに多くない場所です。若干人とか店の多い場所。この辺では街。それでも町の方がニュアンス的に近いんだろうけど街の方が字の形が好き。それだけだ。

一応政令指定都市に住んでいる訳だから、ちょっと頑張れば人の多いホントの街にも行けるんだけど、流石に一人ではね。寂しさを何とか紛らわす為に無理やり「群れてないと何も出来ないんだろアタラ」的優越感に浸るのも、度々は疲れるからね。

青春まつさかりの連中がショッピングモールでワイワイつてのに憧れないこともないけど、この寂しい感じもなかなかオツなものさ！と自分を慰めつつ。ホントにどこにも寄らずに歩いてると、偶然兄貴と星野先輩に会った。

「あれ、あ、星野先輩、ども。兄貴、何してんの？こんなところで別に。つか、横断歩道の真ん中で立ち止まるなって」

うお。兄貴の指摘で初めて気がつく私。どうも、すぐに周りが見えなくなる癖は直さないといけないな……。

「で、何で二人が？デート？」

「そう見えるか？」

見えない。全く見えない。遠めに見ると同性にすら見えてしまう。して二人とも目に覇気が全くない。ホント、似たもの同士である。色気もクソもない。ザ、健全。

まあでも、星野先輩がただのそこの野郎と同じ扱いなのかというところでもなく、その中性的美人具合は通行人の目をそれなりに惹いているっぽかった。

「釣り合わないなあ、兄貴」

「自覚済みだから」

そう言つて、兄貴は自嘲気味に笑った。

まあ、隣にいつも星野先輩がいる訳だし、ルックスでは劣等感を持たずにはいられないかもね。

釣り合わない、とは言ったけど、兄貴も単体で見れば中の上……か、上の下くらいにはいけると思う。

内面は地味だけど。

「つていうか、ホントに何してたの？ 基本的にこんなところに来るような二人じゃないしさ」

私が聞くと、先輩が若干言い辛そうに口を開いた。疲れの色が窺えますよ。

「……えつとな、探し物というか、人を探してたんだ。瑞樹に手伝つてもらつてな。……見つからなかったけど」

「はあ。人探して、誰を探してたんですか？」

「言えるかアホ。俺達星野家の天敵なんだよ！ 名前なんか出したら一家全員が殺されちゃう」

「マジですか？」

全員殺されるなんて、私や兄貴が言ったら笑い話にしかない訳だけど、星野先輩は冗談みたいな危ない秘密を幾つか持っている

人な訳で。だから、どんなに信じられないような話でも、星野先輩の口から出たものなら信じれるんだよね。

けど、星野先輩は優しく笑いながら言った。

「……半分冗談だよ。怖い奴を探していたのは本当だけだな。で、そっちこそこんなところで何やってやがる」

「え？ 深い意味はないですけど。こう、都会のロマンを感じようと」

「そうか。ここ、都会じゃねえだろ」

カツコ良く先輩が言う。

念を押しておくが、星野先輩は女だ。横顔とか見るとスゲーかつこいいから、たまに自分で思い出さないとまずい。惚れそう。というかもう女でもいいから何かもう何だろ。何というか星野先輩のペツトになりたい。チワワになって甘えまくりたい。ポエムの才能あるかもな私。はっはっは。

「……立ち止まってんのも何だし、帰んね？」

兄貴が言う。見ると、私らは見事に通行人の邪魔になっていた。

街から歩いて数十分。いつもの川沿いの道。葉っぱが風に叩かれて鳴らす音がメイン。それ以外に激しい音が無いのです。イツツ平和。昨日のように何かが降ってくるという訳でもなく平和。人とか間違っても降ってこねーだろうな。

「にしても何か、最近にしては珍しいですよね……この三人で帰るの」

「ホントにな」

星野先輩が肩をすくめる。疲れてんのか、溜息口調の声でしたよ。……普段よりニヤつき顔だから、機嫌はいいみたいだけどね。

「……そういやユイナ、お前さ、居候を連れ込んだらしいじゃん。話聞かせてくれよ」

アルスくんのことか。彼のことはあまり広めない方が良さと思うんだけどねえ。動き辛くなりそうだし。

「まあ、先輩ならいつか……。っていうか兄貴、広めた訳？」

「まさか。こいつにしか言ってるねえよ。笑い話で済む話ならともかく、色々と問題があることだし」

「そっか……」

問題って、彼を居候させることか。ホントは居候がどうだとか言ってる場合じゃないんだけどね。地球が危ないんですよ。

そんな事情も知らない星野先輩が、完全に面白がって聞いている。「ほら、記憶喪失とか色々聞いたからさ。どう巡り合って、どうなってるってどうなったのか」

「……多分、言ったら私が社会的に死を迎えますよ」

ゲームのことを言った時点で笑われた私ですよ。空から降ってきた異世界人の話なんか出来るか！と。

そんな感じで話をしながら、緩やかなカーブを進み……。

「……」

さて、ここで三人同時に絶句である。

何故かって、曲がり角を曲がると目の前にホッキョクグマがいたからだ。

ホッキョクグマというか、白い熊。一緒か。でかいよ。うん。

「……」

……えーと。

ホッキョクグマ。ちなみにここ、北海道ではないです。というか、

北海道にもホッキョクグマはいないか。

アルスくんとかどっちが珍しいんだろう……と、一瞬比べてしまう私。平和だよ、私の頭の中。

とりあえずアレですよ。言わなきゃいけないこと。
私は言った。

「すげー」

「……いや、確かにすごいけど。でも普通、もうちょっと驚くだろうというか驚け。怖がる感じで。社会的に死を迎えない為に」

「……キヤー、とか？」

「うわーとか。怪獣映画で怪獣に向かってすげーっていうエキストラいねえだろ」

「いや、いるかも知れんけど」

まあ、兄貴の言うとおりか。ここ最近、自分の周りに色んな事があつた私は、未知への恐怖とかが薄れてしまっているのかも知れない。

「……あれ？」

それってやばくない？ 恐怖心がなくなるってことは危険を回避出来ないってことですよ。つまり、どんどん巻き込まれ……。あれ、それって私の理想じゃん。

ともかく目の前にホッキョクグマ。二人とも、どうすればいいのか迷っている。むしろ感心している私の反応が異常である。

「……おい瑞樹、どうすんだ。熊だぜ熊。死んだふり？ 死んだふりすんのかな。死んだふりだよな。死んだふり」

「知るか！ と、とりあえず警察呼ぶから。落ちつけ俺ら」

「保健所じゃないのか」

「ああもう良いんだよ大人に任せてさっさと帰れば」

兄貴は早速携帯を手に取り、一一〇に電話をかけようとして、

「させマセン！」

くまさんに携帯を奪い取られた。

「あー！ 俺の携帯ー！」

さすがの私もこれは普通に驚いた。言葉喋ったよ。くまさんが。しかもカタカナ敬語。

ホントにただのクマなのだろうか。

……いや、うん。何というか、もったいぶったけど絶対違いますよね。少なくとも特殊なクマ……的な。

クマさん2

喋りましたよ。クマが。

目の下に出来るあれじゃなくて、動物の方。

白くて、基本的には北極とかにいそうなあれ。ぶっちゃけこんなところには絶対いちゃいけないあれだよ。

そんなクマが、日本語を喋りつつ兄貴の携帯を奪うという珍しい光景。

「……ちょ、ちょ」

目の前のくまさんの行動に呆氣にとられる私、と兄貴と先輩。恐れとかは全くないんだけど、とりあえず驚愕したというか。

「ハハハハハ。オレは貴様らを待ち構えていたのだ！ お前たちはいずれ我々の計画の障害になる存在。危険な芽はすぐにでも摘まないとイケません！ ははは死ねええエ！」

「ちょ、何こいつ、喋ってるよ！ ど、どうしょ。どうすればいいの？」

そして敬語なのか乱暴口調なのかはつきりしてほしい。

私はすべきことを自分なりに考え、気付いた時には携帯電話を開いていた。

「どうすればいいの？ じゃねーよ。写真撮るなって。怒らすとなんかやばそうだから」

兄貴が呆れたように言う。緊張なんか、好奇心とか探究心に簡単に負けるもんでしょうがよ。

そしてクマさん、何の変哲もないタツクルときた。
存在そのもののインパクトに比べ、地味だよ、それ。

でも図体がでかいので、それはそれで強かったりするものであった。

「うおっと」

とか声を上げつつ、余裕を持って避ける私ら。まあ、遅いから簡単に避けれるけどね。

ただ、一発のタツクルで終るはずもなく、二度目、三度目と、無駄の多いタツクルは容赦なく繰り返し返される。

「ゲームじゃねえんだから、もう少し柔軟な動きすりゃあ良いのにな……」

星野先輩が、相手を気遣うような発言をする。

「何っーか、荒削りな動きだ。図体の大きさに頼り過ぎているのは、やっぱり野生の白クマだからか？」

「野生の喋るクマ……。ちょっとワクワク」

「何でそんなに冷静なんだよテメエら！」

兄貴は文句という漢字を表情にしたらこうなるだろう、みたいな顔で言った。

「っーか、そんなことより。剣、どうする？ 呼ぶとしたら警察か？ 案外保健所とかもありかも知れんけど」

「そーだな……。猫友会は？」

「連絡先が分かんねえだろ……」

兄貴は先輩に突っ込みをいれると、ひょいとクマのタツクルを避けつつ、私に向かって言う。

「どういうことだ、これ。昨日の居候と関係あったりしないよな」

「え、いや、関係無いじゃん、それ」

「二日も異常事態が起こったんだ。関連性くらい探るだろ」

「……関連性、ねえ」

強いていえば、私を「地球を救う存在」というアルスト「計画の

邪魔」と私を殺そうとした白クマ。真反対だ。

ちよっと考えてみるモードに突入。色々頭を動かしてみた。でも、まあ、両者が関わっていると決めつけるのはまだ早いかも知れない気がしてきた。

と、そうこう言っている間にもタツクルは続いているのですよ。

「……ちよ、くまさんタンマ、くまさんやめろー。つかこれそのうち呼ばなくても警察来そうだよな」

聞く耳持たず。というか聞こえてないっぽい。警察とかそういう言葉にもクマさんは特に反応せず、ひたすらタツクルを繰り返す。

「わはははは。はははくらえええ！ はあ、はあ……」

ばてちゃった。正直全然怖くないんだけど。ちよっと可愛くさえ見えてきた。

そんな馬鹿にした視線が伝わったのかしらん。

「うおお、こうなったら本気デス！ 行きマスヨ、うおおおおりやあああ！ タイラント北極タツクルうう！」

カッコイイ技名。そして。

——どん。と音がした。重たい一撃を食らったような、鈍い肉の音。

「……そ、そんな、まさか……ほ、星野先輩！」

ばた。

——それは、予想外の結末だった。

ちゃっかり後ろに回っていた星野さんが、ヤクザキックで白クマさんを倒したのだ。

別にクマが弱いつて訳じゃなくて、先輩が強いんだとは思っけども。

「うつわー、痛そう。ね、痛いよね。ちょ、シャレにならない感じですけど先輩」

クマさんは蹴られた脚の付け根辺りを押さえ、のたうち回っている。

「きよ、キョーレツ……」

ヤクザキック一撃で倒れる熊つてのもどうかと思うけど、まあ、助かったっぽい。

せつかくの珍しい光景だったので、ちょっともつたない気もするけどね。

……だって、もうこれファンタジーの世界じゃんか。

動物が喋る。子供の頃の憧れな訳ですよ。こんな形で叶うとは思ってなかったけども。

と、残念がつてる私を置いて、先輩と兄貴は普通に話を進めている。

「……あー、動物愛護団体から苦情とか来たらまずいよな。ユイナ、今のは無かったことにしてくれよ。あ、瑞樹、警察呼んじゃった？」
「携帯奪われたのに、どうやって連絡するんだ」

兄貴が、未だにクマに握りしめられていた携帯を奪い返す。

「そうか。助かった。そこの野良犬でもまずいのに、ホッキョクグマだもんな。しかも言語能力つき」

念をおすが、星野先輩は女である。かけえなこの人。キックでトドメを刺してからこの余裕。

女が惚れるっていうのも分かる気がする。男には……どうなんだろう。ナヨナヨしたのが近寄ってくるか、あるいは「押忍！」とか言う体育会系に慕われるのか。先輩の射程範囲は広そうだ。

「さて、帰ろうか」

「ちょ、コら、待たんかい！」

完全に終わった気でいた私達の足元から叫ぶのは、何とか立ち上がったクマさんだった。

期待の意味でドキつとした私と、面倒臭そうな表情の兄貴と先輩。多分、全部クマさんの望んだ反応ではないと思う。

クマさんは複雑そうな顔をしながらも、どうにか威勢よく言った。

「ははは。まさか、オレが不意を突かれるとは驚きデス。だがし力シ、甘い！ 真の姿を見せてやりマス！」

「し、真の姿だと！？」

ということはということとは……！

「喋るくまは嘘っぱちだったのか！！！！！」

だからどうしたって言われそうだけどき。私にとってそれは、ちよつと悲しい事実だったりする訳ですよ。サンタがいないと悟った時の気分似てるかも知れない。

意外とき、大人が思ってる程、子供にとって、あのお爺さんは実は幻想の産物なのだと知った時のショックは大したことではない。ただ、いなかったのだと。それだけなんだ。確かに少し騙された気分だが、子供はそれで盛大に傷つくほどヤワではないのさ。

けど、その苦味はずっと、クリスマスという日に苦味を残す。

私は、本当にクマが喋っているものだと思うってたのに。それは嘘だったんだっていう。

何の話をしてんだ私は。

「真の姿？ おい瑞樹……うおわ、眩し」

「俺が眩しいみたいない言い方すんな！ ハゲてるみたいだろうが！」

突然、光が世界を包んだ。

いやまあ、多分、包まれているのは世界ではなくて、クマさんと私たちの視界だけです。

幻想的な世界に、少しだけ胸が躍った。揺れる程はないんだぜ。

……と、光が収まったので目を開いてみると……。

おめでとう！ くまさんは にんげんに しんか した！

進化じゃなくてむしろこっちが本来なのだろうけど。

「……いやいや、ちょっと待て！ 変身ってことじゃん！ ちょ、え、嘘、マジで——！」

なんじゃこの感動は。変身。非科学的な変身。きぐるみを脱いだという可能性もなくはないけど、多分変身。というか変身の方が私は好きだ。

変身ヒーローだってどこかにいるのかも。じゃあ、悪の組織も実在するのかな。ワクワク。

……春風に笑われるのも無理ないか。

さてその元白クマ、ぱつと見は、帽子で顔を隠したトレンチコート
の紳士。

しかし、顔を上げると、そこには異常に鼻の長い細目のお兄さん……おじさんに近い……がいますですよ。

その長鼻さんが全くホツキョクグマと全く関係のない見た目だということも驚きなだけださ。

不思議な現象に慣れたとはいえ、ここまで理科の授業で学んだ内容を崩されると、そりゃあね……。あれ？ とはなるよ。

「……何だその鼻は」

そして容赦ない兄貴の言葉攻め！

「うるサイ！ コンプレックスデス！」

「兄貴、あんまり刺激しない方が……」

クマさん、あ、いや、長鼻の紳士はまたもタツクルしてきた。身軽になったからかな、さつきよりも格段に素早くなっている。

芸がないなーとも思うなあ。普通に喧嘩した方が強そうだよなー。そして鼻のことを言っただけいか、兄貴が攻められるのであった。

「……いい加減、読めてきたけどな」

兄貴がぼそつと呟く。……そろそろ決める、的なあれだ。多分。いや知らんけど。

何たつて喧嘩に異常な程強い、男より男らしい星野先輩の親友である。先輩の武道ごっこ（本格的）や修行ごっこ（本格的）に度々付き合わされた兄貴は、意外と普通の人よりは戦いを知っていたりする。

「うオオ、素人にナンカ負けません！」

けど、長鼻紳士もタツクル一辺倒ではなかった。

「喰ラエ、普通のラリアットおおおおお！」

それをひよいと避けると、長鼻の首根つことどつかまた別の場所を掴んで、何かよく分かんないけど投げたっぽい。

「剣！」

「よしきた」

見事な受け身で着地した長鼻紳士を、星野さんが後ろから押し倒して上半身を上に引っ張り上げる。

キヤメルクラッチだ。長鼻が若干涙目になっている。

「ギブギブギブ……」

「しばらくは俺らに手出しすんなよ？」

「しません……から……助けテ……」

流石に見てられなかった。

「せ、先輩、そろそろいいんじゃない？」

「そうか？ 痴漢にはこれくらいいしないと駄目だろ」

「いや、そいつ痴漢ではないと思う……」

それからしばらくして、ようやく解放された長鼻さん。

「フ、お前たちのせいデ、オレは危ウク新しい嗜好に目覚メてしま
ウ所デシタよ……」

「お前たちっていうか、星野先輩だけだと思うけど……」

「デスが……。ソレで勝った気にナルの八間違いデス。お前たちが
普通の人間だから、こうして手加減してあげていまシタが……いい
でショウ！ サイキックを使ってあげマス！」

まあ、言い訳にしか聞こえない訳なんだけど……。

丁寧なんだかうつとおしいのか分からない長鼻が、私に向かって
手をかざす。

「……イキマス」

「……え、イキマスって？ ちょ、まずいつて、ちょ、いくつて何
があああああ！？」

ふわり。

——踏んでいた地面の感触が、急に無くなる。

足が着いていない……？ ぎゃああ落ちるうつ、う……？

いや、逆だ。浮いてんだこれ。

上に。

「……ややややや、いやあああ！　すげえええ！」

「すげえええ！　じゃねーよ！　もうちょい危機感持てお前！」

叫ぶ兄貴の声さえ、遠い世界のものみたいだった。

上空に、そう、空に向かって、落ちている。重力の向きが変わったような感じ。やばい。ジェットコースターみたいに世界がグルングルン回って……。

「わ、わ、わ、ちょ、待あああ！」

そのまま、川へ投げられたらしい。

——バツシャンと飛び散る水の音。体に轟く痛み。

「……痛っ——」

……さすがにヘラヘラできないや。打ちどころ次第では命が危ないって。シャレじなく。

……ああ、そういや、最初から命狙われてるんだっけ。

「……これ、きつとサイコネシスってやつだね」

「その通りデス。スゴイのデス。着地際にわざと減速してあげたのデスヨ？　しかし、次は違いマス。行きますヨ……」

さすがにダメージ。痛いわ濡れたわ何か長鼻だわで、超やばい状況ではある。

ただ、まあ、絶体絶命のこの状況は、私にとっては恐怖ではなかった。

……むしろ、久しく忘れていたこの緊張感……！　高揚した私のこの胸というか心臓らへんの暴走は、

ベシ。

兄貴の不意打ちによって、呆気なく終わってしまったのであった。

「兄貴いいい！」

「え」

「せっかく……せっかく……」

私の人生が、物語みたくカラフルに輝きかけていたのに、さ。

「一応、警察にでも行つとくか？」

「突き出すのか？ こいつ」

「一般人にも逮捕は出来るらしいぜ？」

「……剣。色んなことに首突っ込んでるお前が、交番に顔出しても大丈夫なのか？」

「別に犯罪者でも非行少女でもねえつつの」

こうして見ると、イチャついてるようにも見えなくもない……か。
とか思いつつ、傍観。

とりあえず、交番に長鼻を連れていくことが決定したんだけども。

「スキありいいいい！」

という具合に逃げられた。

逃げていくトレンチコートの背中部分には、小さく「サイキック
団」と書かれてあった。

「……組織の名前か何かかな……」

「結菜？」

「……あいつの背中に書かれてた」

こうして超常的な現象は、私だけでなく、私の周りの人々をも巻き込んでいくのであった。

——大した盛り上がりも見せず、随分と控え目に
激動の日々。……のはずなのに、満足出来ない私がいた。

アルス

「……サイキック団。……私が思うに、これは悪の組織の名前だと思う」

「まさか……。あるわけないだろ」

「今の光景見て、それでもそんなことが言える訳？」

私が言うと、兄貴は一瞬怯み、やや嫌そうな顔で、渋々頷いた。

胡散臭すぎるけどさ、あの長鼻を見た後じゃ、何も否定出来ないよね。私はアルスくんが現れた時から、何かを疑うとかいう発想が無くなってしまっている訳ですが。

「……夢みたいだったね」

すっかり平和になった川沿いを見て、何となく呟いてみる。

ここには相変わらず人がいない。さっきの白クマも、ひよっとしたら私ら以外には目撃されてないかも知れない。……案外、民家から覗いてる人とか多いかも知れんけど。

「サイキック団。……ちよつといいなあ……」

余韻を噛み締めるように言ってみる。そんな私を、兄貴は怪訝そうな顔で見ている。

昨日、星野先輩に意味不明な不思議体験を語り、家に得体の知れない少年を連れ帰った私。

そんな奇怪な私の行動。普通の、常識の中にいる人なら理解出来ないと思う。……けど二人とも、たった今、普通ではない経験をしてしまった。

もう、私と同類だと思う。

「……ね。分かった？　今、世界は変わりつつある。秘密の組織とか、地球の危機とか。……それでも認めてくれない？　私、おかしいの？」

「結菜だけじゃねえよ。……お前がおかしいなら俺らもおかしい。認めるよ、お前の言うこと」

星野先輩が言った。感情を抜いたような、沈むような声。現実味の無い、夢の中の登場人物みたいだった。……先輩なりの混乱の表し方なのかも知れない。

その横から、兄貴は私に詰め寄り、言った。

「どういうことだ？」

声は落ち着いているけど、怒っている。

「お前、何か危険なことに首を突っ込んでんじゃないだろうな？」

「……別に、危険なことじゃないけど」

兄貴の目を見れず、少し目を逸らしつつ言う。

「だったら今の長鼻をどう説明するんだよ。俺らがいなかったらお前、殺されてたかも知れないんだぞ？」

それでも、兄貴がどんな風に怒っているかは大方予想がついた。

「それは……。でも……」

確かに、超能力で相手を浮かせるような相手に太刀打ち出来る程、私は強くない。というか大抵の人はあれには太刀打ち出来ないと思う。

……考えてみれば、すごい危険な状況だったんだ。

「そもそも、居候の件だってお前……」

「瑞樹、落ちつけ」

星野先輩が、私をかばうように私と兄貴の間に入ってくれた。何

だか本物の姉さんみたいだ。

「お前に落ちつけとか言われたくねーっての」

「うるせな。まずは話を聞かないと分かんねえだろうが。なあ、結菜。昨日の隕石の話、もう一回話してみろよ。居候のこともさ」

話すしかなさそうだ。……実際、話したくてうずうずしていた訳ですが。

「……分かりました」

私は、ここ最近あった不思議な現象を全て話した。

パソコンが雷で止まったこと、画面にヤシヤと名乗る何者かが笑われ、ネットゲームに参加させられてしまったこと、そのゲームでおそらく隕石の軌道を変える力が手に入る（まさか消す力ではないと思うからね。この辺は予測も混じっている）こと。そして、アルスくんのこと。

私が、地球の運命を握っている可能性もあるということ。

二人とも真剣に聞いてくれた。そのことが、少し嬉しかった。

「……やれやれ。俺らの知らないところで、地球ラストイヤーが始まってたってわけか」

星野先輩の感覚はよく分からね。

「まあ……ラストイヤーですね」

「……悪かったな。昨日、信じずに笑っちゃって」

先輩は反省レベル四割程度で謝り、分かれ道で私らとは別方向へ帰って行った。

理論派なのに感情的な兄貴と、感覚派なのに冷静な星野先輩。似ているのか真反対なのか、よく分からない。

「……ごめんね、兄貴。受験の忙しい時に、こんななっちゃって」
「別に。……どっちにしろ、将来はあんまり明るくなりそうにないしな」

兄貴はそれだけ呟くと、呆れたように頭を抱えて見せた。

無事に帰宅し、ほっとしたのもつかの間。兄貴は早速、アルスくんを捕まえた。

「ちょ、兄貴、いきなりかい」

「当たり前だろ」

目が点とはこのことだろうね。困ったアルスくん。

「状況が読めないのですが」

そりゃそうだ。

兄貴は自分の部屋に私を集め、ホッキョクグマが「おひよひよひよひよ」と言いながら（実際には言っていない）長鼻になっていたいけな少女（私）を川に放り込んだあげく、倒れつつ背中の子スク団というマークを見せてそのままだに捨てられた（捨てたのは私らである）という話をアルスくんに聞かせた。

「という訳なんだが……どういうことだ、これは」

「どういつって……超能力だとは思いますが」

「それは分かってる。それじゃなくて……ああ、もういい。まず、最初から話を聞こうじゃないか」

ピリピリしている。これが普通の反応なのか。喜ぶなんて稀有なのかね。それとも子供と大人の差ですかね。

という訳で、アルスくんは超能力の概要から、私との出会い、地球の危機、ネットゲーム、異世界の存在、坂本が偽名だということまでを全て話した。

さっき私が一通り言わなかったっけ？ まあ、私の口からだけじゃあ、イマイチ信じられなかったのかもしれないけど。

全てを聞き終えた兄貴は、難しい顔をしながら、ちょっと意地悪な質問をした。

「証拠はあるのか？」

よく言う台詞。よく使われるだけに、その分効果も絶大ですよ。

「あ、兄貴、あんまりいじめないであげてよ……」

「お前が簡単に人を信じすぎなんだっての」

……確かに、一切疑おうなんて思わなかったし、兄貴の言うことの方が正しいんだけどさ。

まあ、証拠があれば解決なんだ。さあ、アルスくん！

「……証拠……ですか……」

ひるんじやったアルスくん。無いのかな証拠。というか、そもそも異世界から来た証拠って、あんまり思い付かないな。

もし私が三十年前にタイムスリップしたとして、三十年前の人間に今の携帯電話を見せても、自分が三十年後の人間だなんて信じてもらえるかは分らない。

実際、そうやってストレンジャーを名乗る詐欺だってあるかも知れないし、アルスくんがそれでないとは断言出来ないけど、でも……。

「証拠が無いなら出て行けよ」

冷たく兄貴が言う。

……それを聞いて、怖くなった。

アルスくんが消えて、私の生活が平凡に戻っていくことが。

ただ何事も無く、平和が戻ってくるのが。

そして、アルスくんが彼にとっての異世界であるこの場所で、孤立してしまうことが。

——頭の中を、瀬尾の顔がよぎった。それから、春風とかその他のクラスメイトの顔も。

超常現象、異常事態。そういうものを当事者として見ていたい。そんな下心は確かにある。認める。けどさ。

私は、アルスくんを……誰かを、一人にはしたくなかった。それだつて善意だけじゃなく、後ろめたさもあつたりするのは認めるけどさ。

戦おう。アルスくんをこの家に住まわす為に。

私は反抗的な目で睨みつけた。

「兄貴、いい加減に……」

けど、そんな私の言葉を、アルスくんが遮った。

「分かりました」

兄妹が今にも取っ組み合いの喧嘩を起こす寸前。アルスくんは立ち上がったのだった。

「証拠はありません。それで出ていけつて言うのなら、出ていきま

す」

少し寂しそうな表情だったけど、口元は少しだけ笑っていた。……

……自嘲的で、それが余計に寂しかった。

「ちよ、地球はどうする訳!？」

「解決の糸口は見つかったんだし、後は任せるよ。……まあ、この町には滞在するし、困ったら連絡してくれれば……」

そしてそのまま出て行ってしまった。

「……え、ちよ、マジで!？ 兄貴、何してくれてんのよ!」

「知らねえよ。元々胡散臭いやつだったろ？ 百歩譲って超能力がありだとしても、異世界なんて俺は信じられない。……これで良いんだ」

「なんで断言できるの! 兄貴こそ、異世界が存在しない証拠とかあんのかよ!」

いてもたつてもいられず、私は部屋を飛び出した。

「おいユイナ! どこ行く気だ!」

「アルスくん探して、連れ戻してくるだけ！」

血が頭の上つる。イライラして暴れ出しそうな感情を、全て足に使って全力疾走。

あのヤロウ、地球を救いに来たんだろうが！絶対にホームレスなんかにはさせないんだから！

アルス2

午後七時。外はもう暗かった。

いつもの川沿いに来てみたんだけど、いない。ホッキョクグマが出るような場所だし、アルスくんとの出会いの場所もここだった訳で。ここにいるような気がしたんだけどね。

……アルスくんどころか、人も、車もない。たまにすれ違う車のライトが眩しい。車とすれ違ってんのかライトとすれ違ってるのが分らない。

午前の雨に濡れた道路が、その光を照らす。

何となく疎外感。……普通の人間は部屋でぬくぬくだろうからね。勝手だけど、考えたら腹が立ってきた。

そしてそんなことはどうでもいいのだ。探さないと……。そういえば、先輩も誰かを探していたっけ。

指名手配犯を探して本当に見つけたり、

ローカルな芸能人を捕まえてサイン書かせたり、

子供のいたずらつてレベルからそうでないものまで、色んなことを教えてもらったっけ。

と、そんなことを考えていると、急にめまいがした。

ぐわん。

え、ちょ、あ……。と、立っているだけでもキツかった。

「……………」

な、何でじゃあああ。どうしたんだ私。本気で頭が痛い。道端に座り込む。

意識がふわふわしている。上手く言えないけど、脳の片方で誰かと話しているような……。そんな感覚。

……誰だろう。多分、知らない人だ。
気持ち悪い。頭が。
体がだるい。
何だろこれ。

自分が起きているのかさえ分からなくなってしまった。悪夢を見ているような、嫌な時間。

「……お前が須上結菜か」
白クマさんの繋がりだろうか。白髪の若者が見える。

——手には鬼の顔をしたお面。誰なのか聞こうとしても、上手く喋ることができない。何だこれ。白クマの時とはプレッシャーがまるで違う。

「……誰？」
「餓鬼に名乗る名前はない……ってのもカッコイイけど、何か違うか。真理を望む者とだけ言っとくよ」

一言絞り出すのもやっとな私に、余裕の表情で彼が言う。
そのあとも何か喋ったのかも知れないけど、生憎その後の記憶が残ってない。

気付いた時には体が浮き始めて、頭は痺れたみたいに全然回らなくて、ふわふわしてきて……。

何？ 死ぬの？ 死ぬのかもしれない。というか既に殺されているのかも知れん。

走馬灯は流れない。流すほど大した記憶を持っていないということとかかもしれない。

——何てカオスな夢なんだろうね。

思えば本当に退屈な人生だった。

高校生で人生なんて言葉は使うべきじゃないのかもしれないけど、それでも……それにしたって空っぽで。本当に何もなくて、同じ年くらいの有名人がテレビに出る度に妬んで、同じクラスの誰かが何かの賞をとったら羨んで、自分には何もなくて、友達もいなくて……。

星野さんと兄貴しかいない。私はあの二人に生かされている。

あの二人だけが私の救いで、あの二人がもしいなくなったら……。どうなるんだろう。

春風と一緒に暗い日々をただ過ごしていくのかな。それは嫌だ。

「……須上さん」

どこか遠いところで、誰かが言った。さっきの白髪とはまた別の声。

「……須上さん」

聞き覚えのある女の声。その声はだんだんと近くなっていき、

「須上さん!」

耳元で、車のクラクションみたいに響いた、私の名前。

「はい!」

思わず返事もでかくなる。

「……あ、おはよー……あれ? 君……」

転校生の光村さんが、倒れた私を覗き込んでいた。

「酔っぱらったのか？ うなされていたが」

「……いや、あの、気分が悪くて……、って、あれ」

頭の痛みは治っていた。気分爽快である。何だったんだろう。今のは……。

しかし、光村さんもうしたのだろう。こんな真っ暗な時に。

……真っ暗？ 自分の思考に慌てて待ったをかける。時計を見ると、時刻は既に九時を回っていた。倒れる前は七時くらいだったから……、

「うお！ まさか。二時間も眠っちゃったのか私」

「ああ。場所が場所だったんで起こしたが。おせつかいだったか？」

「あ、いや……」

むしろありがたすぎて惚れちまうぜ！ 冗談だぜ！ いや、感謝はしているけどさ。

「……ところで、光村さんは何してんの」

転校初日だよ。この場所に来てから、まだ時間は経ってないはず。なのに一人夜の散歩って渋いな、おい。

「端的に言えば人探しだ」

「人探し？」

星野さんも同じこと言ってたな……。

「……心配いらない。貴女とは別件だから。サイキック団とか、そういう世界とは何も関係がない」

それだけ言っと、光村さんは去って行った。

サイキック団。その名を聞いて、私は一瞬動揺してしまう。

「え、ちょ、待って！ 何でそれを知ってるの？」

私の言葉は夜の静けさに飲まれた。

……まるで、倒れてからの二時間、全てがキツネか何かの悪戯だったんじゃないかって、そんな気さえしてきた。

「……んなことはどうでもいいんだった」

今は、アルスくんを探さないと。

時間も時間なので、携帯に家族から心配メールでも来てないかと思つてメールボックス見ると、一通だけ兄貴からメールが来ていた。届いていた。「はよ帰れ」だって。大して心配してないな。ちょっと残念だったりもする。しばらく歩いていると、家の近くの公園のブランコにアルスくんがいた。

…… 案外簡単に見つけてしまった。

「あ…… ユイナ…… さん」

「さん付けはしないで」

「…… ごめん」

私は隣に座った。何となく、カップルみたいなことをしてみたい気分だったんだ。

「…… 兄貴の言ったこと、気にしなくてもいいんだよ?」

「事実ですから」

「それはそうだけど……」

「いいんだ。元々、こうなる予定だったし」

そういうもの。なのかな。

異世界人がやってきて世界を救う、みたいな都合の良い物語のようにはいなくて、遠い世界から来た何か変なのは居場所も無く、孤独に戦っていくっていう。

…… ホントにそれでいいんだろうか。私は兄貴の考え方が分からなかった。

アルスくんが私を騙す理由なんて何もないじゃん。金目当てだっ

たらもつと金持ち狙うだろうし、エロ目当てだったら……確かに居候はきわどいかもしれないけど、それならわざわざ私を選んだりしないだろうし……。

「ああもうバカ兄貴！」

別に兄貴でなくても良かったけど、怒りの対象は他になかった。

「……あんまりお兄さんを責めないであげてくれないかな。ユイナのことか心配なんだよ、あの人は」

「まさか。固い頭で固い結論だただけよ。そのくせ感情的なんだからさ」

少し愚痴っぽく私が言うと、アルスくんは少しだけ笑って、私の顔を優しく見つめた。

「……兄って不器用なもんだよ。僕にも妹がいるから、あの人の気持ちはよく分かる。……妹の心配するのって、本当に照れくさいんだ。だから素直に言えない。それだけだよ」

私を妹と重ね合わせているのかも知れない。……重ねられる方からすれば堪ったもんじゃないけど、彼の寂しさを紛らわす為なら仕方ないか、と笑ってみる。

「だからホームレスになろうと思う。お兄さんの意思も尊重したいから」

と言って遠い目をするアルスくん。いやダメだって。主に衛生面で。

「……兄貴は私が説得する。君に万が一のことがあったら、誰が地球を救うのよ」

「……でも」

「でもない。ほら、帰るよ」

無理やりアルスクンの手をとって家に向かう。渋々抵抗を止めたアルスクンの顔には、戸惑いの表情が浮かんでいた。

「……ユイナ」

「ん？」

「……何というか、……ありがとう」

星野さんと兄貴しかいない？

馬鹿言っなよ私。

春風もアルスクンも、起こしてくれた光村さんとか、あれもこれも……なんか、中学時代の先生とか、あと……まあ、数え切れないくらい沢山いるのにさ、贅沢ばかり言っなよボケが。

アルス2（後書き）

11月17日。高校生の戦場。この話まで書き直しました。
内容はほぼ変わりありません。スンマセン。

続・高校生の戦場

一睡もしなかった。

……睡眠時間をネットゲに費やしたからね。

寝ぼけた頭を何とか覚醒させ、リビングに辿り着く。

「……寝てないからオハヨーは言わないよ」

「馬鹿」

「どーせ兄貴には分かんない苦労だよ」

止め時がなかったんだから仕方ないじゃんか。

兄貴は何を言う訳でもなく、ただ無言で溜息をついた。

……分かってないな、兄貴も。

そんな感じで朝っぱらから私と兄貴がメンチ切り合っていると、

アルスくんが起きてきた。

「……おはようございます……」

顔が半分寝てんだけど。

「……何でこいつまでこんなに眠そうなんだよ」

あきれ顔の兄貴。

アルスくんは私のネットゲを一晩中見ていて、時々アドバイスとか

貰っていたんだけど……、

兄貴に言っても仕方ないだろうなあ……。

くそ、真面目な人間はこれだから……っ。

「……そっぴや、ユイナ」

兄貴がどうでもよさそうな声で呼びかけてきた。

「……ん」

「お前の学年に転校生とか来た？」

「来たよ？」

「名字、光村だったろ」

「……うん」

こ、これは……何かのイベントのフラグ？

「……星野からの伝言で、『気をつける』だとさ。意味までは聞いてない」

キタ！ 謎ワード！

一瞬ときめいてしまった。だって『気をつける』だって！
かつこいいにも程がありますよ星野先輩！

興奮冷め止まぬまま学校へ走り、とりあえず教室で寝たフリしながら光村さんを待つ。

何があるんだろう。何かあるはずだ。

そつえば光村さんとは昨夜、外であつたつけ。

……あの子、いや、子つていつちゃあいけないな。

あの人、雰囲気も何となく星野さんに似ていたような気もする。

何だろ。親戚とか？

……それじゃあつまらないな。宇宙人とか何かそんな……な訳ないか。

曇りの日つて、陰気な中にも妙な暖かさというか、ぬるさがあるよね。

……あああ——……。みたいな心境。

こういう時、何となく横に誰かがいて欲しいと思う。

何を思っているも、何をやっているも、教室に一人にいる時なんかは孤独を痛感する時だってある。ノイズィーな教室に居て、私は一人、今日も妄想にふけっているのである。

……春風が来るまでは。

「よ、ユイナ」

よ、のイントネーションに芝居つばさがにじんでいる。
そんないつもの声が後ろから聞こえた。

春風の声。

彼女は若干俯きながら鞆を机の横にかけ、ため息をつきながら席に着いた。

エセ大阪弁の少女は今日も、私と同類のオーラを出しながら文庫本を読むのだ。多分。

思えば私は、それぞれが一人ぼっちだった。互いに人見知りだから、互いに一言も喋らずに同じ時を過ごすこともあった。そして……それでも偶然が重なり、いつしかこうして友達とは言える仲になっていった。決して深い仲ではないけど、今はそんな間柄も悪くはないと思っている。

少なくとも、瀬尾さんをはじめとする「ちょっと輝いてんだけど俺達あたし達グループ」（名付け親、私）とのピリピリした関係よりはマシだ。

弱いモノ同士でつるむような連中に共通しているのは、自信の無さだ。

そして逆に、輝いてんだけど系の連中には慢心にも近い自信がうかがえる。

いいよ、自信なんて無い方が謙虚さアピールできるし。

朝から哲学的な自分をちよつとかっこいいと思ったことに自己嫌悪。

ひっくり返すようだけど、やっぱり自信持ちたいなー。

「……そういや、ユイナ。結局隕石とかってどうなったんや」

何気なく聞こうとしたけどやっぱり演技くさくなっちゃった感じで春風が聞いてきた。

「やっぱり春風も興味深々じゃんか」

よし、聞かせてやるうではないか。昨日のホッキョクグマ、長鼻、兄妹喧嘩に光村さんのこと……、

「あ」

ふと気付いて光村さんの席を見ると、彼女は既に自分の席に着いていた。

「あああ！？　しまった、忘れてた！　春風のバカ！　アンタのせいだ！」

「は、はあ？　何がや？」

「こうなったら春風にも手伝ってもらうからね！」
春風にげんこつを一発いただきました。

「……暴力女め、関西人は口は出しても手は出さないんじゃないの？
たのかよおお！」

「関西人ちゃうし」

「ちやうんかい！」

「何でアンタまで関西弁やねん」

色々謎だね、この女も。

と、そんなことより光村さんを眺め……待てよ、これって何かストーカーとかそんな感じに……まあいつか。

見たところ、朝の光村さんにな変わった様子は見られなかった。

「……春風。サンタがいなくていつ知った？」

「……小学校に入った頃やったと思う」

「そうか……。私は、ひょっとしたら今なのかもしれない……」

「……っふ」

鼻で笑われた。もちろんここでいうサンタは比喻だ。比喻なのだが……。

こいつに伝わるはずもなく。

「いや、もちろんほんまにアンタがサンタを信じとったから笑ったんやのうて……。その、アンタならありそうやったからな」

失礼な。

……いや、確かにそう思われてもおかしくない言動はしてますが。

私がしたかったのはサンタの話じゃなくて、期待と裏切りとでもいおうか、何というか……。
何だろうね。

昼休憩。春風と弁当を食べていると、慢心グループから瀬尾さんが歩いてきて、私に話しかけてきた。

「ちよつといい？ ……須上さんって、三年の星野先輩と仲が良かったと思うんだけど……」

「え？ あ、うん。そうだけど……」

瀬尾さんが私に話しかけてくるのはよくあることだけど、モノを聞いてくるなんて珍しい。

「その星野さんって人、どんな人が教えてくれない？」

「何で？」

「何か、知り合いの知り合いがその人のファンらしくてね？ ……」

向こうにメモあるから、来てくれない？」

「はあ、ファン？ ……まあ、いいけど」

席を立ったその時。

——春風が一人になることに気が付いた。

「……どうしたの須上さん。早く来て」

慢心グループはぶっちゃけ輝いている。

私だってあの輪の中に入りたいと思ったことも少なくはない。だけど、春風を一人には……。

一年生の時、瀬尾さんと春風の間には小さなトラブルがあったと聞いたことがある。

瀬尾さんは誰とでも分け隔てなく仲良くする人間にも見えるけど……、

いつも、春風のことを目の敵にしているんだ。

私にしかついていけない話題を切り出したのも、私を席から立たせようとしたのも、夕飯のおかずが何か一瞬気になったのもルービツクキューブの面が揃わないのも隕石も、多分、全ては春風を一人にさせるため……！

（ハナからツツコミは求めていないし、面白いつもりもない。しかし私はこのボケによって自分を落ち着かせ、かつ和みムードを自己の脳内に生み出そうと以下略。反省はしていない）

でも、逆らったら私まで……って、それは今でも半分該当するくらいいいけどさ。

でも、こう、クラスの権力者だから何と言うかあれですよね。どれだろ。分かんねーや。

私はその場に止まったまま、口を開いた。

「……あの、瀬尾さん？　ここで描いちゃダメなの？　実は私、朝から足の調子があれでしてね」

足の調子があれって何？　どれなんだああ！？　とは自分でも思いますよ。

「……そつか。何か無理にごめんなさい。……別の人に聞いてみるから、バイバイ」

そのバイバイは、まるで誰かを崖から突き落とすような圧力が含まれていた。

もちろん怖くはない。ないけどさ。

すつきりしない。どうにも劣等感が湧いてきて、悲しくなる。

ホントはあいつらに憧れでも持っているのかも知れない。……というか、持ってるんだよ、きっと。

「……なあ、まさか、ウチに構って向こうに行かんかったんか？」
春風はひどく不安そうな声で聞いてきた。

私はちよつと悩んだけど、首を横に振ることにした。そして、
「……私、小金持ちだから。だから大金持ちが嫌いなんだよね」
意味不明な台詞を、頑張ってかつこよく言ってみた。

「……はあ……？」

しばし沈黙。滑ったような私の発言。……反省はしていない。

多少空気が読めなくても、私は私なりに居場所を作って楽しめばいいんだ。ちよつと空気が凍ったり、何か收拾がつかなくなったりしても、私なりに楽しめれば……。

いや楽しめねえよ沈黙は。

で、そんな空気を壊したのは、春風でも瀬尾さんでもなかった。

「聞いていたんだが……。須上さん。あなたは星野という人物について詳しいのか？」

忍者よりも忍者らしい動きで、後ろからひよっこりと光村さんが現れた。……って、

「ぎゃあああああ！」

声がデカ過ぎたことくらい自分でも分かりますよ、ええ。

慢心グループも含め、誰もが私と光村さんに注目し始めたのが分かる。

「み、みつ、みつ、み、みみつ」

「光村だ」

だって、星野さんがアンタに注意しろって……！
もう遅いや。

おそらく、これが真の意味での光村さんの教室デビューになるよ
うな、そんな気がした。意味は自分でもよく分からん。

大江山伝説の余波

光村さんに星野さんのことを聞かれた訳ですが。

星野さんについて知っていることといえば、性格とか歳とか、そんなありふれたことしか知らない。兄貴が好きだとか、やたらギャルを否定することとか平安時代が好きとか。んな細かいことは説明する必要もない……はず。

「……んー。十七歳で、男みたいな女というか」

「あなたが星野について知っていることはそれだけなのか？」

「だけってことはないけど……あの、えつとですねえ……」

だつて『気をつける』だよ？ 私、アンタに気をつけなきゃならんのですよ？

特に、星野さんのことについては多くを語るべきでない。あの人の知り合いの中でも知っている人は少ないんだけど、あの人、本当に危険な世界にも片足突っ込んでんたもん！

まあ、そこがまた良いのだから！

「嘘は得意ではなさそうだ」

光村さんはそう言うと、私の目を訝しむようにじーっとなんとなんと見つめて、私の言葉を待っていた。催眠術でもかけられそうで怖いんだけど。

「……星野剣は私を恐れている。だから詳しくは語れない。そういう解釈で問題は無いかな？」

な、何でそんなん知つとんじゃこいつ！

「……図星か。まあ、そうだろうとは思っていた。あなたとは、またいづれ長話することになるだろう。さらば！」

「さ、さらば！？」

多分、クラス全体が光村さんの頭を疑ったことだろう。……私を除いて。

星野先輩と話してみないと、何も分かりそうにないなあ。

「……え、光村さん、昼の授業は？」

「誤魔化ししてもらえないか」

嫌じゃボケ。心の中でささやかな反抗を試みた。

放課後。日が傾いてから、私は星野先輩に会う為、三年生の教室に向かった。

教室にはほとんど誰も残っていなかった。帰宅部の星野さんがここに残る理由も無く、帰ってたらどうしようかなーと。そんな不安は必要無かった。

先輩は一人だけ、険しい表情で外を見てた。ほんわかふわつとしたボブカットに、それに似合わぬ尖った目付き。仙姿玉質ってやつだ。使いたくて仕方が無かった四字熟語。

「あ、星野先輩……」

と、教室に入ろうとし、

「ちよつとアナタ、邪魔！」

「うげっ」

後ろから走ってきた二年生。というかクラスメイトが私を突き飛ばし、星野先輩に手紙らしきものを突き出しながら頬を赤らめて俯いた。目がスゲー。汗もスゲー。追っているのか追われているのか。飢えたライオンみたいな焦りが感じられる。

「星野先輩！　ずっと前から憧れてました！　私のお姉さまになって下さい！」

……うわあ。と口から出そうになって堪える。

色んな意味で言葉もない。何と言うか、実際にああいう輩がいるんだなーとか星野先輩が女にモテるっていうのは本当だったんだなーとか色々思うことはあるけど、うん。

「あたし、諦めませんから！」

彼女は星野先輩に泣きながら言うと、そのまま走って私をも一度突き飛ばし、影から見守っていたらしい瀬尾さんにしがみついて泣き続けていた。

「……！？」

な、何で瀬尾さんが。と思わず怯んでしまった。

いや別に不思議な話って訳じゃないけど、不意に苦手な相手が見えた時と違ってドキつとするじゃん。ヤバ。表情に出てなければいいけど……。

「……………」

「……………」

何か睨まれた。そんなこんなで私と瀬尾さんの視線が交差する。

そういえば、瀬尾さんは昼間に星野さんの情報を集めていたっけ。あれはあの子、いや子って言っちゃいけないや。あの人の為だったのか。

そういう面倒見のいいところも、彼女の人望の厚さの理由の一つなのかもしれない。

……でも。

偏見かもしれないけど。それでもやっぱり何となく「利用している」という風に見えちゃうんだよね……。フラれたあの子のことも、周りの仲間達のことも。

「おい、ユイナ。俺に用があつて来たんだろ？」

乱雑な男口調が、私の意識をこの三次元へ呼び戻す。容姿を誉めた後であれだけど、兄貴にとっても似ている顔。でも兄貴はそこまで美顔じゃないし。不思議なものである。

「……はい」

教室の外から適当に小声で返事しつつ、最後にもう一度だけ瀬尾さんを見る。瀬尾さんは私を再びキツイ目で睨んだ後、母親のような表情で、泣きじゃくる同級生をなだめながら去っていった。

瀬尾さん。……あの人とは、なかなか上手いことやっていけない

な。

気持ちを切り替え、星野先輩の元へ。確か、その隣は兄貴の席だからそこに座る。

「兄貴は今日は先に帰っちゃったんですか？」

「アルスが家にいるのが気になって、早く帰りたいってよ。それより、何で俺に会いに？」

星野先輩が言った。

「いや、何が『何で』ですか。光村さんについて、もう少しちゃんと説明して欲しいんですけど」

気をつける、だけの忠告も確かにシビれますよ。けど、そんなだけの理由で転校生を奇異な目で見たり疑ったりするのは流石に後ろめたさがある。犯罪者という風でも、隕石と関わりがある風でもない。確かに言動は若干変だけど、そんな同級生をどういう風に気をつけないければならないのか。その辺を知らない。

「……なあ、正直に言っと」

星野さんが、やや言い難そうに口を開いた。雰囲気的に告白っぽいよ。愛じゃなく、罪の。

「隕石とか光村とか色々関係することで、お前に見せなきゃいけないものがある」

刀とか持って腹を切りそうな、気迫のこもった声。面と向かって受け止めきれないような恥ずかしくなる真剣さっていうか何というか。

剣さんは続ける。

「それを見せたら、お前の俺に対する考えが変わっちまうかもしれない。ひょっとしたらお前の中の世界がひっくり返っちまうかもしれない。」

れない」

面と向かえなかったけど……。流石にこの真剣な空気を壊す私ではないよ。うん。飲まれたくないから空気は読まないようにしてるけど、今回ばかりは空気は壊さない。

ひっくり返り上等！ 覚悟オツケーでございやすよ……。あれ？ 色々ぶち壊したな。と頭の中で面白くもないコントを繰り広げていないと、今、ワクワクとドキドキとバックバクに押し潰されて死にそうなんだよ。

そんな興奮状態の私の心臓をさらにバックバクにするように、星野先輩は言う。

「無理なことを言うようだが、何があっても俺を信じていて欲しい。

……駄目か？」

「全然駄目じゃないです！」

考えるより早く、口が動いた。

「もう何でもいいですよ。こんな漫画みたいな展開が続いてくれるんなら、私はどこまででもついて行きますからさ！」

ででーん。

連れて来られたのは、でっかい和風の家。木ですよ、木。住宅街の中にあつて一際目立つ、家というか屋敷というか。

「どおおおおお！ スゲえええええ！」

思わずそんな声も出る。デカイ。デカイしスゲー！ ここまで来るとヤクザの家という可能性も出てきちゃいますよこれは（イメーシと偏見の世界だけどさ）。……。どうしよう。

「星野先輩の家……ではないですよね？」

「元実家」

元……という言葉に、当然引つ掛かる。元実家？ 親の離婚とか、不幸な出来事とか、何かそんな事情でもあるのだろうか。

表札に書かれていた名字は「星熊」。星野ではなかった。しかし熊と聞くとどうしてもあのホッキョクグマを思い出してしまう。

表札も立派ですよ。我が家のかまぼこ板とは格が違うよとんでもねえ！

「……つーか、珍しい名前ですよね……。セイユウ？」

「名字で音読つて、普通しねえだろ。ホシクマだ。歴史は平安時代にまで遡るんだぜ」

「あー……。だから平安好きなんですか？」

「影響は受けてるだろうな。まあ、知識はあまり吸収出来なかったが」

勝手に門をくぐり、勝手に家の中へ。置いて行かれないように、私もそれについていく。

「ばーちゃん、おるー？」

静かな家の中に、先輩の声が響く。

「はいはい？　ありや、剣ちゃんやないの。どうしたん。友達連れて来たんか？」

「違うけ。こいつ、この前言っちゃった隕石から地球守る子や」

「ああ、こげん可愛い子やったんか。あたしゃもつと大柄なデカイん想像しよったけえ」

「家ん中入れてもええやろ。トオルにも会わせてみたいしな」

「あん子最近あれちよるけえ、あんま刺激すなよ」

「おう、分かっちゃあらあ」

どこの方言だこれ。何か色々と混じってないか？　まあ中国地方を一通り回れば、これくらいの訛りは普通に習得しちゃうかも知れんけど。

『ばーちゃん』との話が終わると、星野先輩はズカズカと家の中へと進んでいった。私も慌てて追いかけようとして、

「ちよい待ちい。話しときたいんじゃが」

和やかな声で、ばーちゃんに呼び止められた。

「……はい？」

怖い人ではなさそうだけど、家の雰囲気とかでどうしてもプレッシャーがかかる。

「剣ちゃんはある言っちゃったけど、アンタ、やっぱりあの子の友達やろ?」

「は、はあ。まあ。こ、後輩です」

「同じようなもんや。でな、アンタに言つときたいんやけど……」
分かったから早く言ってくれえええ。謎のプレッシャーが追い詰めるぜ私を。

「あの子、ちょっと凶暴なところもある思っんやけど、見捨てんといてあげてな」

……あれ、終了?

「え、あ、はい。大丈夫ですよ」

「……そかそか。何や安心したわあ」

アニメとか映画で時々ありそなシーン。何か、こう……、そういうのは兄貴に言ってあげて欲しいな。と思った。

ばーちゃんに案内されて、一家が団欒するのであるう広い場所へ。テレビ見ながらお茶飲んでいると、星野先輩が誰かを連れてきた。弟……? それか従弟か何かそんな感じの関係? に見える。

「離せよ、姉さん! オレはもう一生あの部屋で過ごすんだ!」

この家の住人。で、引きこもりかな。

「うるさいな。地球はあと一年じゃ終わらねえんだから、一生あの部屋でなんか言っんじゃねえ!」

「いや、俺が終わらす! でっかい隕石で……。って、誰だそこのお茶飲んでる奴!」

「え、あ、こんにち……は!?」

ぶへらっ（お茶を吹き出した音）。

その少年の顔を見て、思わずお茶を吐き出してしまった。

いや、こうなるのも無理ない状況だよ。だってさ、その少年って、あのネットゲームの主催者……」

私が指を差して言うと、向こうも驚いたように目を見開いて私を見た。

星野先輩は溜息交じりに私と彼を見て、もう一度溜息をついた。

「……こいつの名前は星熊^{ほしくま}透生^{とある}。ヤシャって自称してる、俺のイトコだ」

ってことはこの少年は、私のパソコンに映ってた人で地球に隕石を落とそうとか考えている人で、知ってか知らずかアルスクンを呼び寄せちゃった人で……。

「……いやいやいや。混乱する思考と感情の中で、一言言っておこう。」

胸が熱くなりますよね！

大江山伝説の余波2

前回までのあらすじ！

ラスボスは先輩のイトコだった！

「な、何だつてええええええええええ！」

「姉さん、誰だこいつ」

イトコでラスボス……透生くんが、私に向かって指を差す。星野先輩は何となく申し訳なさそうに頭を乱雑に掻きながら言う。

「こいつは地球救済者。俺の味方で、お前の敵だ」

「はん！　口だけなら何でも言えるっつーの。地球を救いたいなら俺のやつてることに関与したいなら帰ってゲームしとけよ。鍵はゲームの中にあるっていうのにこんなところで油売つつてる。そんな奴が地球を救いますなんて、ふざけた奴だな」

あの私まだ何も言っていないんだけど……。

ごめん、ごめんいやマジで。とりあえず心の中で謝ってみる。

何故って、星野さんや透生くんやアルスくんやホッキョクグマや光村さんが何か暗躍している現状で、私ときたらパツパラパーで何もしてない訳だし。……ということは、何かしていいってことなんだよね？ 地球を救うとか。

「先輩！」

とりあえず叫ぶ。星野先輩と透生くんは急に響いた私の声に驚いてひっくり返りそうになっていた。

「な、何だ、ビックリした」

「状況をちよつと整理してもらえますか！ 私は何やかんやで常識人みたいです！ 現状についていけません！」

星野先輩はノーと唸った後、これまた急に真剣な目つきで言った。「分かった。けど、ついでに俺や透生、そしてこの家のことを話しておく。今回の騒動には、俺達の一族が深く関わっている」

そうして先輩は話し始めた。

それは嘘みたいで信じられない、でも漫画の世界みたいで、私が憧れ続けたような話だった……。

時は平安。当時の大江山には、酒吞童子やら茨木童子やらいふ鬼を筆頭に強い鬼が結構いて、それを退治しようと人間が動き出して何とかかんとか。この辺にはあの金太郎さんが関わっているとかいないとか。

で、鬼が退治されてめでたしかつていうと、そうでもない。

鬼にも子孫がいた訳で。逃がされた者、逃げ切った者。生き残った子孫達は後世に力を残す為、自分達のことについて少しずつ研究を進めていった。

何代にも渡って、ひっそりと。彼らは長い時間をかけ、自分達の持つ鬼の力に様々な力を組み合わせ、改良を続けていった。科学や医学、超能力を研究、応用し、そしてついには鬼の力を軽々と凌駕したすげえ力、その名も超鬼の力を完成させたのであった。

「ネーミング、やたらシンプルですね。超ですか」

「……誰も、他に思い付かなかったんだ」

現在、鬼の子孫は皆、体内に超鬼の力を含んでいる。だが、力の量には個人差がある。才能と同じである。

「で、何故か超鬼の力を誰よりも使いこなす透生は、このとおり引きこもりライフをエンジョイ中だ」

苦労がにじんだ目をこすり、先輩が言った。

「エンジョイなんか出来るか！ この疎外感が姉さんとその地球救済者に理解出来るのかよ！」

反論する透生くん。……人によっては屁理屈だと思えるかもだけど、私は彼の感情が何となく分かった気がした。

教室では大体一人で、もっと孤独な春風と昼飯を食って、イケてる側の女子からは時々笑われ、何かもう何もかも嫌になってフィクションに逃げた。……私とて、一歩間違っていれば引きこもりにな

っているかも知れないんだ。

「透生の超鬼の力は隕石を操るほど強かった。そしてそんな透生は世間を恨んでいる」

「地球終わりましたね」

「おいおい、お前が言うなよ！」

先輩が言うけど。いや、だって……ねえ。

まあでも、あっさり終わったと言ってしまっ辺り、私も案外この星に興味が薄れているのかも知れない。……いや、どっちかつーとまだ迷いがあるのかも知れない。

実際に透生くん……ヤシヤと出会って、その迷いはさらに深まった気がする。

大江山伝説の余波 3

まず、ここどこ？ っていうのが第一印象。いや教室なんだけど、足の感触が無いというか、浮いてんだよね何故か。

幽体離脱かと思ったけど違った。……夢かな？ これ。

教室では、生徒が自由にグループ作って座ってた。そんな風にグループを作ってないのが十人くらい。須上結菜もその中の一人だった。窓の外には桜。

隣には春風。この世の全てを敵に回すような尖った目付きをしながら、ちっちゃくなって弁当を食べている。

「……」

多分、始業式から数日後の昼休み。

私は何度か、春風の方に黒目を動かした。話しかけようとして躊躇っている。そんな感じでチラチラ、とね。

現実と同じ道筋を辿るなら、ここから意を決して小声でそっと話しかけたはず。一応、私はそれまでも顔見知りではあった。けど、尖った目付きが何となく好きになれなくて、ずっと避けてしまっていた。

けど他に話す相手もないし、諦めて春風に話しかけなきゃ孤立するような気がした。

「……あーの、桜木さん？」

意を決したか当時の私。確か、舐められないよう、自尊心を意識した声で話しかけたんだよね。意識し過ぎて、私以外にはけだるそうな声に聞こえたかも知れないけど。

「何や？」

ギョ。とか擬音が出そうな表情。吠えるチワワ。私の警戒心が抜けていく瞬間。

相手が警戒すると安心するっぽいぞ私。

確か星野先輩の従弟と時……というか、そうだ。星野先輩の元実家にいたんだった。じゃ、やっぱり夢か。記憶を正確になぞり過ぎな気がするけどね。ノンフィクションだわ。

軽くなった私の表情を見て、戸惑いいつも表情を軽くした春風。

……と、その後の記憶が不安定なせいかな、そっからの会話は少々あやふやだった。

夢のほころびというか、そんなんが見えた。多分これも、私の想像から生まれてるんだろうね。夢にほころびがあつたらいいなと思つたから出てきただけ。つくづく脳内は自由だ。

この世界に、いつまでも浸つていたいんだけどね……。

と、ほころびが消えた。会話が具体的になつていく。

「……で、ルックスは最高。実家はやや貧しいがそこがまた良い。

テストはいつも平均から上位辺り。スタイルもエロい。しかし空気が読めない。……桜木春風監察日記。作、須上ユイナです」

「涼しい顔でよく言えるな」

「まあね。私は君が一人になる理由が分かる。けどさ、自分がどうして一人なのが全然分らないんだ。なるべく愛想は良くしてるつもりだし、それなりになじもうと努力したのに。……そりゃ、人見知りだけど……」

「奇遇やな。ウチはアンタが孤立する理由が分かる。せやけど自分が一人になる理由は一切分からん」

「……何やかんや言つて、今、私達は二人で話している訳だけどもね。だから、何と云うか……さ。お昼、一緒に食べてくれない？ 瀬尾さんと仲良くないから、どうもあっち馴染めないんだ」

ほんの数か月前のことだった。クラス替えして、友達がいなくなつて、疎外感にほぼ飲まれたあの春。

桜木春風は、私の春を全力で嘲笑っていた。本人には何の意図もないはずだけどさ、桜とか春とかいう名前を持つ人が暗い顔して一人で座つてんですよ。

春の変化、別れ、寂しさ……要するに負の部分を、全身で物語っているように思えた。

正直に言つと、もつと良い友達が出来たら切り捨てよう、なんて心のどこかで思っていた。

けど、いつの間にか春風の良いところや面白いところも見つけちゃって、気付いた時には相棒同士だった。二人で話して、二人で陰にいて、何と言つか二人なのに孤独で……そんな、傷を舐め合うような最低の関係。

二人揃って顔だけは可愛いからさ、時には幻想を抱きがちな男子から告白されることもあった。お互い全部振った。理由は分からない。

「……なあ、ユイナ。もし地球が滅ぶとしたら……アンタならどういする？」

「……ざまあつて言つて笑うよ。だって、こんな世の中はつまらない。生まれ変わったら、宇宙旅行が出来る星で暮らす。……それが、当面の夢かな」

「はにや？」

——夢が覚めた。ここはリアルだと感じながらも、何となく目を開けない。名残惜しいし、現実に戻りたくないんだ。

そうだよ。ざまあだよ。隕石でドーンってなっちゃうならざまあだよ。

地球が隕石で滅ぶのを食い止めるのが私の役目。アルスくんに言われて、星野先輩に言われて。それでその気になってた。けどさ。

嫌なことも楽しいこともチャラにする。……それはそれで、素敵なんだよきつと。

誰も楽しまない代わりに、誰も悲しまない。誰も生きないけど、誰も死なない。そんな世界。平和。

透生くんはあれだよ。ピースメーカー。平和をもたらす者っていつても間違いないんじゃないかなと、半分本気で思うよ私は。

「……ぬー……？」

そういえば今何時だっけ。朝だっけ。昨夜の記憶も思い出せない。どうしたんだろ私は。というかさっきからベッドが揺れて……いや、これベッドじゃねーな。

「って、星野先輩？」

「……起きたか？」

私がベッドだと思っていた場所は、星野先輩の背中だった。

あー。透生くん家で眠っちゃったのか私。昨夜は一晩中ゲームしてたし。

……ってことは、星野先輩の元実家からの帰り道か。

遡ること数時間前。

透生と話した後のこと。星熊家のばーちゃんは先輩が友達を連れてきたことがよほど嬉しかったのか、なんか御馳走とか作って私と先輩をもてなしてくれた。

「透生も一緒に食わんかー？ ……聞こえてないかねえ。剣ちゃん、ちよっと呼んできて」

「はあ？ まあいいけど。透生、飯だつてよ」

「うるせえな！ 外には出ないって言ってたんだろ！」

「串カツだけど、それでもいいのか？」

「っ！ ……仕方ないな、出るよ」

「出るのかよ！」

長方形のテーブルには串カツとグラタンが並べてあって、なんかすごかった。

座布団に座るという日本っぽいのは私にとっては新鮮で、もうなんか気分的にはパーティ直前みたいな感じだった。

で、何故か透生は私の隣に座った。

「ええええええええ！？」

「ええええじゃねーよ」

そこに箸が置いてあったから仕方ないんだけども。

いや、でも地球を滅ぼす人と救う人が隣同士で飯を食うってどういう状況よ。

そして無言。ばーちゃんと先輩は学校の話とかしていたけど、私と透生は何も喋らず、黙々と串カツを食べていた。

……怖いって。いやいやいや。何も怯えることなんてないんだけども。

コップを持った手が震えて、水面が踊ってます。どっちかというと人見知りだからね。相手がただの一般人でも、多分同じことになってたけども。

気付かれない程度に、チラ、と目線を映してみる。

「……！？」

向こうの持っていたコップの水も震えていた。そんでもって表情は固い。

「……緊張してる？」

こっちがそうだからこそ、思わずそんなこと聞いちゃう。無言。

……じ、地雷踏んだ？

「し、してたら何だよ。大体、そっちも……」

「……そりゃ、緊張してるけど……？」

「……」

「……」

お互いに顔を見合わせて。徐々に相手に慣れてきて。で、どちらともなく顔を緩ませる。私達の間にあった緊張感は、浮輪の空気み

たいに抜けていった。

「……何だか、ね。魔王も勇者もお互いに怖がっちゃう。それが現実なんだよきつと」

軽く笑って見せる。向こうもほんの少しだけ笑って見せた。人間の顔。世界を滅ぼす鬼だなんて、とても思えないような表情。クラスの連中より、少しだけ綺麗な顔に見えた。

「……トオルくん、だったよね？」

名前を忘れた訳じゃないけど、他に話題の作り方が思い付かなかった。

「あん？ まあ、合ってるけど。……そっぴゃお前の名前、まだ聞いてなかったな」

向こうも何をどう話していいのかわからないって感じだった。探り合い。但し意識的な警戒心はない。何と云うか、慣れない者同士の見合いみたいな感じ。

「私はユイナっていうんだ。結ぶに野菜の菜。結んで実的な感じ」

「……透明に生きるなんて虚しい名前よりはマシだな」

彼は自嘲気味に笑いながら言った。名前にコンプレックスでもあるみたいな言い方。そんなに否定的な言い方をしなくてもいいと思うんだけどね。

「……綺麗な名前だよ。濁りの無い、綺麗な生き方というか」

「清濁併せ持つて一人前って言うだろ。濁りが無い。それって、一生子供扱いってことだぜ？」

「あー、確かに」

と、フオローするつもりで納得しちゃったぜ私。

「引きこもるとき、本当に自分が世間から消えちまったみたいな感覚があつてな……。何と云うか、確かに透明人間なんだよな」

「……いやいや、透き通るってカッコイイじゃん。私だってさ、小

学校の頃は絞殺しの木とか呼ばれてさ」

「あー、他の木に寄生する奴だっけか」

今考えれば不思議なあだ名だ。

私の名前は絞めるのではなく結ぶ訳だし、大体絞めるのは菜ではない。だけど、結菜が絞殺しの木っていうのは、何故だかいやなくらい納得出来る。

あの頃から、私は集団が嫌いだったのかも知れない。人間のしよ
うもなさになつて、気付いていた。

それでも一人が怖くて仕方が無かった。……だからこそ、引きこ
もれない。引きこもる勇気が無い。

そう思うと、透生くんが存在が大きく見えた。私にも先輩にも兄
貴にもアルスくんにも、瀬尾さん達にも無いモノを、彼は持つてる。
その後も、透生くんとの会話は不思議なくらい盛り上がった。

引きこもりで、生意気で、地球を滅ぼそうとしている透生。

……出来るならもっと早く。もっと違う出会い方をしたかった。

ということがあつて、何か気が付いたら眠っちゃってて運ばれて
いたという稀有な状態。リラックスし過ぎだつての私。

大人になつて酒とか飲み始めたら、こういうことも増えてくるの
かもね。

「……あのな、ユイナ。透生と仲良くなり過ぎだ」

「仕方ないじゃないですか。何となく分かるんですよ、彼の気持ち」

「引きこもつて勝手にキレて地球に隕石を落とそうとする奴の気持
ちが？」

やっぱり、普通はそういう風に見ちゃうのかね。

「……気にはなつてたんです。私があいつ主催のネットゲームの説明を見た時、あいつはまるで隕石を食い止めるのは余興に過ぎないというような話をしていました。けど、今日のあいつの口調は間違いないく隕石が落下するというような、余興もクソもない、これが本番みたいな感じで……」

パソコンに映っていた彼のぎこちなさを思い出す。彼の言っていることは本心じゃなかった。それを悟られることなく語る。いかにも他人に慣れていないであろう彼が、不特定多数の人間に向かって……止めて欲しいんですよ。ゲーム内の他のプレイヤーをまとめ、隕石の進路を変える方法を知性を持って見つけだし、恥も外聞もなくネットゲームばかりやっていられる人に。本気で自分を止めてくれる人がいたら、自分も生きていたいと思えるかも知れないって、そんな風に思ってるんだと……。私の憶測ですけどね」

……彼はきつと、私と同じなんだ。

学校の中で見えない殻を被るユイナと、引きこもりという見える殻を被るトオル。

私はどうしようもなく彼に同情していた。だから……決意した。

「……私、隕石止めますよ」

「ああ。頼むぜ。俺だつてさ、イトコが魔王じみたことをするのは見たくないんだ」

——私が透生を止めてみせる。考えてみれば、何かを目指そうと思ったのはこれが初めてだった。

五分くらい歩いたところで、妙なものが見えた。
何か分かんないけど何かが、ゆらり。動いた。

「ん……？」

ゆらり。ゆらゆら。そんな四コマありそうだけどね。
火の玉だった。

「ぎゃあああ！ 先輩！ あれ！」

「ゆ、ユイナ、落ち着け！」

「すげえええ！ はつきり見えないから近寄らないと！」

「お前は馬鹿かああ！ 色んな意味で冷静になれ！」

まあ、アルスクんの登場とか見てたら、火の玉くらいで怖がった
りはしないよね。

けど、そこに人がいたのを見たら流石に驚いた。

少女だ。不機嫌そうな目つきに、ショートカットに和服。暗くて
色は見えないけど、どちらかというと黒に近い色。こけしに近い。

「……光村さん？」

「あなたに興味はない。……私は鬼を狩る者だから」

——鬼を狩る？

「先輩、それって……」

「鬼ってのは、超鬼の力……まあ略して鬼の力。あれのことだよ」

「持ってましたよね、先輩」

「先に帰ってろ。……大丈夫。星熊童子って、鬼の中でも結構ビッ
グネームなんだぜ」

——風の音がした。

光村さんが動き出した音。

先輩は飛びかかってくる光村さんを受け流すと、手だけをこちら
に向けて軽く振った。

……帰れる訳がない。先輩のことが心配だし。

それに。こんな展開、見逃せる訳がないじゃないか。

大江山伝説の余波 4

夜の暗闇を照らすのは、火の玉でしたよ。うん。

そんなでもってその光の中に、少女のシルエットが浮かんでいます。クラスメイトの光村さんは、無表情のまま言葉を紡ぎ出す。

「……星野剣さんですね」

「そうだけど」

「……噂どおりの美人さんですね。ちよつと見惚れちゃいました」

「——ちよつと、か。何だそれ。宣戦布告？」

殺気のある会話。周囲に火の玉が飛んでいるから、ただ立っているだけでも隙が無い。

星野先輩はだるそうに火の玉を目で追っていたけどすぐ止めた。普段は無意味な行動が多いくせに、こういう時には最善の行動だけを瞬時に選ぶことが出来る。先輩の成績はそんなに良くないのに頭がキレる印象は、その辺から来ているのであった。さっすが！。先輩かつこい！。斜に構えている私は場違い感ハンパないぜ。

固唾を飲んで見守る戦闘風景とか、創作物でよく目にする風景だけどさ、ああいう緊張感漂う感じとか、どうしても何か照れくさくてダメなんだな、これが。まあ、ホントに真面目に見ると怖いし、斜に構えることくらい許してもらおう。許してもらって誰にだらうね。ウダウダ頭の中で考え込むのは私の悪いくせだな。

「出来れば見逃して欲しいんだけどなあ。俺さ、九時には帰って寝ていたいタイプなんだよね」

「……零時まで遊んでおいて、」

光村さんが飛び上がる。もはや人間ではないジャンプ力で宙に舞うと、

「どの口が言っているんですか！」

そのまま星野先輩に急降下。仮面ナニガシライダーキックの乗者蹴か。だが先輩もやわじやない。光村さんの蹴りを頬で受け、そのまま足を掴んで空中へと投げ飛ばした。

結果、お互いに無傷っぱい。宙に投げられた光村さんとはかく、勢いよく頬を蹴られた星野先輩が無傷ってどういうことじゃい。

光村さんは不満げに溜息をつく、あくまで冷静に言葉を紡いだ。

「……避けれたはずですけど。何故受けたんですか？」

「格の違いを見せるため……とか言ったら逃げてくださいない？」

「御冗談を。私は貴女を殺しに来たつもりなんですけどね」

ただの喧嘩じゃないとは思っていたけど、本気で殺す気とは。流石にびっくりした。

そりゃそうだと言われたら何とも言えないんだけどさ、流石に健全な高校生である私は知人に死なれるなんてそんなこと想像もしたくもないし何と言うかあれですよ。

「……ああくそ、もう」

止めなきや。自分を自分で誤魔化している場合じゃないっつーの馬鹿か私は。

いつだって独りよがりな思考に逃げて、自分の不幸とか都合の悪いことを全部周囲のせいにした。私は高度なことを考えているけど、春風も瀬尾さんも誰も私の崇高な思考についてこれない。私は悪くない。私は……。そうやって正当化するしか無かった。

——おそらくあなたは地球の運命を担っています。

アルスクンから言われた時、飛び上がるほど嬉しかった。だって

さ、私が特別だつてことが、ようやく証明出来たから。やっぱり私は周りとは違うんだつてことが、ようやく……。

でも特別でいるにしては、私は無力過ぎる。

結局私は凡人の一人なのかも知れない。目の前で繰り広げられる戦いは確かに私がずっと探し求めていた「特別な」ものだつたけど、ただどそれを目の当たりにした私は、あまり喜びを感じることが出来なかった。

私は弱い。この二人に敵う自信が無い……。

悔しい。この戦いのレベルの高さが、私の存在そのものを全否定しているようでさ。

……悔しいよ……。

戦いはさらにヒートアップ。火の玉を指先から放つ光村さんと、その火の玉を掌で受け止めて無傷な星野先輩。

先輩は防ぐばかりのようだったけど、苦戦しているのはむしろ光村さんの方だった。傍観者、私。何かしてあげたいけど何も出来ないんだよ悔しいよ自分が一番！

「……真面目に戦う気はないんですか、鬼のくせに」

「基本的には人間なんだけどな……。それでもダメ？」

「ダメです。死にたくないなら私を殺して下さい」

哀願するような声だった。殺して下さい？ 何じゃその頼みは。でも、相変わらず光村さんは表情を変えない。……それが不気味だった。

何が彼女をそこまで必死にさせるのか。教育？ 宿命？ こだわり？ ……全部ありそうだし、全く共感出来ない訳でもないんだけどさ。でも躊躇なく殺して、ねえ。

戦いは徐々に人間らしさを失い、火の玉やら何やら訳分からん戦いに発展していった。

「壁」

「炎」

「壁」

「炎！」

「壁」

魔法を唱えるっていうよりは、剣道で面って言う感じがかな。

こうして実際に近くで見ていると、超鬼の力というものがどういうものかがよく分かる。

攻撃を受ける瞬間。星野先輩はピンポイントで狭い範囲に力を集中させ、見えない壁を作っているんだ。基本的には掌で受け止め、その先に壁を作って相手の攻撃を防ぐ。作った壁はしばらくその空間に残るらしく、攻撃に合わせて動かすことも出来るから便利そうだ。

けど、その防御は一部への集中的な攻撃にしか通用しないんじゃないかな、と推測。広範囲に広がる爆風なんかは体全体を守らないと防げない。けど、そんなことが出来るのなら、先輩はこんな戦い方をせずに最初から体全体を防御しているはずだ。

力の温存？ …… それって、疲労した時にたたみかけられたらヤバイんじゃない？

「くっそ…… しつこいなお前。ちょっと疲れた」

思ったより早！

「待った待った待った！」

私は反射的に飛び出し、続けざまに攻撃を仕掛けようとする光村さんの前に立ち塞がった。

光村さんは微かに驚いた顔をする。そこで、自分の動きにブレー

キを掛けた。

で、多分その光村さん以上に驚いていたのが星野先輩。

「ちょ、ユイナ！？ 帰ったんじゃないのかよ！」

「いや気付くでしょ！ 結構がつつり見てましたよ私！ 何回か目合いませんでしたか！ それより大丈夫なんすか！？」

「当たり前だろうが……」

そう言うのと、先輩は私をひょいと抱えて急に走り始めた。

「な、何ですかいきなり！」

「いや、考えてみれば逃げりゃ済む話だった」

「馬鹿ですか！」

「ある程度自分が強くなると、あんまり逃げようなんて思わないもんだ」

自分が強いつて言い切ったよこの人。嫌味に聞こえないのはすごいかもしれないけどさ。

「……じゃあ、逃げたがる私はまだまだ弱いってことですか？」

「弱いままでいられるのだって、ある意味幸せなんだぜ？」

「……ぬう」

弱者は幸せ……か。その言葉は、私には強者の勝手な言い分にか聞こえなかった。

「つか、逃げなかっただろ。熊の時も今回も」

「……好奇心に負けました」

「バカタレ」

ふと後ろを向いてみる。光村さんが追いかけてくるような、そんな気がしたから。けど、何も無かった。

「……今日はこれで終わりなのかな……」

こんなことがあつて、私の中の世界が大きく動きを見せた夜でさえ、町の姿はいつもどおりの平和を語るだけだった。

そりやそうだ。裏社会の戦いとか外国の戦争とか、鬼とか鬼狩りの戦いとかだつて既存のものだったんだから。ただ私が今まで知らなかっただけ。世界的規模で見て、私とその既存の何かを知ったところで何かが変わるんなら、この世界はもっともつと事件だらけのはずなんだ。

無知のまま、生かされている私。

そんな私が地球を救うなんて、冗談みたいな話だ。

「おまけ」瀬尾夏鈴（前書き）

あまりにもあれなので書き直してたらページ数余ったんで瀬尾さん
メインに書こうとしたら結局ユイナのターンだった。重要な話では
ないので読み飛ばし可ですここ。

「おまけ」瀬尾夏鈴

瀬尾かりんは人間である。あだ名はまだない。

金持ちで才能もあり、その上面倒見の良い完璧な彼女を相手に、あだ名呼びをするような恐れ多いことは誰も出来なかったのである。

恐らく。クラスの中であだ名が全く無いのは、クラスでも立場的弱者である須上ユイナと桜木春風、転校生の光村と自分くらいなものである。

あだ名なんか必要無い、と思いつつ、その事實は完璧故の孤独の現れであるような気がしてならない。

——それに、明らかに立場の弱い三人と自分が並ぶことは、プライドの高い瀬尾にとっては耐えがたい屈辱であつた。

……もう、昔とは違う。

全部、手に入った。なのに。

美貌も強さも手に入れたのに。なのにどうして……。

親友が出来ない。

須上ユイナと桜木春風は、互いに親友と呼び合う仲だ。

他の誰かなら構わないのに、よりによってその二人。……瀬尾かりんの心は、激しい嫉妬に満ちていた。

——醜いと、自覚しながら。

「……何か、隕石の動き不自然だよな」

新聞を見ながら、アルスくんが言う。

「それは、まあ。地球にぶつからないといけない訳だからねえ。……やれやれ。高校の人間関係もピリピリしてるし、地球救う自信も無くなってきたなあ……」

「ええええ！ 僕がこの星に来た理由が無くなる！」

こんな日々がずっと続くような、そんな気がしていた。

学校では光村さんや瀬尾さんとの関係に悩み、家では隕石とネットゲームに悩まされて。

クソみたいに辛くて、希望なんてどこにもない。……そんな道が、永遠に続くような感じ。

「……結菜。あのさ」

アルスくんは、急に真面目な声になって言った。

「人の生活はさ、全てのことが相互に関係し合っている。だから、学校での人間関係やそれ以外のことも……」

「分かってるよ。……出来るだけ安定させるからさ」

嘘だ。絶対安定しない。学校での平穏なんて、瀬尾さんみたいに位の高い人間でないと作れないんだ。

地球の運命が私にかかっているなら、私に関わる全ての人にも、多少は地球の運命が背負わされているということになる。……それなら、他の誰か……例えば瀬尾さんとか、の責任にして、逃げてしまうのも悪くない。

眠くてはつきりしない頭で、そんなことを思った。

……本当に私は、世界を救うのかな。

weak student

学校に行きたくありません。

瀬尾さんが怖くて……。ではない。

ついでにこれは別に不登校宣言ではありませんよ。ちゃんと行きますよ学校。

……光村さんと顔を合わせたくないんですよ。

何せ隣ですからね。

先輩を殺そうとしたあの光村さんが、隣で授業を受けたり弁当食べたり何か色々するんですよ。もう、何か考えただけで……。

「あー」

「……だ、大丈夫？」

アルスくんが私を気遣う。というか、一時間ずっと溜息つかれたら、気遣わざるをえないよね。

昨日はネットゲームをする気力もなくさっさと寝た。で、起きて昨夜の星野先輩と光村さんの戦いを思い出して溜息連発。

憂鬱だけどねえ。行かないと駄目なんですよ。着きました。

着きました。……何となく繰り返す。繰り返してもやる気になれなかった。

しかも既にいますよ隣にいい。

「お、おはよう、光村さん」

「……昨夜、何か見たか？」

「うん」

普通は慌てて「見てない」って言うところだよな。答えてやっとな気が付いた。やべえ。緊張感のあまり喧嘩売っちゃった。

「……もう一度聞く。昨日、何か見たか？」

けど。ここで嘘をついてどうなる。……多分、もう一度先輩が狙

われる。また逃げ切れる保障も無いし、そもそも光村さんの意図が不明過ぎる。

——ここで何か聞かないと、何も変わらないままじゃなか。

「見たよ。最初から最後まで全部見た。アンタが先輩のほっぺを蹴り飛ばしたところも、それで先輩が無事だったことも見た。ついでに鬼の力のことだって知ってる。……文句があるなら言つてよ」

「そう言うのなら、貴女も鬼と同じだ。訂正するなら今のうちだぞ」「マジでか」

ターゲットにする、ということか。やべえ。私なんか瞬殺されちゃう。

……見ていないことにして、一度星野先輩に任せるべきなのかな……。

というかそうしよう。うん。ここで死んだら地球が絶望的だし。うん。

怖いし、ね。うん。賢明な選択をしたら、そりゃもう、

「見てません！」

「よし」

いいよ。これで光村さんを怖がらずに学校来れるし、私も地球も安全だし。

先輩にはちよつと苦勞かけるけどさ。どうせ私にはどうにも出来ない訳だしさ。

……あんな戦い見た後ですよ。ちよつと怖いのも分かるでしょ？

——怖いんだよ。仕方ないじゃんか。

相手は火の玉を従えて夜の町を歩くという、化物じみた相手だよ。そりゃ、見てる分には平気だけど、面と向かって殺すと言われているようなもんですよこの状況は……。

なのに。

「……は、くそ……」

……情けないよ、私。全ての負担を星野先輩に投げちゃった。確かにあの人は強いけどさ、いくらなんでも役立たず過ぎるじゃんか私……！

だから私はいつまでも弱いんじゃないのかよ！

こんなところであつさり負けるなんてさ。

「何か分かんないけどばっかやろおおおお！」

んによって体ごと投げ飛ばされる。私の勢いを利用した華麗な反撃
 だけどちよつとこれ危ないよおおおおお！

れた方向は教室の出入り口で、ちょうどそこから瀬尾さんが入ってくるのが見えた。

「は？ え、ちよ」

嫌いな相手同士で不意ながら抱き合う形になっていたのはもう泣くしかないですね。お互いに「ぎよわ」みたいな変な悲鳴を上げて退いて、ガラスの破片が散らばっていることによく気付いた。

ドアを壊したとして、私と光村さんと瀬尾さんは職員室に呼び出される羽目になった。

「……あの。私が呼び出しを喰らうというのはおかしいと思うんだけど？」

「ごちゃごちゃうるさいのは瀬尾さんである。私と光村さんのプロレスごっこに瀬尾さんが巻き込まれた、というのがクラス内での一番有力な解釈であった。

制服でプロレスごっこする女子ってなかなかいないと思う。特に共学では。……いや、多分女子高でもしなないと思うけどさ。

「私も須上さんのパンチを避けただけだ。私が呼び出しを喰らうのもおかしいだろう」

「ふざけんなああ！ アンタら、私だけを悪者にするのかよおおお！」

自分で言うのも何だけど、今日の私は元気だな。

とりあえず誰が何を言おうと三人で説教を受けるのは決定事項。

昼休みに入ったところで私達は職員室に向かった。

星野先輩がいた。

「せ、先輩！ 逃げないと！」

「星野剣、覚悟！」

いきなり飛びかかろうとする光村さんを、私は何とか後ろから止める。

「……やれやれ。元気だなお前ら」

「複数形ですか先輩！」

「事実だろ」

「……いや、まあ、確かにそうですけどね」

元気、ねえ。今の私達の異常行動は、ぶっちゃけ星野先輩にも責

任があるのだが。

まあ、何かへらへら笑っている星野先輩に毒気を抜かれたらしく、光村さんも大人しくなった。

「で、何やってんだよ。こんなところで」

「……噂になってませんでしたか？ ドア壊した二年生の話」

「聞いたけど」

「あれ私らです」

「馬鹿やってんな」

ストレートに馬鹿とな。……でも、嫌ではない、かな。

「……そうですね、馬鹿です。……でも、楽しいですよこういうの」
私の楽しい発言に先輩は笑い、瀬尾さんは啞然とし、光村さんはノーコメントだった。

こういう生き方をし続ければ、意外と退屈なんて味わわずに済んだのかも知れない。

はしゃいでドアを壊して、積極的に何でもやって。それで失敗したとしても、笑って何とかしちやてさ。そこで次のチャレンジを探して……。そんな生き方。

それでも良いと思った。今までの私には決して届かない、暖かい生き方。

きつと、そういう何でもない日常のことを幸せって呼ぶんだと思う。毎日笑えたら良いっていうのは、そういう意味なんだと思う。

これでいい。そう思っても良い気がした。

……けど、そんな生き方は妥協に過ぎない。

生きている間のことしか考えないなんておかしい。幸せなんて幻で、所詮はその場しのぎの慰めなのにな。みんなそれを追いかける。

違うんだよ。私が求めているのは。

異世界があると分かって、鬼の力があると分かって……。

それでも人並みの幸せしか追いかけられないなんて不幸だ。

私は知った。この世界に存在する、きっと裏社会ですら知られていないであろう未知とロマンを。

不思議な現象を目の当たりにした。隕石のことが分かった。隕石を落そうとする寂しい少年を知った。

——そんな私が、地球の救済者になる。

例え孤独でも良い。それが私にしか出来ないことなら。

……それが、私の価値になるならそれでいい。

w e a k s t u d e n t (後書き)

相変わらず何かこんなんですが感想くれたらクソ喜びます。

異常者と異世界人・参（前書き）

説明って難しいですねえ。どうしてもごちゃごちゃしてしまいます。ということで数回書き直しておりますが、説明の内容に大きな違いはありません。

異常者と異世界人・参

「ドア壊したバカが三人いる、と言う話を聞いて、どうせ男子が星野のどちらかだと思っていたんだが」

風紀担当の男性教師は、何とも不思議そうな顔で私達を見る。

「……どうやったらお前らがドア壊すんだ」

私と瀬尾さんと光村さん。

教師から見れば、大人しい優等生とカリスマ的優等生と転校生である。

こっぴどく叱られるものと覚悟していたけど、教師の方も二度目は無いと判断したんだろうね。三十秒程度の小言の後、

「次からは気を付けるように」

とやりわり釘を打つだけで、さっさと私達を解放してくれた。

「……まあ、不細工じゃなかったしね」

「女の先生じゃなくて良かったわね」

光村さんは既にこの場にはいなかった。行動が早いのも、鬼を狩る者としての心得なのかも知れない。

「んじゃ、教室に戻ろうか」

「そうね」

私が職員室から東へ進むと、瀬尾さんは西の方へ進み出した。確かに階段さえ上れば良い訳だから、どっちからでも帰れるんだけどさ。

……何だこれ。この流れで、二人バラバラに帰ることになるとは思わなかったよ。

そのまま、授業は何事もなく進んで、ドア破壊も単なる笑い話に変わっていったさ。

「それじゃあ、今日はこれで解散。帰りにドアを壊したりするなよ」
担任が言う。別に、私達に対する嫌味という感じではなく、おちやらけた冗談っぽい言い方だった。
学校、終了。

瀬尾さんは皆に、登校したら須上さんが飛んできたという話を笑話のように語っていた。ネタがある時、ああいう集団は盛り上がる、特有の輝きを見せる。
皆、笑っている。

「そもそも何で飛んできたのかっていうと、光村さんが投げたみたいで」

「えー、何それスゲー。スゲーっていうかスゲー馬鹿」

「ぶつかる瀬尾さんも笑いの神様に見守られているというか、笑いの呪いにかかっているというか」

まあ、自虐も多少は入っているみたいだけどさ。

……私は須上さんにぶつからただけで、被害者だ。悪いのは全部、ぶつかってきた須上さんの方だから誤解しないでね。

という解釈も出来るような内容にも聞こえなくもない。……被害妄想するのも情けないけどさ。何というか、案外私はネガティブなのかもね。

とりあえず良くも悪くもネタの中心人物である私は、集団からの視線をそれなりに集めている……らしかった。そっちに目を向けるとちよくちよく誰かと視線が合う。

……ここで、苦笑いでもしながら近付けばね。案外あのメンバーの一人になれるかもですよ。

そしたら瀬尾さんとも今までよりはマシな仲になって、少なくとも

もこれまでより明るい日々が始まる。

あんまり話したことなかったけど須上さんって面白いよねー、という流れだって無きにしも非ず。いつの間にやら人気者。ゲハハ。……なんだけどさ。

万が一にもここで馴染めたとして、

満足して、

変わったとして、

悩み続けたことを過去の出来事にする……なんていうのはさ。今までの私が無駄だったって否定するみたいで、怖い。

それにさ、イケてる集団の中に入るって、結局は何も考えない馬鹿になるみたいで悔しいんだよね。

——悔しいし、春風を裏切るみたいで……。

だから、行かなかった。

………行けなかった。

帰宅。すっかり夕方。なんか溜息。

私の部屋では、働きもせず学校にも通っていない居候が、ネットゲームでレベル上げに必死になっていた。

彼は自らをアルス、または坂本竜馬と名乗り、地球が危機だとか怪しいことを……。

と冷静に文章にすると、とんでもなく駄目な人間の話としか思えないよね。

少なくとも、実際に彼がここに来た様子を見た私や、私と共に異

常な現象を目の当たりにした兄貴や先輩以外には、彼のことは信じられないと思う。

「記憶喪失のホームレス高校生っていうか、ただのプー太郎だよ、君」

「自分でそう思うよ。第一、通う高校が無いのに高校生を名乗ることに無理があつたんじゃ……」

アルスくんは自嘲気味に笑いながら、軽く溜息をついた。

記憶喪失高校生、坂本竜馬。

あの設定は流石に即興過ぎたか。母さん達に嘘がばれるのも時間の問題かも。けど、だからって本当のことを言っても信じないだろうしな……」

いや、母さんの場合はすんなり受け入れてしまつかも。それはそれで怖いや。

「むしろ、ばらしちゃおうか」

「いや、ちよつと無謀なんじゃないかな……」

まあ、ほつたらかしても問題は無いでしょう。緩い一家だしね。

それよりも、問題はゲームの進行具合。

「そんなことよりも、問題は僕がここにいる理由だ」

「……は？ ここにいる理由？」

「うん」

今更何を言つてんだこの異世界人は。

「そりゃあ、隕石から地球を守る為じゃないんかい」
「ちやうんかいコラアワレエ。何人だ私。」

しかし、アルスくんはやんわりと首を横に振った。

「君から得た最近の情報を元に、色々考えたんだ。ゲーム主催者の正体や、超鬼の力と呼ばれる一種の超能力の存在のことを踏まえて、普通に考えればこうだ。」

超鬼の力を使いこなした星熊透生は、何故か人間を嫌っていて、自身の力で隕石を操り、地球を滅ぼそうと思った。ただ、ひよつとしたら自分を理解してくれる者がいるかも知れない。だから自作のネットゲームに賭けることにした……と」

「……普通に考えればってことは、普通じゃない考え方もあるってこと？」

「ああ。だって、この考えが正しければ、地球は自壊することになってしまう。星熊透生がこの星で生まれ、暮らしてきた人間ならね……それじゃあ異世界から僕がここに来る条件に当てはまっていないんだよ。異世界が一切関わっていないから」

「確かに、そりゃそう……か」

宇宙といえど同じ世界。だったら隕石だってこの世界産。

アルスくんが地球を救おうとしているのは、地球の危機に、異世界が絡んでいるからだ。

隕石や普通に地上で暮らしてきた透生は、もちろん条件に入らない。

ということとは、

「透生以外の黒幕がいるとか、当初言っていたみたいに、透生が超鬼の力ではなく異世界に関係する力を使っているとか、やっぱり隕石は別件でしたー、とか？」

「主催の透生本人がどこかで異世界人と入れ替わったとか、隕石に異世界人が乗り込んでいるとか……。考えたらキリがない。

あと、主催者の超鬼の力があまりにも強過ぎるのも疑問点だ。

主催者がネットゲームをどうやって作ったか。

それからどうしてこのタイミングでゲームを始めたのか。

そもそも超鬼の力とは具体的にはどのような力なのか。

情報が足りないんだ。ネットゲームや主催者、それから異世界と

この世界、君と地球に訪れる危機との関連性……。とにかく今は、情報が欲しい」

そういうと、アルスくんはじつと私を見た。

……いや、見られても。

「あの、私に情報収集しろとか言われても無理だよ？」

人脈も狭いし、大体質問の内容が一般の方々には受け入れられない訳でして。

「言う前に断られたか……。けどユイナ。君は地球の運命を担っているんだ。君の周囲にヒントが転がっている可能性は極めて高い。だから」

アルスくんは一瞬だけ目を逸らすと、煮え切らない告白のように、躊躇いつつ言った。

「明日から、いや、何なら明日だけでもいい。その、何だ。……君を尾行してもいいかな」

異常者と異世界人・肆

前回のあらすじ！。アルスくん尾行されることになりました。

「どうやって？」

だって登下校時以外は高校にいるんだよ私。尾行といっても、学校の外だけじゃあ意味無いと思うし……。

で、だからといって、生徒じゃないアルスくんが学校の中に入るのは、色々と問題もある訳で。

「そもそも君って“学校”のこと、分かるの？」

「もちろん。僕が元いた世界にも学校のような場所はあったし、こっちの学校が部外者が侵入し難しいのもちゃんと知っている。けど大丈夫。尾行するのは僕じゃなくて、こいつだ」

アルスくんがポケットの中から取り出したのは、なんと、ゴキブリだった。

「ひょ」

びつくりして勢いよく退いて壁に頭を打った。変な声は漏れたけど、大袈裟な悲鳴とか出さないよ。むしろ絶句だよ。

「あれ、ごめん、苦手だった？」

「苦手じゃなくてもビックリするでしょうが普通……。いや苦手だけど」

それとも、異世界では突然ゴキブリを差し出すのも普通なのかな。これが私を尾行する……って。確かに虫なら人よりは学校に侵入し易いけど。

「一応言っておくけど、これは虫をモチーフにした機械であって、本物ではないからね。平たく言えば尾行マシンかな。

この虫には隠しカメラとマイクが付いていて、人工知能も内蔵されている。で、こいつが得た動画や音声は、こっちの受信装置に送られるんだ」

アルスくんがアドバ……十年くらい前の携帯ゲーム機のようなものをポケットから取り出す。何つーか、ポケットに何でも入るんだなーと感心する。

「短所は通信距離かな。この二つが通信出来る距離は二百メートル程度。そして、この機械には録画機能が付いていない」

ちなみにここから学校までの距離は……まあ、少なくとも一キロはあるかな。測ったことはないけど、流石にそんな至近距離には無いですとも。

「だから、結局僕がこの受信側を持って尾行しないといけないんだよね」

「しょぼ！」

仮にも異世界間を移動する技術を持つ世界の産物ですよ。なのに随分不便だよな。

「この世界にあまりにもそぐわないモノを使ってしまうと、文化や常識を壊しかねないからね……」

言い訳なのか事実なのか知らんけど、アルスくんは苦笑いしながら言った。

「何つーか、君みたいな異世界人の存在自体が、文化や常識を壊している気もするんだけど……」

「優先順位の問題もあるよ。僕がこの世界に来なければ、君はこの星を救うという自覚を持たないままだ。それは文化や常識なんかよりも優先すべきことだけど、今回の場合はそうもいかない。尾行することによるメリットと常識を壊してしまうリスク、どちらが大きいかわかといえればリスクの方だからね」

「……まあ、納得かな」

常識を壊すことはリスク、か。……けど、そこにメリットは無いのかな、と、ちよつと疑問に思ったりもする。

少しくらい壊れた世界の方が面白そうじゃなか。非現実的な魅力に溢れているというか、さ。

冷たい雨が降り続く朝。家を出て通学路を歩く。

不便。しょぼい。駄目駄目。と思われたゴキブリ型のソレだけど、意外にも実用性は高いみたい。

飛んでも羽音はしないし、踏まれても轢かれても大袈裟なダメージは無く、雨に濡れても平気らしい。ついでによく見たら自爆装置が付いているというオマケ付き。

目立つた弱点は、この虫が地上を進む時、カメラがどうしても下から上を見下ろす形になることくらいかな。

……制作者がスケベだったとか……かもね。

教室では、ソレは私の鞆の中に隠しておいた。カサカサ走り回られたら気付かれるっていうのもあるけど、女子高生がいつぱいいるからね。うん。カメラさえ回ってなけりゃ別にいいんだけどね。……そうでもないか。

当然だけど、教室はいつもと同じだった。瀬尾さん達が楽しそうに話していて、春風はまだ来てなくて、光村さんはつまらなそうな顔で、静かに文庫本を読んでいる。日常ですよ。

……こんな平凡な場所で、私だけが重大な秘密を持ち込んでいる。地球を救う為にゴキブリ大作戦ですよ。

私から二百メートル以内のどこかでは、鞆からの教室の風景をアルスくんが見ててさ。私はこのゴキブリが他の人に見つからないように頑張ってるさ。

いや、むしろ見つけれられて「だめ、これは秘密なの！ 私が地球の運命を担っているなんて言えない！」なんて展開もアリかもね。妄想は止まりませんよ。

でもそんな都合の良い妄想はどうせ現実にはならず、ちょっと期待外れで一日が終わるっていうのも、私はちゃんと理解している。

……つもりだったんだけどなあ。結構落胆している自分がいるのであった。

ハプニングも一切無く、簡単に一日終了。問題は動画や音声がちゃんとアルスくんが届いたかどうかなんだけどね。そんな味気無い心配しか残ってないのかよおお！

「あー……。いけんわ。何がいけんって……。いけんわ」
独り言も出ますよそりや。

サンタさんは幻なんだよ。でもちよつとは期待しちゃうじゃないですか。期待してちよつとソワソワして、あとで自棄に落ちこんじやうんです。そんな心境。

金曜の放課後ですよ。喜ぶべき日なんだけどね。土日は透生主催のネットゲームをやるチャンスですよ。地球救済に一步前進じゃん。やったー。

でもなんか、それも悲しいんだよねえ。ゲームの為に生きているみたいで。

「……退屈」

多分、今最什么的確に私を表す二字熟語。平凡とか一般とか、他にも色々あるけどね。

すっかり雨も止んで、結局今日も平和な一日。いつもの川沿いの道で、溜息つきながら歩いている。

ちよつとだけ激しい川のながれる音。名前も知らない虫の声。緩やかなカーブを進み……。

さて、ここで絶句である。

なぜかって、角を曲がると目の前にホッキョクグマがいたからだ。

「……またかよ」

二度目にもなると、流石に大きな驚きはなかった。

「仮にも命を狙われている分際で、何とも失礼な反応デスネえ」

不敵な笑みを浮かべる白クマさん。分かり易い、そして安っぽい悪役の笑みだよ。

「というか、何で白クマなの？ 人間なんでしょホントは」

「人型よりも身体能力が優れているのデスヨ。テクニクの人型とパワーの獣型。使い分けテいるという訳デス」

「へえ。で、何で私の命を狙うの？ 計画って言ってたけど、何か企んでたり？」

「質問攻めでカマをかけようとしても無駄デスヨ！」

そんな風に聞こえたんだ。

「……ごめん、なんかもう、色々と若さ故の悩みみたいなのが頭ん中ぐるぐる回っててさ。白クマが出たくらいでビックリしないんだよね……」

「いいでショウ。その挑発、ノリマスヨ！」

「そうなの？」

「……そうなの？ とか言ってる場合じゃなかった。え。挑発になっちゃったの？」

「本気ヲ出します！ 勝てるものナラ勝って御覧ナサイ！」

「ちょ、ちよつと待って、本気ってすごいのか？ ……すごいのか？」

「いやいやいや。考えたらすんごい危機的状況な訳で。超能力とか変身とか野生のパワーとか色んなものを駆使して戦う変人に命を狙われているのですよ私。」

喧嘩して勝てる相手じゃないし、逃げ切る自信もない。

これはあれだ。……ピンチだ。

「タイラント北極タツクルううううう！」

「ぎゃああ！ こつち来んなああああ！」

くまさんは勢いよく私に向かってくる。もはやクマじゃない。超人的アメフト選手の動きだよ多分。スピードも勢いも凄まじい。

「けど動きは直線的ですよーに！」

と叫びながらひよいと横に移動すると、そのまま白クマさんは勢いよく私を通り過ぎていった。細かい動きは苦手っぽい。

案外楽勝？ いや……どうだろ。あまりの拍子抜けに、ポカンとしていると……。

白クマさんがタツクルしながら戻ってきた。

「ぎゃああああ！」

絶叫しつつさつきみたいに避ける。結構やばいね。近所の人が警察を呼ぶか……それが、アルスくんに期待するか。策はそれくらいしか思いつかない。

「ハッハッハ、所詮は小娘、一人デハ何もデキナイようだナ！」

戻ってくるのをまた避ける。白クマさんはもう一度、ダッシュで私を抜いていく。

そこで悟った。……あれだわ。これ、往復しながらずっと続くやつだ。

タイラント北極タツクル。名前は間抜けだけど、車くらいのスピードがある。クマだから、体重も少なくとも太った人間以上はあるだろうし……。

だったらあれを喰らうのって、車に轢かれるようなもんじゃなか

——三回目。

まだいける。余裕を持って受け流す。

——四回目。

運動量は少ない訳だし、集中していれば何とかなるけど、

——五回目。

結構さ、終わりが見えないのって嫌なんだよね。

——六回目。

それで……反撃さえ出来ないんだ。

川があつて、反対側には塀があつて民家があつてそのずっと先には山があつて。

そんな、人の気のない小さな一本道。横には進路がない訳だから、熊の射程範囲外に逃げることも敵わず。

避けて、走ってきて、避けて、走ってきて、避けて……。攻撃は終わらない。

だんだん一発ごとの時間の感覚が狭まってきた、小回りも利くようになってきている。速度もちよつとずつ上がってきて、さながらトラックの如しですよ、ええ。

一方、私は逆に、余裕が徐々に無くなってきている。疲労もだけど、この状況を打破することが出来ない事実が精神的に重たい。

「ねえ、ちよつと……。もう許してくれない……？」

基本的には斜に構えてないとやってられないスタンスな私だけど、流石にふざけてられない。

これは、本当にヤバイ。

状況を変える方法。受け止める？ 打ち返す？ モノで防ぐ？

説得？ 全部駄目だ。

こんな時、浮かんでくるのはネガティブなことばかりでさ。

……私が力尽きて、あのタックルをモロに食らったとしたらどうなるんだろう。

大怪我……それとも、一発で死ぬのかな。いや死ななくても、追いつき打ちがいくらかでも襲ってくるか。

——死んだら私は……どうなるんだろ。

「……………」

集中が切れたことが自分でも分かる。

死んだその先なんて知らないけどさ、それを知る術は、目の前にあった。

「——！」

最初とは比べ物にならない程のスピードでさ。熊の顔した絶望が向かってくるんだよ。

「……………」

その一瞬、私の見ている全てがスローモーションになって、直後。

諦め、絶望、悔恨、悲哀。

——激痛。全身を駆け巡った。

「——っ」

吹き飛んで、川に落ちて。

死んではないけど、死ぬほど痛かった。致命傷、かも、知れない。「サア、そろそろトメデス！」

勝利を確信して、白クマが川に飛び込んで来る。

「——っ！　　っ！　　——　　——　　っ！」

……何なんだよ！　地球を救う運命を担ったんだよ私！　どう考

えたって、今、この瞬間、この世界の主人公は私じゃないのかよ！
そんな私がこんな無力のまま死ぬなんておかしいじゃんか！こ
んなところでこんな地味な死に方して、数人が三日くらい悲しんで
終わりなのかよ！ ふざけんなよ神様あ！

情けないけど声が出ない。恐怖と痛みが激しくて、もう諦めよう
かと思った。

——無理。

もう……ね。アルスくんと会おう前は、人生リタイアする気満々
だった訳だし。

もしかしたら全部が夢なんじゃないかって希望もちょっと持ちな
がら。

……私は、目を閉じた。

——アルスくん、来てくれなかったなあ……。

紅蓮の貴公子・イ

「……鞆の中かな、これ」

須上結菜から2百メートル以内にある、どこかの公園。雨は止んだが、曇っていて夕陽は見えない。

携帯ゲーム機……のような受信機に映った闇を見つめ、アルスは溜息をついた。

教室にいる間は、カメラで外を覗ける程度の隙間を作ってくれていたのに、今は密閉状態。多分、いつもの癖で閉じ切ってしまったのだろう。

闇、闇、闇……。むしろ、問題は音声の方である。

「白クマが出たくらいでビックリしないんだよね……」

「本気ヲ出します！ 勝てるものナラ勝って御覧ナサイ！」

「ちょ、ちよつと、本気つてすごいのか？ ……すごいかな」

「タイラント北極タツクルううううう！」

「ぎゃああ！ こつち来んなああああ！」

「ハッハッハ、所詮は小娘、一人デハ何もデキナイようだナ！」

「一体、結菜に何が起きているんだ……！」

彼にとってはここは異世界。時には驚かされたり、困惑することもあるだろうと覚悟していたが。

「……タイラント北極タツクルって何なんだ！？」

タイラントは暴君の意。北極はこの星の地名で、タツクルは……組みついたり、体当たりしたり……。

戦いの最中？ 暴漢に襲われたとか？

しかし、友達との談笑ということも有り得ないことではない。ふざけ合った結果の取っ組み合いとか。

気にはなるが、自分が向かっていいのだろうか……。アルスの心は無駄に揺れ動いていた。

テスト直前のようにそわそわしていた……。その時。

どん。

受信機が音を伝える。何かがぶつかり合ったような、鈍い音だった。

ばしゃん。

水の音。飲んだ？ 浴びた？ 叩いた？ いや……。叩きつけられたような。

何が起こったのかは分からないが、結菜の通学路に川があったことをアルスは知っている。

……徐々に、彼の心に嫌な風景が思い浮かぶ。その、些細な想像でしかなかったものは、

「サア、そろそろトドメデス！」

確信へと変わった。

戦っているんだ。何者かと、川の付近で。

——何をやってんだ僕は。

下手にユイナの世界に介入するべきではないとか、文化や常識に影響を与えてはいけないとか。それはそれで事実だ。けど。

何よりも優先しなければいけないのは、この星と、それを救う結菜の安全じゃなかったのか。

「くそ……頼むから無事であってくれ……！」
助けなければ。

彼が地面に、軽く爪先を叩きつける。瞬間、彼は炎に包まれた。この「乗り物」は、十分にこの世界の文化を一変させるものだが、優先すべきは最早、そんなものではなかった。

位置情報は尾行マシンで確認済み。常人離れた視力なら、着陸地点もすぐに割り出せる。

燃えて、飛んで、倒れている結菜に飛びかかる白クマを敵と認識。ヒーローの如く、急降下しながら敵を、

——蹴り飛ばす。

打撃。原子的でシンプルだが、一番無難で効果的な攻撃手段。

「ゴボエエエエエエ！？ な、ナニゴトでスカ！」

その間、約三秒。白クマは、おそらくまだ状況を掴めていないだろう。

黒服の燃え盛る少年を見つけても尚、彼は困惑の表情を浮かべている。

「い、今のハお前の仕業デスカ!？」

「ええ、まあ……。ひょっとして、二日前にも彼女のことを襲いましたか？」

「何故ソレを……。いや、あまり重要な秘密でもナイのデスが」

「……瑞樹さんの言っていた”ホッキョクグマ”って、こういう動物だったんだ……」

余裕の表情を浮かべるアルスだったが、内心では彼も焦っていた。

……ユイナが倒れている。

大きな外傷は見当たらず、見た目からは大したダメージを負っていないように見えるが……。彼女に万が一のことがあれば、おそらくこの星は終わりだ。確信は、彼にも持てていなかったが。

「……あの、忠告です。出来れば戦わず、急いで僕から逃げて下さい」

戦っている時間も惜しい。勝てないことはないだろうが、超能力を使われると厄介だ。戦う時間も惜しい。

「そういう訳にもイキマセン。オレは組織の為、その娘を亡きモノにしなければならナイのです」

「明日でも良いじゃないですか。とにかく今は見逃して下さい。でないと手加減出来ませんよ」

早く終わらせないと……。だが、その方法が見つからない。

喧嘩の勝ち負けなど、どうでも良い。だが、結菜が命を落とすことだけは避けなければならない。

とにかく時間がない。早急に片を付けなければ……。

「あ」

そこでアルスは気付く。自分と相手の目的が、綺麗に対を成している。

アルスにとって最悪のケースこそ、相手にとっては最善のパターンとなるんじゃないか……。

「……考えてみれば、オレはこうして時間稼ぎをするだけで勝てるじゃありませんか」

「くそ、どうして気付くタイミングが重なったんだ。時間稼ぎなんて卑怯だとは思わないんですか！」

「頭脳プレイと言って下サイ」

「だったら僕から仕掛けますよ！」

アルスは「乗り物」を左手に集める。風が、熱が。そこに集まる。

「――火を、投げます。燃えなくなければ逃げて下さい」

「逃げ又ううううう！」

（……どうやら変な人のようだ）

宣言どおり、アルスの左手から火の塊が放たれる。だが、それだけだ。

「避けレバ済む話じゃないデスカ」

「……まあ、そうですね。最後まで避け切れれば、そちらの勝ちでしょう」

「ナヌ!?」

白クマは思わず振り返る。炎はブーメランのように曲がり、白クマの身体をあっけなく捉えた。

「な、ソンナ馬鹿ナ……!」

「この世界の先入観に囚われていては、僕の攻略は不可能も同然です。異世界製の特別なものですから。……本来、乗り物として使うものなんですけどね」

炎は白クマを焼き尽くし、再びアルスの左手に戻っていく。

「……終わりですね?」

――返事はない。

死んではいないだろうが、少なくとも戦意は奪った。……ひとまず、アルスは安堵する。

「……と、ボーっとしてる場合じゃない」

倒した敵のことを考えている余裕はない。とにかく助けなければ。

だが、彼に医学の知識はない。

魔法が使える訳でも、薬を持っている訳でもない彼は、怪我人の前ではただの人間だった。

「乗り物」には厳しい重量制限があるので、今すぐ病院へ……という訳にもいかない。

「……ユイナ、ユイナ！」

意識は無い。水に浸かっていた為、体温は分からない。

神などいないと知ってはいるが、それでも神に祈りながら心臓を調べ……。

「……駄目だ、死んでる……」

「心臓は左側ですよ、その人」

後方から声がした。振りかえると、道路から川を眺める少女が一人。どこか目付きが暗く、まるで人形のような表情だった。着ているのは結菜と同じ制服。同級生かも知れない。

彼女は川に飛び降りると、結菜からアルスを引き離し、それから結菜の息や脈を調べ、呆れたように溜息をついた。

「死んではないが、見た目から想像出来ないくらい重体だな。何があつた」

「……本人にしか分からないことです」

「よほど強い衝撃を受けないと、こんなに酷くはないと思うが……。骨折、内臓の損傷、内出血。この怪我は普通ではない。だが、須上さんは悪運が強いようだな。私なら手助け出来るかも知れんぞ」

「……何者ですか。ユイナのことを知っているんですか？」

あまりにも都合の良い話に、アルスは疑いの目を向ける。

「クラスメイトの魔法使い、あるいは超能力者だ。決して鬼の力を使う悪人ではない」

「随分変わってますね……」

「疑うのなら証明してやる。だからしばらくそこで見ている。私の力では完治は無理だが、死なせはしない」

そう言うと、自称魔法使いはかざした掌に力を込め……。

——光を起こした。と思うと、バチバチと音が聞こえて……。

「電気!？」

アルスのいた世界では、魔法は少なくとも身近なものではなかった。無い訳ではなかったが。

「治癒力を爆発させているんだ。寿命は五年……いや、もしかすると十年程度縮むかも知れないが、今死ぬよりはマシだろう」

「本当にそれって魔法なんですか？ 寿命を犠牲に治癒力を上げるなんて、何か悪魔とかそういう」

「少なくとも私の魔法はこういうものなんだ。他は知らん」

……とことなく投げやりな言動。この自称魔法使いは非常に怪しい。

だが、考えてみればそもそも自身が一番胡散臭いのだ。他人を信じられないものが、どうして他人から信頼を得られようか。

「あとこれは魔法だ。決して鬼の力なんかではないからな！」

「必死ですね。実は鬼の力……とか」

「断じて否」

「名前だけでも聞かせてくれませんか」

「名乗るほどの者ではない。……それより、背中を頼めるか？ 何かいるだろう」

背中？ アルスが振り向くと、

白クマのいた場所に、異様に鼻の長い男が立っていた。トレンチコートに身を包んだその姿は、見る者に清潔感を与える。……が、鼻のせいで顔の印象は悪い。

「だ、誰だ」

「分かれますええ！ 貴様にやらせたホッキョクグマデスヨ！」

一瞬、間抜けな空気が漂う。

「あ……えーと、あの炎を喰らって、まだやろうつていんですか」
「アレくらいデ果てるモノか断じて！　しかし、モウ許しませんよ。
サイキックで三人とも葬って差し上げまショウ！」

異世界人と自称魔法使いと超能力者。

通常とは異なる存在……異常者とも言える三人の戦いは、その存在感にふさわしくない、ただの川の傍で始まるのであった。

——誰かの理想などお構いなしに。変に泥臭い、カッコ悪い場所
で。

紅蓮の貴公子・口

暗闇。

真っ暗。

私だけが、眩しいくらいに光っていた。夜中にテレビだけ付けているような、あの感じ。

白クマに襲われて動けなくなっていたはずだけど、痛みは無い。

……体も、自由に動く。

「死んだか、夢か……」

「夢だ。あなたはまだ死んでいない」

背後から、トーンの低い女の子の声。……光村さんだ。

慌てて振り向いたけど、そこには光村さんどころか誰もいなかった。

「あれ……？」

「私は今、外部から直接あなたの心に語りかけている。土足で心に踏み込むような真似をして済まない」

やや早口で言う辺り、彼女は少し焦っているらしい。

「……えっと、夢に光村さんが出てくんのは、あの川で起こったことと何か関係あんの？」

「そうだな。まず言うておくが、あなたはまだ生きている。だが、このままではもうすぐ死ぬ」

……あなたは死ぬ。だってさ。やっぱりか。

タックルを喰らって、目を閉じた時に覚悟していたけど、やっぱ

り死ぬんだな……。と、うん。

実際のところ、それは分かっていた。だから改めて「死ぬ」と言われても、大した驚きはないんだよね……。

「だが都合の良い事に、私はあなたを助ける力を持っている」

「……それって、蘇生出来るってこと？」

「治療だ。安心しろ。まだ死んでいない」

「……まだ死んでいない、か。……生きてんだ、私」

それは、安っぽく言うなら奇跡とでも言うのかも知れないけど……いやそれも大袈裟かも知れないけど。

どちらにしろ、何となく素直に喜べなかった。

根拠もなく、ただ何となく楽しいと思えたのは小学校までだった。

学校の屋上に立ってみても。

なんかの拍子に包丁を持ってしまった時も。

気紛れで親に睡眠薬を買ってもらった時も。

——痛いのが怖くて。終わるのが怖くて。

それで、死ぬ決心がつかなかった。

死ぬ勇気が出なくて、みっともなく生きる弱虫。生きるのも死ぬのも嫌がって、言い訳ばかり並べてさ。

出来れば人類全員巻き込んでさ。私を一匹の蟻みたいに扱ったこの世に、爪跡を残してやりたかった。

中学生特有のあの感じ。納得出来る人はそんなにいないかも知れないけど。

あの時望んだ結末は、今、目の前にあるんだ。

「……ごめん、治療は断つてもいいかな……」

「ん？」

特に驚く訳でもなく、光村さんはただ不思議そうに声を上げた。ただ、興味を持った感じの声。

感情が無いみたいだった。……この子は別に、私を望んで助ける訳じゃないんだ。こんな考え自体が甘えなんだけど、ちょっとショックだったりする。

「……なんかもう、生きる気力が起きないっつーかさ……」

将来。人生。現実。理想。夢。……もう聞きたくない。

最後に待っているのは結局は死で、私達はただ、その現実から目を背けたいだけなんだ。

その死が目の前にある。

死は怖い。けど、未知のものが怖いのは当然のことじゃなか。これさえ越えれば、終わることが出来るんだよ……？

だが、光村さんは溜息をつき、

「悪いが、私は私のやりたいようにやるぞ」

「え……。な、何で？」

慌てて問うも、返事無し。

死にたいって言うてるのに、それを助けるなんて……。

「……訳分かんないよ、それ！ 生きることって何なの？ 生きることの意味あるの？ どうして死んじゃあ駄目なんだよ！」

助けてくれる相手に向かって吠える私。最低だとは思っただけど、

止まらなかった。

——ピリオドは遠ざかる。スクラップみたいだった体が、わずかに回復していくのが分かる。

普通では有り得ないほどの、蘇る感覚。光村さんの「治療」が、ただ切ったり貼ったりではないらしい

「治療力を爆発的に高めた。ただ、この技は代償として、対象の寿命を喰うんだ。完治させることは出来ないから、あとは入院して何とかしろ」

中途半端に治す。そういうことか。

「……最低。死にたがってる奴を、わざわざ中途半端に治すなんてさ」

闇の中、おそらくここにはいないであろう光村さんを睨むマネをしてみる。……反応はない。私には、抗うことも出来ない。

生きれるのに死にたがる私が最低なんだって、自覚はしてるよ。最低。だけど……分かって欲しいんだよ。

私だって死にたくなるくらい必死で生きてるつもりなんだ。なのに、未だに誰も分かってくれないんだよ……。

増水した川は、少年の膝から下を冷たく濡らす。

倒れた結菜は謎の少女……光村によって、川より二メートルほど高い道路まで運ばれていた。

長鼻の男が結菜を追いかけないのは、奇妙な黒い少年が壁としてそこにいるからだ。

「通しテくれるのなら、キミに八危害ヲ加えませンヨ？」

「絶対に通しません。……死んでも」

一度止んだ雨が、再びポツポツと降り始める。

「こちらも善のつもりなのですがネ。まア、ヒーローの座八譲つてあげまショウ」

一度負けているにも関わらず、男は強気に話を進める。

「そしテ、メイドの土産に名乗ってあげまショウ！ オレの名はノーズ・キタムラ！」

「北村……？ この国の名字ですよネ？ でもノーズ？」

「ハーフデスヨ。広い世界を見テきたオレは、お前達のヨウナ狭い世界に生キル若者ト八格が違ウのデス！」

キタムラが一步、アルスに詰め寄る。

——時間稼ぎは不可能。相手の行動が予測出来ない以上、先手をとられるのはまずい！

アルスは先程と同様、左手に「乗り物」を集める。

彼のの左手から放たれる炎の塊。それを、

キタムラは避けない。——直撃。

「自分から突っ込んだ……？ まさか、無傷なんてことはありませんよね？」

冷静を装いながらも、アルスは動揺を隠せない。動きからして、当たってしまったという訳ではなさそうだ。何故か。当たっても無事で済む確信があったから、だろう。

案の定。煙の中、男は何事も無かったかのように立っていた。
「……芸が無イでスネえ」

男の余裕からして、通用しないのは予測済みだった。だが、炎の塊を浴びて平気な人体。そんなものが有り得るのだろうか。

雨に消された？ 川の水でも被っていたから？

「分からない。だから……もう一発！」

再び。今度はバレーボール大の火の塊が、アルスの左手から放たれる。

炎は川の中を這い、キタムラの足元から胸へと飛びかかる。ホーミング性能のある、絶対不可避と言っても過言ではない攻撃。……だが。

「ダから効きませんヨ。学習しまシタか？」

先程と同じ。キタムラに触れた瞬間、炎は初めから無かったかのように消えてしまうのだ。

「……一体、どんな手品を」

「いいデシヨウ。教えてあげマスヨ」

高慢な笑みを浮かべ、キタムラは言葉を紡ぐ。

「オレの超能力ハ、トリワケ変身と温度変化に特化してイマシテネエ。熱や冷気を利用シタ攻撃は、ヨホドノものでナイ限り、オレに八通用しまセン」

「温度変化……。だから極寒の地の動物、ホツキョクグマだったんですね」

普通の熊や百獣の王と言われるライオンに変身せず、あえてホツキョクグマを選べば、確かに寒さを相手に印象付けることが出来る。だがそれなら、逆に暑い場所の生き物でも良いはずだ。わざわざ寒い地の生き物を選んだのは、単純に彼の好みだろうか。

川の中。雨。仮にキタムラが氷を扱うことに特化しているとすれば、今の状況は……。

「次はこちらカラ行きますヨ……？」

そう言っと、キタムラは両手を川に突っ込み、呪文のようなものを詠唱し始めた。

「I can do it・I can do it・I can do it……！」

少なくとも呪文ではなかった。

「アハハハハ、オマエはオレごと固まれ！ アークティック！」

四つん這いの状態で、キタムラが叫ぶ。同時に、叫んだ本人が……いや、叫んだ本人も、氷漬けになった。

「くそ、やっぱりそういう類か……！」

——川が凍っていく。冷たい雨が雪に変わり、辺りは銀世界へと変貌する。

「……ああ、僕が飛んでいるところを見てなかったんですね。残り二人を見逃してでも、確実に僕だけは凍らせようと。残念ですね」
乗り物を纏い、アルスは勢いよく宙に飛んだ。

道路が凍らされていないかという心配はあったが、川の外への影響といえば、雪が降っていることくらいだった。

遠くでサイレンの音が聞こえる。道路の辺りまで浮くと、周囲とこの場所の風景の差に改めて驚かされる。この町で、この場所だけが冬なのだから。

「そして、これだけのんびり浮いていても凍りっぱなしということ
は……」

——トドメを刺すチャンス。アルスは自らを包む炎の勢いを強め、

「待て」

光村が言う。

「……どうしてですか」

「さっきの攻撃で分かっただろう。……あなたの攻撃は、あの長鼻には効かない。」

確かにそうだ。炎が通用しない以上、炎を纏った彼の攻撃はただの「打撃」でしかない。それに……。

「……待っているのかも知れませんが、わざと隙を作り、僕が奴に

触れることを。けどそれはトリガー。手を出せば終わり。そんなところかも知れません。……けど、それなら一体どうすれば」

こうしている間にも、キタムラは氷を溶かして再び襲ってくるかも知れない。早くトドメを刺さなければ……。

焦りの表情を浮かべるアルス。だが光村は、そんな彼に向かって呆れたように溜息をついた。

「私の思う正義とは、悪を滅することに重きを置く。だがそれ以上に、悪人以外の人の命に重きを置く。今、優先すべきは何だ？」

「……あ」

熱くなつて忘れてしまっていた。……そうだ。目的はあくまでユイナを助けること――。

敵は氷漬けで、動く気配もない。となると、現時点で最善の行動は、

「……逃げますか」

「ああ。救急車はこの先の商店付近に呼んであるが……。その炎で運べたりするのか？」

「無理です。商店に行きましょう」

そう言つて、アルスは結菜を背負う。胸だとか足だとかいう性的な刺激などよりも先に、結菜の体から鳴るゴポゴポという音が、背中を通してアルスに伝わる。

健全な人体ではなかなか聞くことが出来ない、少しだけグロテスクな音。……彼にはその音が、地球そのものの生命活動のように思えた。

それぞれの六月

とあるアパートの一室。

「キタガワくん、途中までカメラで見てたよー」

「キタムラです。川で八ありません」

「あれ、そうだっけ？ 何か覚えられないんだよなー、君の名前」
「イヤホンから、男の軽い調子の声が聞こえる。音声のみのネット電話なので、キタムラには彼の表情を知ることが出来ない。」

「失敗しちゃったねー。つーか、氷漬けになつてたんじゃないの？
そのあと見てないんだけど」

「イエ……その、オレは温度変化ヲ得意とスルので、氷ヲ溶かスクらいハ容易なのデス。」

「へえ、便利だねえ。でも、それじゃあ何で須上ユイナを追いかけなかったのさ」

「いや……ソノ、警察が来マシテね。火の玉ダろウガ氷漬ケだろウガ平気デスけど、銃弾ハ苦手デシテ。サイキックで跳ね返ソウにも反射神経ガ追いつカズ……」

「……はあ」

電話の向こうから聞こえる男の溜息に、キタムラは一瞬だけ体を震わせる。男は相変わらず和やかな声を保っている。

「とりあえず君の喋り方、聞き辛くて仕方が無いんだけど」

「……スイマセン」

「まあ、白昼堂々とあれだけ騒げば警察も来るわな。昼というカタ方だったけど。んま、あの子はそんな簡単に死なないとは思ってた

よ。君の落ち度ではない」

「……スイマセン」

「それと、もう一つ聞きたいんだけど……。僕らの使ってるステルス・カメラ。あれ、誰かに勝手に使われてない？」

「ハ？ そんなことガ可能デスカ？」

「いや知らんけど……。何か、目付きの悪い女の子が映った瞬間から数秒ほど、カメラの調子が悪くなってるさ。しかも毎日」

「ホラーじゃナイでスカ、ソレ……」

「だよねえ。霊的なアレだよ。まあ、しばらく須上ユイナの始末は君以外でやつとくからさ。カメラの方を調べておいてくれんかな」

「……カシコまりマシタ、団長」

……雑用？ キタムラにとっては不服な決定事項であつたが、彼には逆らえない。

「やだなあ、団長だなんて。ラセツさんでいいよー。そつちも偽名だけだね」

「……ワカリマ……あ、切れテもうタ」

唐突に切られる通話。まともそうで掴みどころのないラセツの態度。キタムラはひとまず溜息をついた。

数日後。

七色高校。

「……えー、この前から休んでる須上なんだが、少し大きな怪我をしたらしくてな。夏休みが終わるまでは学校に来れないそうだ」

担任は残念そうな声でそう言った。

純粹にクラスの一員が来れないことが残念なのか、面倒な用事が増えたことを憂いているのか。……光村雫には、判断がつかなかっ

た。

少し大きな怪我……。もしあの場に自分がいなければ「大惨事」
になっていただろう。

このクラスが平和でいられるのも、学校が悪い意味で注目されず
に済んだのも、全ては彼女のお陰である。

だが、人の命を救つても大した名誉にはならない。

——殺せば、一気に殺人鬼扱いなのに。

一年前。

軽くだが、旅をした。

桃太郎の真似を試みたかったのだ。

そして、鬼を退治した。

その感触は今も、彼女の手に染みついて離れない。

孤独には慣れている。……と思いこむ。これまでも、これからも。
彼女の心はひどく不安定だ。

「……寄せ書きでも作ってみませんか？」

瀬尾の言葉に、光村雫の思考が停止させられる。瀬尾のその意見
に反対はいない。……多分、いても言い出せないだろう。

彼女の顔にわざわざ泥を塗る者はいない。立場や性格以前に、彼
女は基本的に「善い人」なのである。彼女に逆らうことは悪を意味
する。……多少大袈裟だが、そうなのだ。

「夏が終わるまでは、瀬尾の天下やろうな……」

隣の隣で、溜息交じりに桜木春風が言う。どうでもいいとは思
いつつ、雫は首を軽く縦に振った。

「寄せ書きか……。明日のホームルームは席替えをしようと思って
いたんだが、どうする？ 寄せ書き作りに使うか？」

数秒の沈黙の後、ポツポツと肯定の言葉が発せられる。雫と春風
は無言のまま、事態を見つめていた。……否定はしなかった。

次の日、桜木春風は欠席した。体調不良という情報だけが担任に
伝えられる。

風なのか腹痛なのか、また別の何かなのか……。具体的な情報は
一切ないままに。

当然のことであるが、寄せ書きはユイナのものだけが作られた。
桜木春風の欠席が、二週間続いても尚。

「……という訳で、これから”須上結菜防衛兼サイキック団対策室
本部”の会議を始めたいと思います。部長の星野剣です」

「副部長の坂本竜馬です」

「書記の光村です」

「……何だよ、これ」

二〇二二年 六月三十日。土曜日。

七色町 星熊家。

俺が居候に連れて来られたのは、何かでかいヤクザの家みたいな

場所だった。

「……星野の元実家か、これ」

「そうなんですか？ 僕もあまりよく知らないので、瑞樹さんの方が詳しいと思いますけど……。その、星野さんが連れてこいと」

昔……。そう、確か、俺がまだ小学校にも入学していなかった頃、剣に連れられてここに来たことがある。

アニメ映画を得意とする某スタジオの世界に迷い込んだような一日で、半分夢のように思っていたけど、改めて見るとただのかい家だった。

「十年……。いや、もつと経ったかな。懐かしいといえば懐かしいけど」

で、その家の星野の部屋に入った瞬間。

” 須上結菜防衛兼サイキック団対策室本部 ” に巻き込まれた。

「……いや、待て待て。説明しろやバカ共」

サイキック団というのが俺も遭遇した白クマの組織だということは、俺の頭にも入っていた。

だが、その後その組織（もしくは白クマ）と結菜の間に何があったのか、何故結菜が入院したのかなど、あまり詳しいことは誰からも聞いていない。というか、あまり聞かないようにしていたのだ。

俺は正直何も出来ない。一般人が下手に関わっても迷惑だろう……。思っていたのに、まさか勝手に巻き込まれてしまうとは。しかも知っている前提で。

「……説明って、瑞樹お前今更……」

「この男、噂のkyか？」

空気読めよ、という目線が二つくらい向けられる。剣はともかく、面識知らない女の子にそんな目を向けられるとは。「噂のky」って……。十分古い言葉だと思っんだが。

「……質問ばつかで悪いんだが、誰だその失礼な子」

「光村だ、……いや、光村です。光村零。鬼を狩る者です」
聞くと彼女が自ら答えた。

「……この家には一番いちゃいけない奴じゃねーか」

「今は敵わないということが分かったので、いきなり剣さんを襲ったりはしません」

不本意ですが、と残念そうを越えて怖い顔で言うその子。

女の子というか、薄気味悪い餓鬼というのが適当かも知れない。

……餓鬼。鬼狩りと自称する彼女自身が鬼に例えられるというのも皮肉なことだな。

「私の話よりも、今はこの会議の話でしょう、皆さん」

呆れるような目付きで餓鬼が言う。ホント生意気なんだろうなこいつ。

「だな。えー、まずは説明しようか。分かってない奴もいるみたいだし」

剣が俺を見ながら言う。というか俺を見ているのは剣だけではなかった。……長いモノには巻かれろ、だ。仕方が無いのでこれ以上自らの正当性を訴えるのはやめておこう。

「えー、まず、ちょっと前、結菜が白クマに襲われて大怪我をしてしまった。あの白クマがサイキック団とかいう組織と繋がっているのは瑞樹も知っているだろう。」

その白クマが結菜を襲った理由は分からんが、多分、組織ぐるみで結菜の命を狙っているんだろう。んで現在、結菜は入院中だ。あの意味袋のねずみと言えるな、今の結菜の状態は」

「……その結菜を守るのが、この集まりってことか？」

「そういうことだ。幸い、ここには人外が三人もいる」

俺以外全員じゃねーか。俺はここにいらなくても良いような気がするんだが。

「……でも、守るつてもどうやってだよ。ずっと監視つて訳にはいかんだろ？」

「それを話し合う場だ。何か、坂本……というかアルスに案があるんだろ？」

「ええ。僕の……こいつの出番です」

居候が、手に握りしめた物体を見せる。……ゴキブリだった。

「うおお！」

「げ」

「ぎよわああああ！」

俺含め、全員が大声を上げる。鬼狩りの餓鬼に至っては居候ごと蹴り飛ばす始末だ。基本的にはクールな態度をとっている彼女だが、案外虫は苦手らしい。

「……こ、この世界……いや、地球の人……いや、日本人って、虫嫌いなんですか？」

「特にゴキブリはな。……つか、ゴキブリなのか？ それ」

「平たく言うと、虫を模した偵察マシンですかね。これを病院に仕掛けておけば、見張りは完璧です。結菜の病室に異常があった時には、僕らがすぐに駆けつけることが出来ます。ただ通信距離が……」

徐々に、ではあるが、ようやく会議っぽくなってきた。

というタイミングで、戸が勢いよく開いた。少年がいる。いきなりで困惑の俺達。剣除く。

「……透生？ 自分から出てくるなんて、どうしたんだよ」

剣が、やや喜びを含んだ声で彼に言う。

噂には聞いていた引きこもり……。隕石も彼の仕業だったか。彼は剣とは対照的な、苛立ちのこもったような声で言った。

「何か、部屋にいたら聞こえてきたから忠告に来た」

「忠告？」

我ながら少し間抜けな声が出てしまった。トオルと呼ばれた彼が俺を睨む。……拗ねた子供のような、寂しげな目。

「あんまりノンキだから言っておくけど、テメエら、地球の心配もちょっとはしろよな。俺のゲームを進めないと隕石が落ちるのに、唯一のプレイヤーが怪我だぜ？」

「……唯一？」

鬼狩り以外の全員が固まる。俺含め。

結菜は多人数で行うゲームだと言っていたはずだが……。

「ゲームオーバーになったら終了っていうルールを作っていたんだ。そしたらそいつもこいつもヤワな奴らで、まだ一カ月も経ってないのにほぼ全滅だ。」

唯一生き残った須上結菜はゲームの腕は申し分ない。けど入院してどういうことだよ。変な組織も出てきたみたいだし、何だよこの状況は。……俺なんか滅ぼされてもいいってのかよ、この星は！」

そいつの顔は、喧嘩をした時の結菜の顔にそっくりだった。

入院してから今まで、結菜は未だに一度も目を覚ましていない。

医者に言わせれば少々異常なことらしい。半月も意識を失うほど、結菜の怪我は大きくないと

……ひょっとしたらこのまま目覚めないのでは。時々、そんな風に思うことがある。

結菜が目覚めなければ、この男が地球を滅ぼすのだろうか。

……どうだろう。俺はそんな風には思えなかった。

むしろ、心配なのはサイキック団の動向だ。責めて隕石の問題が解決するまで、大人しくしてくれればいいのだが……。

「……はっ」

と気付いた。森の中。……森の、中。

……も、もももも森の中ですぜ旦那ああ！

どういつ人間なんだ私は。

けど、うん。実際、それくらい騒いでもおかしくない状況だった
り。

……どうしてこんなところにいるんだろう。記憶は……あるよ。
白クマに襲われて、光村さんに治療力を高められて……。

それで、どうしてこんなところにいるんだろう。

——まさか、ここって……、

それぞれの六月（後書き）

ひとまずこの辺りで起承転結の承まできたかなーという感じです。
一応区切りということで、今回はゴチャゴチャしてしまったかも知れませんが。やたらと視点移動してます。

ぼちぼち転ということで、今までの大人しいのを挽回できるような展開にしていきたいなーと思っております。

感想やweb拍手コメントも見えますよ！
見る度にドキッとします。良い意味で。

虚な空の下で

七月一日。日曜日。

休み。平日よりも緩やかにやってくる、朝。

叩き起こされた。……携帯電話の着信音に、星野剣は怒りを露にした。

「……んだよチクシヨオ」

陰鬱な気分を振り払うよう、勢いよく手を伸ばす。従弟の透生がらだった。

「……もしもし？ 透生か？」

「姉さん、異常事態だ！」

覚醒を急かすような大声が、耳元で響く。

「俺の……ゲームの中に、須上が！」

「へ？」

いよいよ錯乱状態にでもなってしまったのか。ばーちゃん一人じや抑えられないかもな……。

剣は電話を切ると、家を飛び出し、ほどほどのペースで元実家へと向かう。

相変わらず通行人の目を惹く屋敷まで数分。乱暴に玄関を開ける。

「透生」

……返事が無い。ばーちゃんの部屋からはいびきが聞こえる。それは問題無いのだが。

「……透生？」

いない？ いや、そんなはずは……。剣は、電話の慌てようを思い出す。透生にしては珍しく、素直に感情を表す声だった。普段と違うことが起こる。それだけで人間は警戒心を強めてしまう。

恐る恐る、透生の部屋の戸を無断で開ける、と。

「うお」

近未来的な雰囲気、思わず怯んでしまう。内装は和風だが、置いてある数々の機械は、現代のものよりも小型で、丸みを帯びていた。……そこまでは、剣も何度か見たことがあった。

だが、その機械達がまともに動いているのを見るのは、それが初めてだった。

「……すげえ。未来のモノみたいだな……」

プロジェクターのようなものは無かったが、光は空气中に立体的に映し出されていた。ホログラムのように存在する空間には、ミニチュアの世界が広がり……。

——その中に、人がいた。……見間違はずのない姿。結菜だ。

「おいおい、そういうことかよ……。やっぱこいつ、結菜なのか……」

「……俺は、そう思ったけど」

部屋の隅で、透生は複雑そうな顔をしていた。

日時不明。森の中。その森がどこにあるのかってのは、正直全く分かんないんだけどね。

気付いたらここで目が覚めた。いやまあ、ここまで見覚えのない場所だからね。むしろ現在進行形で夢を見ているのかも知れませんが。

でも、夢にしてはやっぱりリアルなんだよね。感触とか感覚とか。あと、風景の質感みたいなやつが。

森の中にアイテムが落ちてたり、敵が出てきたり、

そいつを倒したらアイテムが出てきたり、
つーかいつの間にか鎧を着てたり鎗を持っていたりとか。

正直困惑はしたけどさ。まあ、でも、うるついてたらぼんやりと
理解出来てきた。これは、あれだ。

——多分、ゲームの中なんだ。隕石のあのアレの。
創作のネタにされるような、よくあるアレですよ。閉じ込められ
て元の世界に帰れないぜ。どうしよう困った助けてくれ帰りたいっ
ていう。

ああいう類の主人公って、揃って帰りたがるような気がするけど、
いざそういう状況になるともう……ね。

あんまり、慌てる意味が分からないというか。
他の人もいないみたいだし、さしずめここは、私だけの狩り場な
訳ですよ。

どんな漫画やアニメだって、最初は誰かの妄想から始まっている。
だから、例えこの場所が透生の作ったものだとしても構わない。

——理想郷。そんな言葉が浮かんだ。

「……よ……っしやあああああああ！」

とりあえず叫ぶ！　だって、ゲームの中だよ！

学校から帰ってゲーム！

休みの日は朝からゲーム！

そんな感じでゲームばっかやってたのは、あの場所に憧れ続けて
いたからな訳で！

私は今、その憧れ続けた場所に立つてるんだよ！

現代っ子のほとんどが、一度は考えるであろう夢。ゲームの世界。ロマンに満ちたファンタジーの世界。

分からないことは確かに多い。どうして私がここにいるのか、現実の方はどうなっているのか、私がこのゲームに与える影響……など。

ぶっちゃけ何かもう全部どうでもよくなってきた。気にしないといけないのは事実だけど、そんなことよりこれはチャンスだ。

人生で一回あるか無いかくらいの、己の人生を良いモノにする、大逆転のチャンス。

大事なことも気にはするけど、ひとまず冒険ですよ。冒険！

森の中、木漏れ日の射す静かな空間。落っこちてるアイテムとか立ち塞がるモンスターとか！

この世界では私が主役でいられる。……それが、堪らなく嬉しい。

とりあえずは歩いてみる。それだけでも楽しい。ゲームは昔ながらのドット絵だったはずだけど、この世界は立体的。現実と何も変わらない。こういう仕組みだろ、これ。

この世界をベースに、パソコン用に簡略化してるとか？ それとも、ドット絵の世界を物凄くグレードアップしたらこうなったのか。どうでもいいか。

さて。雑魚モンスターを倒しながらとっとと進むと、街に着いた。MTBOOK。マウントブック？ と読むのかな。やっぱりゲームの中に登場していた町と同名だ。

ということは、町人の台詞も同じか。

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚百Gになりますか……」

ぱつと見は普通の人と変わらないその人が、ゲームと全く同じ内容を棒読みで喋っているのはかなり奇妙な光景だった。喋っているからには声を出してる……はずなんだけど、どんな声なのか印象に残らない。耳から直接テキストを読み取るような、そんな感覚。

……困ったな。私以外のプレイヤーもいないし、新たに得る情報が無い。

「んー、どうしたものかな」

「ようこそ、ここは旅の」

「うるさいな」

試しに宿屋の主人を槍で突いてみる。……スカッと。空を刺す。やっぱりゲームと同じだ。モンスターや当たり判定のあるギミック以外には、攻撃は当たらない。

「……まあ、私の為の世界……みたいな感じで良いかもね、それも」
ちよつとだけ心にある人恋しさは、人間関係から完全に解放された自由さの裏返し。フリーですとも。ザ、自由。颯爽と森に向かう私。

なんか、この様子をどつかのゲームショップの宣伝用テレビで流して欲しいくらい自惚れ出来るよ今なら。こつ、颯爽と槍を振り回してモンスターを一掃！ みたいな。

考えていても仕方ないし。良い方法を思い付くまでは、モンスター狩りでもしていよう。

もし、万が一これが夢だっていうなら。それなら……いつそ死ぬまで寝かせてよ神様。

「第二回”須上結菜防衛兼サイキック団対策室本部”の会議を始めまーす。部長の星野剣です」

「副部長のアル……坂本竜馬です」

「書記の光村です」

昼。星熊家。

各々自己紹介を進める三人と、

「前のもだけど、何でノリノリなんだよお前ら……」

そう言つて溜息をつく俺、そして一言も喋らない星熊透生。仏頂面。

ある意味、誰が敵で誰が味方なのか分からないような組み合わせ。敵の敵は味方というが、今回の場合、俺達を引きあわせたのは一つのトラブル……らしい。具体的な話を一切聞かされていない俺が、まず話を進めないと。

「……今回は何を話し合うんだよ」

進行役という事務的な役割は、地味で面白味も薄い。そう自覚してんだけどな。このメンバーを無難にまとめられる者はいないが、可能性があるとしたら俺だろう。

「相変わらずつまらん男だな」

本当にマジつまらん声で、鬼狩りの光村が言った。

「……それくらい分かってるわ。そんなことより」

「ああ。えーとな、隕石関係のあのゲームに、結菜が入っちゃった。だから対策を話し合おうと思つてな」

星野剣が言う。冷静に話すにはぶっ飛んだ内容。

「……ゲームに入った？」

信じられないというよりは、ピンと来ないといった様子の俺含む一同。

「……実物を見たら納得するんじゃないのか？」

剣が言つと、透生は目を逸らして冷たい表情をした。

「……俺あ、他人を部屋に上げるのは嫌だから」

「えー。固えな。でもアレを見せないと、言葉で説明する自信も無いんだけどなあ……」

困った様子の剣と、それを睨み続ける透生。

いつもは誰に対しても比較的強気な剣だが、引きこもりの従弟には頭が上がらないらしい。

俺には新鮮な光景だった。確かこの二人、年齢差は俺と結菜の差と同じだったな……。と、不意に結菜のことを思い出してしまった。

ゲームに入った。……一体、どうやって。

「ちなみに勘違いしている奴もいるかも知れないけど、パソコンをパカッと開いて入った訳じゃねーからな」

剣が言う。誰もそんな勘違いしてねえよ。

「違うのか？」

鬼狩りの光村がそうやって驚く。コノヤローこの前散々俺のことをKY呼ばわりしやがって。本当のKYはお前じゃねーかコノヤロー。……いや、芸人としてはあれが正解なのか？ いや芸人じゃねーけどさ。

「ゲームの世界に入ったってことだろ？ そりゃそうだろうけど、問題はその入り方」

「それを知る為にこの面子を集めたんだろうが。異世界人とゲーム主催者。謎の鬼狩り少女に一般人代表男」

一般人代表の俺は絶対ついじゃねーか……。

「……まあいいか。じゃあ、とりあえずこの状況を説明出来る奴、いるか？」

俺が言つと、全員が黙り込んだ。——沈黙。いつにもまして冷たい空気。

ある意味最悪の事態かも知れない。このメンツでそりゃないだろう……。

「まさか、誰も何も分からないってことは……」

そしたらこのメンバーがただのダメな軍団ということになるが、幸い、透生が一人だけ、だるそうに手を挙げた。挙げたというより、掌を見せたという具合で。

「全然分からねえってことはねえよ。ただ、普通に考えて有り得ないんだよ。まず、当然だがゲームの世界は実在しない。あのゲームは比較的特殊だが、それでもあの世界は情報が成す仮想の世界だ。須上の兄さんよ、今日、須上の体は病院にあったか？」

「あ、ああ。ここに来る前にちよつと寄ったが、普通に寝てたぞ」「つまり、あやふやな言い方だが、こういう場合、心だけがゲームに行ってしまった……とか、そんな状況だと考えるのが普通だ。……普通とは言えないけど、それは現状が既に特殊な例だから仕方ない」

「でも生きてんだろ？　心が移動したっていうなら、体は脳死するんじゃないのか？」

素朴な疑問という感じの間の抜けた声で、剣が言った。透生は頷く。

「魂を抜きとつたら脳死するのが一般的だな。けど、あいつは生きている。……だから結論が出ない。一体、何がどうなってんだか」アテにしてた主催者でさえこんな状況か。

「あと、ヤバいのはゲームオーバーになった時だろうな。死ぬか、目覚めるかの二択……」

「……あ」

全員が、一斉に口から漏らした。何しろ現実にあんだけケチをつけて、二次元世界に憧れ続けていたあいつだ。調子に乗って戦いまくってるに違いない。

「おいおいおい……やべえぞ、これ」

「透生の手で何とか出来ないのか？　主催者だろうがお前」

目線が透生に集中する。

「んなこと言って下手にバグらせたら、本当にあいつが死ぬかもしれねえ。それにまあ、実際に歩いて隕石を止めるってのも面白いだろ」

透生は、無理して笑う子供のように言った。

「……いよいよ、俺とあいつの勝負を邪魔する者がいなくなった。俺のギミックが勝つか、あいつの冒険が勝つのか……。地球を賭けた勝負が——」

「んなこと言って、死んだらどうすんだよ！」

剣が、珍しく透生に怒鳴った。結菜に対する心配と、結菜を想っているであろう透生への心配からだろう。

「……だから、どっちにしろリスクがあるんだから仕方ないだろうが！」

「おいおい、喧嘩すんなよ……」

結局、会議はうやむやなまま、「透生とアルスが原因究明に尽くす」という結論で終わった。

「……心当たりがない訳ではないんですけど、ね……」

解散後、アルスは静かに呟いた。

——会議を終え、帰り道。光村雫は病院へと立ち寄った。

心がゲームの方に行ってしまったと透生は言っていたが、須上結菜の脳死は確認されていない。

実は既に死んでいるのか。

それともここに、まだ心が在るのか。

「……須上さん。答えられるか？」

心に直接問い掛ける。それが、彼女の“鬼”としての特技だ。肉体を捨てれば憑依することさえ可能だが、自らの命も危険にさらされる為、彼女がそれを実践したことは一度もない。

「……やはり、体にはいないのか……？」

「光村さん？」

聞こえた。

「無事なのか？」

「ごめん、ちょっと今でかいゴブリンと戦ってるから、集中させて欲しいんだけど」

ゲームの中にいるのは間違いないようだが、それでも、彼女の心はここに在る。

——おかしい。仕組みが分からない。

夢は頭の中での出来事だが、ゲームはそうではない。遊園地に足を踏み入れず、どうやってアトラクションに乗り込むというのか。

「この、デカブツ……！」

こちらの事情も知らず、楽しそうにゲームを楽しむ須上結菜の声。

「……でかいゴブリンか」

「うん。っていうかいきなりどつかから光村さんが話しかけてくるってことは、これってやつば夢なの……？」

不安そうな声で聞いてくる結菜。……無粋なことをしてしまったと、雫は少し後悔した。

「——いや、半分現実だ。邪魔して悪かったな。……まだしばらく時間はある。精々死なないように楽しめ」

「そっか。了解。何かよく分かんないけどアリガト！」

激しい戦いなのか、結菜のテンションが上がっている。危機を目の前にすると、何となく勢いがつく。それが人間だ。

「そこが、一番相性の良い居場所なのかもな」

学校で窮屈そうしている須上結菜が、活き活きとした表情でゴブリンを狩っている……。その様子は、付き合いの浅い雫にも容易に

想像出来た。

星野剣は夜の公園。星熊透生は自室。自身……光村雫の場合は墓場。人にはそれぞれ、自分の得意な場所、本拠地ともいうべき場所がある。ここだ、と特定の一ヶ所が定まっている訳ではないが、得意不得意、好き嫌いなどがあるのも事実。

その場所が、今の須上結菜の場合、実在しないはずの夢や幻の世界……。

「随分と儚い存在なんだな。貴女は……」

そして、その場所に居られる僅かな時間を邪魔する自分は、今の彼女には不必要だと気付く。

——帰ろう。光村雫が立ちあがった、その時。

病室の近辺に異様な気配を感じ、構える。

気配は数日前の白クマに少し似ている。……噂のサイキック団、という奴だろうか。

——知らなかった。悪い奴は鬼だけではないということを……。

——なら、殺さなくては。

光村雫は、微かに笑っていた。

正義VS正義

病室の外に禍々しい気配を感じた光村は、息を止め、自分の気配を限りなく無に近付けた。

外にいるのが何者かは彼女にも分からない。だが、須上結菜は狙われている。彼女の近辺に現れる異質な何者かは、敵である可能性が高い。

殺害、あるいは誘拐、拉致……。目的は分からないが、とにかく放つてはおけない。光村はドアの陰に身を潜めた。奇襲でなければ勝てない、という訳ではない。ただ、早く終わらせてしまいたいだけだ。

ノックの音がして、ドアが開く。

病室は狩り場に変わる。餌に食いついた獲物に飛びかかろうと、一步踏み込む光村。

——容赦はしない。絶対に止まらない。

……もう、止まれないのだ。

ドアを開けた彼にとっては、予期せぬ事態だった。

とある事情から殺人をすることになった彼は、懷に凶器を忍ばせ、標的の病室に入った。すると、その瞬間、少女らしき何かに後頭部をわしづかみにされ、顔を窓ガラスに叩きつけられたのだ。

轟音。粒子となって飛び散るガラスの破片。窓を突き破り、遙か下の駐車場へ落ちて行く。

「お別れだ」

彼の背中に乗った少女が言う。全く予定外の事態。

何が起こっているんだ？　こんなはずじゃなかったのに。
地面はもう、目の前にあった。

反射的に、手を伸ばす。地面に手を付き、直後。顔面が地面に叩きつけられた。

死んだだろう。……普通の人間なら。だが。

彼は、生きていた。意識もはっきりしている。その顔にも手にも体にも、外傷は一切無かった。

「危な……。何とか助かった」

心の底からほっとしたように呟くと、彼は未だに自分の後頭部を掴んでいる少女の手を両手で掴み、自分の頭から引きはがした。

「……な、何故だ」

少女が驚く。おそらく力に自信があったのだろう。華奢な腕だったのに妙だと思いつつ、彼は立ち上がり、自分を殺そうとした少女の姿を確認する。

決して大きくない少女だ。印象に残らない暗い色の服に、目元を軽く覆う前髪。目付きの悪さを見て、彼はその少女がいつも自分達の邪魔をしていた者だということに気が付いた。

「……また、君なのか」

少女には心当たりが無いらしく、無反応のまま、きょとんところちらを見ている。

自分なんかより、その少女の方がよっぽど怖いと彼は思った。ジーンズにシャツという簡単な服装の自分が、不気味な少女に襲われている。

「……どうして邪魔をするのか知らないけど、僕らの邪魔をするということは、君は悪……で間違いないよな？」

「は？」

再び、きょとんとした顔。まるでギャグ漫画のようだった。

予想外のことを言われた……ということだろうか。彼女に自分が悪だという認識は無いらしい。

「……ということは意見の相違か。君はサイキック団って知っているだろ。僕はその団長。瓜生正義という者なんだが」

「ああ、なんだ。大将首か」

少女は問答無用で襲いかかってきた。その足から生み出されるスピードは、もはや人の限界を超えている。

「うおお！　っと」

彼は一瞬で飛び込んでくる少女のスライディングを避けた自分を誉めたいと思った。

後ろから、今度は拳が飛んでくる。リーチは短い。武器を持つている訳でもない。だが速い。すぐに距離をとったので避けるのは容易だったが、防御を捨てたその攻めに、彼は勢いで負けそうになっていた。

「ちょっと待ってくれ」

「嫌です。だって、貴方は普通じゃないでしょう」

猛攻が止んだ瞬間、少女の姿が消えた。……いや、上に飛んだのだ。

怪しい組織の団長で、殺人計画を企てた彼だが、少女がスカートだったら良かったのに、という思いが一瞬でも生まれる辺り、彼も一般男性と大差無い。

そもそも彼にも、自分の行動が悪事だという認識は無い。彼は、自身は今でも普通だと思っている。

「普通じゃないでしょうって……。確かに僕は超能力者という、普通とは言い難い立場だ。でも、いくらなんでもそりやないだろ」

少女が降ってくる。人間の跳躍力ではなかった。踏まれたらおし

まいだ。どうにか逃げなければ。

——いや、上から来ることが確定的なら、彼は逃げる必要が無い。彼は両手を天に突き出した。

「よし……来い」

ビームでも撃つような構えだが、彼にそんな芸当は出来ない。弾丸と化した少女の蹴り。……それを、彼は掌で受け止めた。

飛び退き、着地した少女は、彼の平然とした表情を見て、一瞬だけ怯えた目をした。

彼は、またしても無傷だった。普通なら、マンションの五階ほどの高さから急降下してきた人間を、両手で受け止めることなど不可能だ。怒りからか焦りからか、顔をしかめる少女を見て、彼は内心ほっとしていた。

——結構、表情がころころ変わっているじゃないか。

それは、目の前の少女が化物ではないという証拠のように思えた。

「……落ち着け。まずは話を聞くんだ」

「……嫌です」

彼女は自分の掌を、二つとも正面に突き出した。その掌の中央に少しずつ、青白い炎が発生する。

二つの炎はやがて掌を離れ、それぞれ独立したヒトダマとなって浮遊し始めた。

「焼かれろ」

ヒトダマが二つ、まっすぐ彼に向かってくる。

ゆらゆらとしたイメージに合わないような、流れ星のようなスピード。それらを彼は、二つとも掌で受け止めた。

……炎は消滅。まるで、最初から何も起こっていなかったような状態。

「……は」

明らかに少女が動揺した。……こちらから仕掛けるなら、今だ。走って距離を詰め、力ずくで一気に地面に押し倒す。

ようやく余裕が消えた少女の顔。彼女は怒ったり焦ったりと、たった数秒で色々な表情を浮かべていたが、そのうちに疲れたのか、だんだんと溜息交じりのやる気の無い顔で落ち着いた。

「……不可解だ」

やる気の無い顔のまま、彼女が言う。

「何がだよ」

「貴方の能力に決まっている。何をされても無傷のくせに、全くといえるほど表情に余裕が無い」

「……まあ、色々とあるんだ。今の能力が身に着いたのも、その使い方に気付いたのも、結構最近のことなんでね」

いつの間にかタメ口になっている少女の口調に溜息を気にしながら、彼は頭の中で、手帳を開くように過去を思い返した。

少し前までは、彼も一般人だった。自分が妙な組織を作り、誰かを殺そうとするなど、想像もしていなかった。

……近所の歯医者が潰れて、水道水がまずくなって、彼女と別れて、新しい彼女が出来た。

それを激動の一カ月と呼んでいたのだが、その翌月。そんな前月の出来事の全てがちっばけ過ぎると感じるほど、大きな変化が訪れた。

拍手をしても、音が鳴らなくなったのだ。ちっばけなことだが、世界をひっくり返すくらい、大きな出来事でもあった。

「喧嘩でこの力を使ったのは、正直今日が初めてだった」

「喧嘩？ 殺し合いの間違いだ」

「いや、殺し合いって訳では……」

そこでようやく、彼は自分は少女を押し倒してどうするつもりなのか、決めていなかったことに気が付いた。

少女を押し倒す、という状況。冷静に考えれば、かなり惨いことをしている。だが、彼には目の前の少女を襲う気も、勿論殺す気も微塵も無かった。

瓜生正義は殺人鬼ではないのだ。彼は標的さえ殺害出来れば、死んでも構わないと思っていた。

……それほど、須上結菜を殺すことに本気になっていた。逆にいえばそれは、彼が殺人に全く慣れていないという証でもあった。

だが、少女は……目の前の邪悪は、善良であるはずの自分を殺そうとしている。

怖い。確かに自分の力は、彼女のあらゆる攻撃を対処出来た。大抵の暴力なら、どうにかやり過ごすことが出来るだろう。

だが、自分の力が正確にどこまでの攻撃を防ぐことが出来るのかは、まだ完全には分かっていない。例えば刃物。鋭利な刃での攻撃を相手に、果たして自分は生き残ることが出来るのか。

今日だけで終わるのなら良い。だが、これで度々狙われるようになってしまっただけは困る。

——動きを封じている今のうちに、理解してもらえない。

まずは、自分の言い分を聞いてもらおう。男は全てを少女に話すことにした。

「……聞いてくれ。僕の話を」

少女は返事をせず、親の敵でも見るような目で彼を睨んでいた。

その目にやや押されながらも、彼はゆっくりと、言葉を紡ぎ出した。

正義VS正義（後書き）

感想やweb拍手など、ホントありがたいです。

正義VS正義2（前書き）

11年11月11日（↑100年に一度！）、若干修正。
拍手での指摘、ありがとうございます。

正義VS正義2

病院の駐車場。

散ったガラスが、夕陽を反射する中で。

サイキック団団長、瓜生正義は、目付きの悪い少女……光村雫を押し倒したまま、口を開いた。

「……僕があの子を……須上結菜を殺そうとするのには理由がある」
「知るか」

「黙って聞いとけよ……」

いちいち反抗的な態度に、瓜生は半分呆れていた。

少女は自分に余裕がない、と言っていたが、この少女自身にも、とても余裕があるようには見えない。

刺々しさに、何となく溜息が洩れる。だが、少女は特に抵抗する様子もなく、ほうけた顔で彼の顔を見ていた。

一応、話を聞く意思はあるらしい。

彼は、ゆっくりと言葉を紡ぎ出した。

「……先月の、激しい雷が落ちた夜。僕は自室でパソコンを開いていた。そしたら急に画面が固まって、少年が映ったんだ。彼は隕石を落とすとか何とか言っていて、その時は、それが夢か何かだと思った」

「隕石と少年？ どこかで聞いたような話だな」

否定されないのが意外だった。

「だが、ずっと画面を見てみると、急に激しい頭痛がして、立っていられなくなった。……それで、気が付いた時、僕は未来の風景を見ていた」

一応静かに話を聞いていた少女の目が、急激に冷める。

「……悪い夢だな」

ただ冷たいだけではない。……その瞳には、殺意がにじみ出ている。

「……でも、この話は嘘じゃないんだ。何故、未来だと分かったのか。何故、僕にだけ未来が見えたのか。謎は多いけど、本当に嘘ではない。未来の世界は、一人の少女に滅ぼされていたんだ」

……笑われても仕方のないような話だ。彼自身、自らの発言が妄言にしか聞こえない。他人がこの話をしていたら、笑い飛ばしてしまうだろう。

だが、彼は本気で、大真面目にその話をしている。

「その少女の名は”スガミユイナ”。その後、実際に現実に、近所にその少女がいることを知った。

……そいつが暮らしているのを、黙って見ていられるはずがないじゃないか。僕はあの子を消して、未来を変えなきゃならない。だから、キタガワ……キタムラだっけ……あいつや他の仲間と共に、あの子を殺そうとしていた」

「デタラメな妄想よりも、今、自分が犯そうとしている罪に目を向けたらどうだ」

少女は冷めた目のまま、トーンの低い声で言った。

犯そうとしている罪。……イコール、世界を救おうとしていることだ。

殺人は悪、という簡単な話に納得している質ならとんだ幸せ者だと、彼は思った。

人口爆発。そんな時代で、人の命ばかり尊重していくことは無理

だ。

——もつと、やるべきことがあるはずだろ。

「スガミユイナ」は、生きていちゃいけないんだ」

「……貴方こそ、生きていくべきではない」

理解されない。

自分の行おうとしていることは、自らの人生全てを棒に振って世界を救おうという「善」であるはずなのに。

邪魔が入る。キタムラだって二回も失敗していた。

次は一人ではなく、全員で一斉にかかるう。でも、自分に次があるかな……。

自分は押し倒している側だ。有利なはずなのに。

少女の威圧感に押されている。その目に、死が映っている気がした。

自らを奮い立たせるように、彼は口を開いた。

「……ただ、怖いだけだろ？ みんな、無難に生きていたいんだ。今までの価値観が僕に壊されるのが怖いだけなんだよ。

結末を知っているのは僕だけだ。だから僕しかその解決法を理解出来ない。殺した後は自分も一人で死んでいく。そういう覚悟はあるんだ。」

少女は答えない。……代わりに、その掌から再び青白い炎が起る。

少女を押し倒したままの状態では、ヒトダマを避けることは出来ない。彼はひとまず飛び退くと、まっすぐ飛んでくるヒトダマを掌で受け止める。

少女が、まさにその隙を狙っていたことにも気付かずに。

「確か、着地の際にも掌を一番最初に出していましたね」

「……だったっけ」

「とぼけないで下さい。……もう、タネはばれてますよ」

ヒトダマに気を取られているうちに、彼女の姿が消えてしまった。また上空に飛んだのかとも考えたが、上空には夕暮れの中を飛行機雲が漂うだけだった。

「……消えた？」

「後ろです」

——直後。背中に、車に衝突されたような衝撃を感じる。

コンクリートに叩きつけられても無傷だった彼が、後ろから蹴り飛ばされ、地面に転げた。

「が、——はっ」

自分が立ち上がるよりも速く、イノシシのように近づいてくる黒い少女。

咄嗟に掌を構える。だが、少女は攻撃せず、そのまま後ろへと駆けていった。

「……うぐっ」

後ろに回られ、二発、三発と、背中に衝撃が伝わる。ようやく振り向き、四発目を受け止めるも、五発目以降は目にも止まらぬ連続攻撃。実力は向こうの方が確実に上だ。二つの手では防ぎきれない。

力を吸収する手。

彼の使う超能力は他にもあったが、戦いの中で使えるような能力は、それくらいしかなかった。

「……くそ、悪魔め……！」

「悪魔？ いいえ、正義を執行しているだけです。悪である貴方を、私は消す」

消す。その言葉通り、彼には最早、助かる道がなかった。

「……どうなつてんだ、この世界は！」

自分が悪呼ばわりされている。それが、破滅へ向かう未来を変えようとした善意の結末だ。

悪は必ず滅びる。最後に残るのは正義だ。……嘘だと思いたくないじゃないか。なのに。

「……あの子が生きてちゃダメなんだよ……！」

「まだ喋れますか」

少女は蔑むような目で彼を一瞥し、再び拳を突き出す。

正義が、滅ぼされ――。

「――あ？ れ……」

彼の目の前に、大きな壁が出来た。

透明な、ガラスみたいな壁だ。

炎と少女の拳が、壁にぶつかり、弾かれる。

「つと……。危なかったな」

傍にいた、中性的な美人が笑う。細いのに大柄だと思わせるほどの身長と威圧感のある、……おそらくは女。彼女の右手には、何故かゴキブリが握られている。

「……だ、誰？ そのゴキブリは一体」

「須上ユイナの知人だよ。このゴキブリは機械な、一応」

声は女性のものであったが、口調は男よりも男らしい。その女は、膝をついた彼に向かって、無邪気に、面白がるように笑いかけた。

ゴキブリが、光村が瓜生と名乗る男性をボコボコにしている風景を映す。

剣としては、あまり光村と頻繁に顔を合わせたくはなかった……が、止めにいくしかなかった。

「……全部聞いてたよ。アンタ、未来が見えたんだってな？」

星野剣は、穏やかな声で瓜生正義に問いかけた。剣は、光村のようにその男を悪だ、とは思っていなかった。

せっかちで行き過ぎた普通の人。ついでに怪我人。助けるべき人物。

瓜生は何も言わず、彼女の顔を見て呆然としていた。

「……どっちの味方だ」

「え」

彼の問いに、剣は思わず困惑した表情を浮かべる。

——あれ、どっちだっけ。考えてみれば自分はどちらの味方でもないじゃねえか。

「え、あー、あれだ。中立じゃ駄目か？ どっちか最悪の第三者なんか、邪魔なだけだろ」

「……まあ、そうなの、か……？ まあいいか……」

割に素直である。意見を絶対に曲げない光村より、よっぽど話がし易そうな人だ、と剣は思う。

「ん、まあ、そんなことより……。結菜が世界を滅ぼすっていう話だけど……」

剣が話を振ると、彼は目の色を変えて、必死な声で話し始めた。

「言っておくが嘘じゃない。あの少女を早く殺しておかないと、世界が危ないんだ。」

サイキック団を作った理由の一つは、彼女の殺害を確実に行うことだ。全員、その後の人生を捨てて挑んでいる」

「……いいのか？ それで」

「ああ」

「断言か。何と言うか、少し焦り過ぎじゃないのか？」

「焦らないといけないんだ」

彼は剣の言葉を聞いていない訳ではないようだが、参考にするつもりもあまりないらしい。人の言葉を参考にするほどの、心の余裕がないのだろう。

剣は少し考え、すぐにその気持ちを理解した。

確かに、自分が同じ立場だったら彼のようになっているかも知れない。

自分だけが知る真実。義務感、正義感、恐怖感……。おそらく、色々な感情が彼を動かしている。

自分と対立しているはずの意見が理解出来てしまうのは、少し辛かった。

「……身内じゃなけりや、アンタと同意見だったかも知れねえ」

そう言った瞬間、瓜生の顔が驚愕と喜びで満たされた。

「……理解してくれるのか？」

「少なくとも、共感くらいは出来るけどな」

結菜が世界を救うという説があつて、世界を滅ぼすという説。色々な説が結菜の周囲で起こり始めているのは確かだ。だが、殺すとか生かすとか話すのは、まだ少し早いように思えた。

「……確かに悩む時間は無いかも知れない。だが、一度考えなおしてみてくれよ」

「無理だな」

「なら、責めてこっちの言い分を聞けよ」

「言葉では解決しないさ」

「……ああ、まあ、もっともだな」

納得した訳ではなかったが、彼を説得する方法は、すぐには思いつきそうになかった。

……悩みの種が増えちまった、と、剣は溜息をつく。

ふと壁の向こう側を見る。光村は、その壁をどうにか壊そうと、猛攻を続けていた。

——焦り過ぎなのはこの子も同じか。それとも、自分が楽天的過ぎるのか。必死な者達を目の当たりにして、剣は少し、反省していた。

結菜がゲームの中に行ったり、従弟が隕石を落とそうとしていたり。問題は目の前に積まれているのに。

結局自分は何もしていない気がする。……喧嘩で負けたことはないが、自分はえらく無力だ。

「……くそ、俺が混乱してきたな。とりあえず今やるべきは、警察とか呼ばれる前に退散することだ。」

ひとまずアンタが逃げれば、光村も目的が無くなって帰るだろ」

「……良いのか？ 僕を逃がして」

「殺しておかなきゃ不安で仕方のないアンタら二人とは違う」

「……そうか」

彼は短く返事を済ますと、状況が変化する前に、さっさとその場を後にした。

その後ろ姿を確認すると、剣は壁をさらに厚くした。自分が傍にいない時に瓜生が襲われたら、助けようがないからだ。

多分、光村の殺意は自分に飛び火するだろう。そう思うと憂鬱だったが、仕方がない。

「しばらく時間を稼いだら、俺も逃げなきゃな……」

「何故、逃がしたんですか！」

壁の向こうで、光村が叫ぶ。分からず屋の、固過ぎる怒り。

……それを聞いてしまったからには、ただ逃げるのも悔しくなっていました。無駄だと思いつつ、剣は感情に任せて光村を諭すことにした。

「あのなあ、お前は死を身近に置き過ぎなんだよ。許さないから殺す、なんてルールがあつて良い訳がないだろ」

「……でも、正義に犠牲は必要です」

「たった十七年で出した結論なんか、実行するのは早いっつーの。俺もお前も若いんだ。お互い、まだ悩む時期だろうが」

若い、という言葉に、光村の表情がさらに歪む。

「……若くちゃ駄目なんですか！ 知ってますか？ 歳を取るほど、正しさは見えなくなっていくんです。今見えるものが正しい。今の

感情が正しい。今の私が正しい。……私には、今しかないんです」

泣きそうな顔。……彼女がそこまで脆いとは、剣にも予想外だった。

勝手な言い分は、意地になつての出まかせだろうか。だが、彼女の行動を考えると、彼女が本気でそう思っているとは思議はなかった。

「……俺だつてお前と変わらないくらい若い。けどな、お前ほど勝手なことはやってねえつもりだ。……エゴなんだよ、お前のは。お前はただ、勝手なだけだろ」

追い打ちをかけるようなことを自分が感情に任せて発すると、いうのは、剣本人にも意外だった。

だが、自分だつて考えてきた。若いなりの自論を持っているのは光村だけじゃない。

それを曲げて、適当に返事をして帰る。それは嫌だった。

押しつけるだけの正義に、少しでも自分の力を分かせたかった。

——俺だつて間違つてないつもりなんだ。瓜生だつて透生だつて、悪じゃない。

誰だつて自分が正しいと思つてる。大衆の正義を代弁するヒーローにだって、間違いがある。そうだろ。

「……鬼の言うことなんか聞きません。鬼は……敵です」
「俺の言葉は逆効果だったか」

光村隼は、自分を星野剣とは見ていない。

彼女は、一人の鬼としか見られていないのだ。

光村雫は悪に容赦がない。

彼女に悪だと決められた者は全員、平等に彼女の標的となる。
一貫性があるのは、確かに間違いではないかも知れない。だが。

——それは考えるのを止めただけだ。数式みたいに法則的な正義を作っただけじゃあ、まだ駄目だろ。

言いたいことは一つ。悩め。

悩んで悩んで、頭が割れるほど悩んでから出直してこい。
若さになんか、囚われるな。忘れるような正義なら持つな。
それが嫌なら忘れんな。……俺みたいに、妥協すんなよ。

口に出しても逆効果だということは目に見えていたので、剣はその言葉を自分の胸にしまっておくことにした。

weak student 2

メールの返信は無い。

多分、見られてもない。

それでも送り続けた。毎日、内容を変えて。

——そろそろ起きたか？

正確なデータは知らないけど、二階建てが普通らしい。最近ではマンション暮らしの同級生も多い。

平屋に住んでいる同級生の話はあまり聞かない。そこに引きこもる人の話はもつと聞かない。

そう考えると、案外あたしは希少種らしい。

…… 自尊心の回復を狙つての連想だったのに、返って疎外感を深めてしまった。

学校をサボりたい訳ではない。ただ、人間関係をサボりたいのだ。今は、人に会う為のエネルギーが足りないから。

ガラス戸を閉め、出来あがる密室。自室。…… 木で出来たこの家は結構隙間だらけで、密室というほど閉鎖的でもないけど。

午後六時。夕方。

日は長くて、まだ外は暗くない。…… 学生の帰宅時間。考えないようにしていても、浮かんでくるのは学校のことだった。

アナログ放送が終了して、あたしの所有物となったブラウン管の

テレビから、一昔前のアニメ映画が流れている。

適当に暇潰しになるものを、と親に頼んだら借りてきてくれたDVD。

内容は、正義を語る主人公が悩みながらも頑張って悪を倒す話。

……あまり好きな話ではなかった。

正義が好戦的。

悪が、悪でしかない。

悪が滅んで、誰も悲しまない。今、エピローグみたいなのが流れている。

いなくなつて喜ばれる悪、か。あたしはどうなんだろう。喜ばれているのだろうか。

「……クソ……」

結局、正義なんて多数派だけじゃないか。

少数派は問答無用で悪呼ばわり。始末される。

ふざけてる。最低だ。

こんなのが社会にあるからいけないんだ。

屁理屈なのは自覚してる。けど、誰かのせいにしたい。だから言つ。

「……全部、お前らのせいだ」

情けないのは自覚しているけど、それだって元を辿れば社会のせいだ。もっと違う環境で、違った生き方をさせてくれていれば、こうはならなかったのに。

……別に何ということはない。ただ、クラスメイトの一人が入院して、そいつが学校に来なくなったただけのこと。
それだけだ。たったそれだけのことなのに。

それだけで、学校に行くことすら怖がってしまっ自分。
同級生も先生も信じる事が出来ずに、親を頼って、部屋に籠った。

他に行くところが無かった。外に出れば、いつ同級生と出くわすか分からない。

もし出来るなら、自分のことを誰も知らないような、そんな新天地へ行きたい。でも無理だ。
引越せなんて親にも言えないし、転校して一人暮らしをしていく自信も無い。金も無い。そもそも口だけで、そんな冒険をするつもりは微塵も無い。

まず安全なのはここしかない。だからここにいます。

言い訳を頭の中に幾つも並べて、たまに涙を流した。

笑えることがあっても、暗い顔をしないと理解されない。

笑ってはいけな自分と言聞かせ、自分の描く「不登校」を二週間以上、演じている。

こんなはずじゃなかった、と言いたくても、こんなことになってる自分がある事実。

正しいとか正しくないとか、得だとか損だとか、将来とか進路とか、そんなことはどうでもいい。

ただ生きる「今」が苦しくて、安住の地に逃げ込んだ。それが間違っていると言われたら、もういつそ自分で死ぬしかない。

それぞれに適合する場所というものがあるとしたら、多分、自分の場所はここ……自室だと思う。

力を抜いて、自分という存在を芝居の鎧で守らなくても良い空間。怖がらなくても平気な、ただ一つの場合。

楽しくもないのに毎日頑張っていたのは、この部屋へ帰る為。出来ることなら永遠にこの部屋に居たい。寂しくなんかない。こうしていれば、家族が守ってくれるから。

顔で人を選ぶような軽い男達の標的でも、クラスの残念美人でも、疎外された教室の落ちこぼれでも、芝居がかった大阪弁の「ウチ」でもない。

「あたし」。素のままの「桜木春風」。

この部屋にいる時だけ、あたしは自由でいられる。

アニメが終わった。ちょうどそのタイミングだった。

親は仕事でいないのに、玄関のチャイムが鳴った。

一瞬、迷う。何を迷ったのか自分でもよく分からない。

「……これは、無視やろ」

架空のもう一人の自分と相談して、無視することを決める。だが、相手が誰か分からないままなのも気味が悪いものなので。

カーテンの間からそっと目を出し、ガラス戸から外を覗く。外を見て、一瞬悲鳴を上げそうになった。

——そこには一人の同級生が。……瀬尾がいた。

学校のことを、一瞬にして思考を駆け巡る。

脈打ちが早くなる。いやいやいや、確かにウチはあいつのことが若干苦手やけども。せやけども！

「くそが、落ち付け。緊張してどうすんねん」

自分に言い聞かす。二重人格ごっこをしたところで、ただちょっと恥ずかしくなるだけやった。

どうしよう。何を悩んでるのかさえ分からない。いつの間にか関西弁の殻を被っている。心の中の呟きでさえ関西弁になりかけている。

やっぱり部屋の外は駄目だ。あたしがウチになる。

確かに二週間も不登校をしてたら、誰かがプリント届に来たり、様子を見に来るということも有り得ない話ではないし、友達の少ないあたしにとつて、瀬尾はこの家を知る数少ないクラスメイトだったりする訳だが。

それでも、何で瀬尾。

不登校の原因を作った悪者に仕立て上げられないうちに、謝って済まそうという魂胆……とかか？ 勝手な被害妄想かも知れんけども。

玄関、出てみようか……。いや、出るしかないか。出ないと「休んでる間、あいつは遊んでる」みたいな誤解を生んでしまいそうだし。

大丈夫。ちょっと相手すれば終了やないか。そう自分に言い聞かす。

今逃げるのが、……瀬尾にびくびくすることが、酷く情けなく思えた。

足がちよつと震えた。でも、結菜がいなくなってすぐの教室よりは楽だ。楽なはず。そう思いこめばいい。

喋れないほど喉に力が入って、心臓の音で思考がサビたみたいに

なる。でも、もう前しか見ない。数秒、数分なら我慢出来る。

泳げないのに泳ごうとする感じで。さっとサンダルを履いて、勢いそのまま玄関を開ける。

ガラガラ、どん。

背を向けかけていた瀬尾が、少しだけ驚いたように振り向く。

「あ……。いないのかと思っちゃった」

「……よう」

決まり悪そうに目を逸らす瀬尾と、そんな瀬尾を見れないウチ。

……お互いに相手を見ない、妙な状況だった。

一瞬、沈黙。

先に口を開いたのは、当然ながら瀬尾だった。

「……あの、プリントを持ってきたのよ。休んでる期間が長いから、机の中に色々溜まってて」

「あ、ああ……うん」

山積みとまではいかないけど、それなりの量になるであろうプリント類を受け取る。受け取って、……黙ってしまう。それで、すぐ後悔した。

関西弁の中で、おおきには使ったことがない。

だからってありがとうを使うということではない。感謝の言葉を伝えるという何でもないことが、あたしは物凄く苦手なのだ。

理解出来ない人からすれば、あたしはどうしようもないぐずとか、酷ければ障害を持った子に思えるかも知れない。けど、ありがとうと言おうとしたその一瞬で、恐怖心がこみ上げてきて、舌が上手く回らなくなっ

他の挨拶も同じだ。無理に声に出そうとすると、芝居がかって不自然になってしまう。

自然に挨拶が出来る人には、あたしの姿は滑稽に見えと思う。

……そういう些細なことが、あたしの劣等感を助長している。

こんなに考える必要はないって、分かっ

と、その思考に割り込む瀬尾の声。

「宿題は嫌ならやらなくても良いって、先生が言ってたから。まずは出席が大事だから、頑張って学校に来ることに集中するようにって」

「……そうか」

今更といえは今更だが、完全に不登校扱いやな。

嘘でも体調不良と同じ扱いが良かった。

不登校というレッテルを貼られると余計に行き辛いのに、何で分かんかな……。

学校のこと、先生のこと、瀬尾のこと、くだらないクラスメイトのこと。

恋愛をステータスとしてしか考えていない軽い男女混合グループ。そこに入れない奴らと、入らないグループ。あと……結菜のこと。何となく思い返して、泣きたくなった。あたしは桜木春風以外の何者かになりたかった。もっと自信を持って、もっと色んな奴と話して、結菜にももっと素直に接したかった。

目の前にいる瀬尾が、羨ましかった。

あたしが桜木春風以外の何かだったら、瀬尾とももう少し良好な関係が築けていたんじゃないかと思う。

「……それじゃ、ね。その、色々アレだけど、たまには教室来てよね。クラスメイトが二人もいなくて、みんな寂しがってる訳だし……」

出まかせ。あからさまな嘘。ふざけてる。

あの連中が、ウチや結菜がいなくなっただくらいで寂しがる訳がない。あたしがいない方が、教室は返って和やかなんじゃないかと聞き返したくなるくらいだった。

けど、そんな思いストレートにぶつけられない自分がある。嘘を嘘だと分かっている、それを指摘出来ない自分。

はがゆい。情けない。けど怖いから黙って見てる。

結局、自分も瀬尾や大衆と悪い意味で同じだ。けど。

これ以上、クラスメイトを自分から遠ざける真似はしなくなかった。というか、するのが怖かった。

……居場所が消えてなくなるのが、怖い。

多分明日も教室には行かないけど。それでもだ。

部屋に戻って、格好付けた「ウチ」の仮面が外れた瞬間。「あたし」は涙を流し始めた。

分からなかった。自分のことも、瀬尾のことも、学校のことも。けど、瀬尾に來られて、嘘だとしても普通に話しかけられて。少し喜んでいて自分がいた。

結局あたしは何がしたいんだ。分からない。

いじめられた経験は無いとは断言出来ないけど、ある、とはつきり言える程の大きないじめという訳でもない。家族だって普通だ。世間に同情してもらえるようなはつきりとした理由や過去は無い。

学校に行かない正当な理由が欲しかった。じゃないと、あたしはただの弱虫で終わってしまう。

気付きかけてるけど、認めたら負けだ。だから、最後まで意地を張ろうと思う。

——あたしは絶対、弱虫なだけじゃない。

……寝ることにした。

何も考えたくなかった。

起きるまで、この世から逃げる事が出来るから。

——死にたい。そんなこと言っても誰も相手にしてはくれない。

甘えるな、死ななくせに。……そりゃ、死なない。むしろ、死なない為に愚痴をこぼしているのに。

……慰めて欲しいのに突き放されて、居場所は更に奪われて。

自室以外に、どこに居ろというのか。

——確かに、寝たはずやねん。

自室の布団で。一番安心出来る、独りの場所で。

それが……なんやこれ。

何で、ウチは森ん中におんねや。

無意識に自分が「ウチ」に切り替わる。

あの部屋におらんと、例え一人でも「殻」を被らんと怖くて仕方がない。「あたし」は「ウチ」に籠って、出てくることはない。二重人格とは違う。単なる中二病と変わらんゆーことは時々自覚するけども。

「……いや、夢やろ、これ……」

そうや。それしかない。夢の中でも仮面を被んなきゃいけなくなっただか。

おいおいおい。

何やこれ。何でつねったら痛いんや。

まさか……現実ではないやろな。

——帰らしてくれよ。頼むから。

頭の中では既に把握しとった。これが夢ではないこと。知らん場所に一人でおって、それは極めて危険な状況であること。とにかく、うろたえるしかなかった。

「……どないしよ。夢とちゃうで、これ」
せやな、その通りや。

「……歩くしか、ないん、かな」

あれ、喉が上手いこと動いてくれんで。

——こんなとこまで来て。

泣いてる自分が情けないわ、ホント。

でも、怖いんや。すごく怖い。……うん。

怖い。……あたしはファンタジーなんか望んでないのに！

「……何やねん、こっ……」

「もしもし、姉さん？」

「ああ……。何か、今日はよく連絡してくるな。何かあった？」

「予想外なことが……。いや、あいつが入れるんだから有り得ないことは無いと思っただけだよ……」

「……は？ はっきり言ってみな」

「須上結菜以外の誰かが、ゲームの中に入ってきた」

凡人

” 須上結菜防衛兼サイキック団対策室本部 ” という、名前もダサいが中身も不毛なアホ会議の後、俺はしばらくうつろついで帰った。目の前の問題を一度忘れて関係無いことに頭を使っているうちに、何か現状を引っくり返せる凄いアイデアが出てきたらいいなーという馬鹿な感じのあれだ。どれだ。

現実逃避だよな、と反省してないこともないが。

「つと、ただいまー。……」

夕方、家に帰って自室に戻った俺は、その自室（であるはずの場所）が見たこともないようなパソコンのパーツとか粗大ゴミみたいな何かでぐっちゃぐちゃに散らかっている、という状況に唖然とした。

「いくら地味だからって、そりゃないだろ……」

近所にゴミの山みたいなのがあったような、無かったような。多分、そこから持ってきたんだろう。

部屋の真ん中では、アルスが唸りながら、ノートパソコンだったらしき何かをいじくり回している。

とりあえずあれだ。

「人の部屋で何してくれてんのお前えええええ！」

悪戯がばれた時の子供みたいに、アルスは一瞬ピクつと体を震わせ、若干逃げたようにゆっくりとこちらを向いた。

「……あー、瑞樹さん。いや、その。ユイナの部屋よりもこっちの方が広がったんで、作業がやり易いかな、と」

ひきついている。

「……おいおい、ハンドゴテなんか家にあつたんかい。で、何やってんだ？」

「分解です。そのゴミは、その、使えそうだったので俺の部屋は犠牲になったのか。」

「……あと、申し訳ないんですけど大事なとこなんで、その、ちょっと外に居てもらっても……」

「あー、出ていく出ていく。邪魔して悪かった」

自分の部屋から追い出されて、何で謝ってんだ俺は。

……何というか、蚊帳の外だよなあ。一般人代表。いや、勝手に代表を名乗る訳にもいかないが。

妹の危機を前に何も出来ないというのも辛いもんだ。ついでに自室に入れないのも。

「……もう大丈夫ですよ」

中からアルスの声。三十分くらい待たされたか。

部屋に入ると、やっぱり粗大ゴミの山が目の前に。……俺は今晚、寝る場所が無いかも知れない。

で、アルスは原形を取り戻したパソコンで、動画を見ていた。

「遊んでんのかよ……」

「あ、その、ネットにちゃんと繋がっているかどうかの確認です。ちゃんと動画が再生されるかどうかをですね、その」

言い訳している間も、アルスの目は画面の方へと釘付けだった。確かに異世界の文化は珍しいし、面白いものなんだろう。夢中になってしまふ気持ちも分からんでもないけども、俺はアルスからマウスを取り上げる。

「で、どうするんだ？ 出来たって、そもそも何が」

「……あー、はい。まずは説明からさせてください。まず、パソコンをネットから切断します」

「は？ せっかくネットに繋がるかどうか確認してたのか？ 何の為にYouTube見てたんだよお前は」

俺の言葉をスルーして、アルスがパソコンの設定を慣れた手つきで動かす。

パソコンはネットから切断され、一部のアプリケーションは使えなくなる。

こうすると、少なくとも結菜のいない現在の須上家では、パソコンは電卓同様の大きいだけの機械と化すのだが。

「見て下さい。確かにインターネットは使用出来ません。ですが…

…」

アルスが「神ゲー」をクリックする、と。

ウィンドウが出て、通信中、とか普通に出てきた。

……おいおい、ネットゲームだろ？ ネットに繋がっていないのに、一体何と通信中なんだよ。

「不思議でしょう、これ」

「ああ。……どうなってんだ？」

「後で説明します。ひとまず、ユイナのアカウントでログインしてみましよう」

ログインの画面。いや、だからネットに繋がっていないのに何にログインするんだよ。

「つか、パスワードは？」

「知ってます」

パスワードの意味がねえな。

と、ログインが完了し、画面にはファンタジーの世界と、その真

ん中に突っ立っている結菜の分身が映し出される。あくまで分身。本人ではない……のは当然か。

「ユイナ本人がゲームの中にいるにも関わらず、このアカウントに問題無くログイン出来る。ということは、この分身とユイナ本人は別人扱いということです。」

つまり、この分身を操作してゲーム内でユイナと会うことさえ出来れば、守ったり会話をすることも出来ます」

情報交換とか、警告が出来る訳か。
それはそれでいいのだが、

「そもそも、ネットに繋がっていないこのパソコンで、どうして普通にネットゲームが出来てんだ」

俺だって年寄りという訳ではないから、この手のゲームの仕組みに関してもチンプンカンプンのパッパラパーではない。

オフラインで遊んでいるだけ、というなら、結菜が見つかるはずもない。

「このゲームがネットゲームではない、ということです」

「は？」

チンプンカンプンのパッパラパーだ。

「普通、ネットの世界に人間の心が入り込む、なんてことはまず有り得ません。ユイナがこのゲームの中に入ってしまったということは、このゲームがインターネット以外の通信手段を利用している、ということです。糸電話の糸と携帯電話の電波って、全く違いますよね。そんな感じです。主催者の透生は、そのことには気付いていなかったようですが」

「糸電話なんかよく知ってたな」

理解出来たような、理解出来なかったような……。
要は仕組みの違い、ということか。

「……その繋ぎ方って、元からこの世界の産物なのか？」

ネット以外のものを利用してネットと同じようなことを行う。そんな仕組みがあるなら、名前くらいは聞いたことがあると思う。聞いたことがない、ということは、かなりマニアックなものか、この世のものではないかのどちらかだろう。

全て終わった後、夢と現実の区別がつかないなんてのは見苦しいからな。異世界とこの世の区別はきちつとさせておきたいところだ。

「僕の世界では、直訳すると心波という名称で呼ばれていたものです。テレパシーなどに使用される通信手段で、僕が最初に発見した……」

「待て待て待て」

慌てて止めに入る。僕が最初に発見したって、そりゃ歴史に残ることじゃないのか。

「発見」が難しいのは万国共通だ。それは地球の外だろうと宇宙の外だろうと異世界だろうと変わらないはずだ。

少なくとも、十七歳のガキに科学的な新発見が出来るほど、世の中は甘……い、のか？

「……ユイナにはまだ言ってますが、元の世界での僕は、一応は世間に名の知れた天才少年だったんです」

「マジかよ」

確かに、ただの十代後半の子供が世界一つ救う為に現れるなんてのも妙だしな。

特殊な頭脳で破滅の原因を探り……というのなら、アルスがここ

にいる理由も理解出来る気がする。

「瑞樹さん、そんなことより」

「そんなことつて言うなよ……」

「心波の説明をしましょう。先程も言いましたが、心波は人体同士での通信に使用されていたものです。」

名前に波とありますが電磁波のようなものではなく、魔法に使うマナに似たもので、女性の方が男性よりも受信し易いという特徴があります。一部の女の勘の原因ですね」

「……んー、魔法もマナも分からんけども」

とりあえず、電磁波とか電波とか、そういう類とは関係無いということは分かった。それしか分からん。

得意分野だからか、アルスは普段より饒舌だった。後半になると関係の無い話が増えてきたので、聞き流しながら要点だけをまとめることにする。

要は、ゲームが送るテレパシーに結菜が反応し、通信が成立してしまったという訳だ。

結菜らしい、といえばそうかも知れん。

「……に、してもなあ……」

テレパシーとか、魔法とかマナとか。

少し前だったら「有り得ない」と笑い飛ばしていた話が、平気でぼんぼん出てきやがる。

未知が知に変わる。結菜なら喜ぶんだろうが、俺はそこに恐怖を感じる。

宇宙とか海とかスケールのでかいことを聞いて、自分の存在の小ささにぞっとすることなんかザラだ。

だから今、少なくとも楽しい気分ではなかった。
自分が平凡という枠から抜け出せないというか、蚊帳の外のまま、
世界が勝手に話を作っていくというか。

——関係無い。

鬼だの、大江山だの。遠い世界なんて、今までだつていくらでも
あつたんだ。気にしなければいい。……分かってんだけどな。

俺らが今やるべきことはゲーム。ただそれだけだ。

……の前に、片付けか……。

「そもそも、何でお前はパソコンを分解してたんだ？」

神ゲーなら今までも普通に動いていたんだ。分解の意図は他にあ
ったのだろうか、一体何のために。

「あ、それなんですけどね。……実は、このパソコンに新機能を付
けてみました」

「天才少年の本領発揮ってか」

……あー、俺の役立たず度がまた上がった。

「……新機能？」

「はい」

「何だよこれ……」

頭にコードだらけのカチューシャみたいなのを着けられ、布団に
寝転がらされる。

……嫌な予感しかなかった。

まさか、いや、まさか。うん。何だろ。カチューシャと例えたが、やっぱ違うわ。そんな可愛いもんじゃない。

機械というか、メカメカしい。材料が足りなかったのか、一部がダンボールなところとか腹立つ。

「おい、今から一体何が……」

「はい？」

ひきつりつつ、とぼけるようにアルスが言う。

どんと構えていてくれないと余計に怖いだが。……と言いかけて、飲み込む。役立たずな上に女々しいってどうよ。誰に見栄を張ってんだか知らんが。

「……いや、何でもない。で、俺はどうすればいい？」

俺の言葉に、アルスは一瞬だけ目を逸らす。そして軽く咳払いをした。

「……えーと、ゲームが心波で動いていることを利用します。パソコンで受け取った心波を簡略化して、瑞樹さんの頭に送り込む。頭のそれは送信機です。受信するだけではゲームの中で身動きがとれませんから」

「それって、まさか結菜の元に行けっということか？」

アルスは頷き、パソコンを触り始めた。

「正直、危険ですが……。その通りです」

だよ、なあ。やっぱり。今更ビビりはしないが。

……けど、まあ、溜息くらいは許されるよな？

あ
！。

救済者になろう

『ハンゾー：やーやー久しぶり。元気でしたー？』

『セオ：まあまあですね……。あ、須上さんが入院したこと、知ってます？』

『ハンゾー：あ、聞いた聞いた。お見舞いとか行かないの？』

『セオ：服部先輩が思ってるほど、あいつとは仲良くないですよ』

『ハンゾー：んー？ 腐れ縁なのに珍しいよね』

『セオ：そうですね？』

『ハンゾー：……話題変えましょうか。神ゲーって知ってますか？』

『セオ：ドラクエのことですか？』

『ハンゾー：いやいや、都市伝説ですよ。神になれるゲームっていう』

『セオ：怪しくないですか』

『ハンゾー：どうですかねえ』

『ハンゾー：以前の私なら、飛びついてますけどね』

「なんつーか、ドット絵なんだが……」

空も、地面も、木も、建物も、自分の体も。

例外無く、カクカクだぜ。ドット絵は言い過ぎだが、クリアとかリアルだとはお世辞にも言えない画質の悪さ。何だこれ。パソコ

ンで画面見てた方がマシだった。

装備品らしき腕輪には小さく y u i n a と書かれていた。そういや、俺があいつの分身を借りたような状態だったか。ひよっとして顔も女のキャラになってるのだろうか。……変な気分にならないうちに、それ以上考えるのを止めた方が良いな。

「何というか、これならゲーム内とかそんな奇抜なことせずにパソコンで操作した方が良いんじゃないかっていうくらい、視界というか画質というか世界が汚いんだが」

「心波のコントロールにもコツとかセンスが必要なんです。ユイナは上手に通信出来ているみたいですけど、その、瑞樹さんの場合はあまり……」

天の声。というかアルスの声が聞こえる。声だけで、姿はどこにも見当たらない。

「あまり……何だよ。ダメって言いたいのかコノヤロー。つか、どっから喋ってる？」

「マイクでパソコンに声を入力して、それをゲームの世界ごと瑞樹さんの脳に送っているんです。他のプレイヤーにはこの声は聞こえません」

「聞こえないというか、そもそも他にプレイヤーいねえけど……」

「ここは町のと真ん中。……なのだが、辺りを見渡しても人の気配は全く無い。……多分。」

十メートル先はぼやけて見えないので、断言は出来ないが。俺の頭のスペックってそんなに低いのかよ。

「大体、何で見え方がパソコンの画面と違うんだよ。FPSじゃねーかこれ」

さつきまでパソコンで見ていた時は初代ドラクエのような俯瞰図だったのに、これじゃあまるで別のゲームだ。これが、ゲームの中に入る、ということなのだろうか。

「世界の映し方の違いですね。このゲームはゲームであってゲームではないんです。つまり……」

全然ピンと来ないし、理解するつもりも無いので説明は聞き流した。要約すると、普通のゲームとはそもそも根本的に何かが違うらしい、みたいなことを言っていたような気がする。

「現実と同じなんですから、むしろ好都合なんじゃないですか？」
「そうでもないぜ。視界はこんなだし、現実より体の動きが鈍いし」

脳と体があまり良い繋がりをしていないような感覚というか。動かそうとして実際に体が動くまでに、わずかだがラグがある。

町中だからまだ良いが、危機的状况においては命取りになりかねない。

「……何と言うか、何かもう何か三大欲望に帰宅欲を追加して四大欲望にすべきな訳がないだろ馬鹿野郎おお！」

「はああ！？ 情緒不安定ですか！？ しっかりして下さいよ！」
アルスの慌てる顔が、声だけで想像出来た。しっかりしたいけど、こんな場所で冷静でいられる訳が無いだろうかと開き直すことにした。

「八つ当たりしたい気持ちも分からなくもないですが、ユイナが危機的状况な今、あまり無駄に出来る時間はありません」
「そりゃそうんだけどな……」

情けないとは分かっているが、生憎こんな場所で平常心でいられ

るほど常識知らずじゃない。

恐怖を越える喜びや楽しみを感じられる奴なら違うんだろうが、剣や友達、見知った連中と静かに過ごしたい俺にとって、この場所に居るということは、単に苦痛でしかない。

「瑞樹さんの場合は普通にログアウト可能なんですから、しっかりして下さい」

「ああ。分かって……え？」

待て待て待て。

ログアウト可能って……。それはつまり、出られるってことだよな。

何か間抜けなことでも言ってしまったのかも知れない。アルスは少しだけ声に笑いを含みながら、言った。

「何か勘違いしているようですが、瑞樹さんはユイナのように直接ゲームに巻き込まれた訳ではなく、パソコンというクッションをおいていますから、瑞樹さんとパソコンとのやり取りさえ止めれば普通に出来ます。ゲームオーバーになっても多分死にません」

「マジかよ……」

多分ではあるが、死なない……か。

ユイナがこの前まで遊んでいた分身ということもあって、レベルもそこそこ高い。

「……ガンガン行くか」

「急に元気になりましたね。死なないこと、早めに言っておけばよかったですね」

「全くだ」

歩き出し、町を出て、

町の門付近で、何か結菜と同年くらいの子と目が合った。
うずくまり、ちよつと涙目で俺を警戒するかのように睨みつけて
いる。

パツと見ですぐに分かった。他の無機質な町人とは違う。プレイ
ヤーだ、こいつ。

女の子は震える声で言った。

「……どこやねん、こゝ……！」

『セオ：そっいや、服部さんは最近どうですか？』

『ハンゾー：私ですか？ バリバリ引きこもってますが』

『セオ：ごめんなさい』

『ハンゾー：……いや、謝られると逆にくるものが』

『セオ：罵倒する訳にもいけないので』

『ハンゾー：ちなみに今、とあるやつさしー後輩が片付けに来てく
れてましてねー。無料で』

『セオ：介護……的な。ホームヘルパー的な感じですねそれ。ホン
ト早死にしそうですよね服部先輩』

『ハンゾー：そっいや関係無いけど、ハルカちゃんはどうなったん
ですか？ 私の仲間入りルートですか？』

『セオ：分からないです。何度も言いますが、ユイナもハルカも
あんまり仲良くないんです』

『ハンゾー：そうですねー。まあ、何とも言えないですけどね』

『ハンゾー：あ、でも一つだけ』

『ハンゾー：もし、ずっといなくても、忘れないであげて欲しいな
』

それなりに大きなマンションの一室。
大きなテレビ、立派なパソコン、高そうなソファー。それらを台
無しにするかのように玄関には無数のゴミが散らかっている。

「隠そうとしろよ……。何で玄関？」

呆れ声で剣が言くと、部屋の主は視線をパソコンに向けたまま、
声だけでヘラヘラと答えた。

「一番使わないスペースですからねえ」

他人事のような言い方だった。

「魚の骨まで……」

「凄くないですか？ 私が魚を調理して食べるなんて」

「普通だから。アンタが墮落し過ぎただけだっつーの……っと、メ
ールが」

剣はゴミを片付ける手を休め、携帯を開き、

「瑞樹がゲームの中！？ どうなってんだあの兄妹！」

従弟から届いたメールを見て、心底驚いたように叫んだ。

「瑞樹くんらしいねえ。楽しそうなことになってるじゃないですか
」

「楽しいって……。何か、死と隣り合わせらしいっすよ?」

「そんなの現実だってそうですよー? 日本じゃ実感無いですけどねえー」

腰まで伸びた真っ白い髪と、黒い甚平。細い体と白い肌。パツと見は雪女。名を、服部清子という。

大学二年生とかスカイプの妖精とかいう様々な肩書きがあるが、その正体は引きこもりである。

……それも、引きこもりの中でもダメなタイプの。

コミュニケーション能力はむしろ高い方で、外にいれば居場所くらいいくらでも作れるくせに引きこもり、面倒臭がりで、更生する意欲も無く、生きる気力も無く、見兼ねた知り合いに頼んでもいいのに助けられている。

そして悩もうとしない。開き直っている。そして「仕送り以外では親に頼ってない」と誇らしく言ってしまう。本人も時々クズを自称している。

本当にクズなら助けようとはしない……と、少し前までの剣なら言えた。が、時間が経つにつれ、自分が何故このどうしようもない人の世話を焼いているのか、分からなくなること多くなってきた。

「はい、手を休めないで。ボーっとしてたら終わりませんよー?」

引きこもりなのに自信満々な態度が、剣を戸惑わせる。

「……手伝えよ」

動くはずはないと諦めながらも、無駄な頼みを呟く。

それを聞いた清子のフッフと笑う表情は、日常的に剣が見る顔だった。……が。

この時は、剣は妙にその顔に苛立ちを覚えた。

「勝手に押しかけてきて、頼んでもないのに片付けを始める人が言えることですか？」

本気で迷惑がっている訳ではないが、少し嫌味な言い方。

「……悪いな」

剣は少しでも表情を曇らせ、トップの箱を乱暴にゴミ袋に突っ込んだ。

大したことは言われていない。言い方はわざとだ。その発言に深い意味はないということを、剣は知っているはずだ。

苛立つてどうする。実際、押しかけて勝手に世話を焼いているのは自分の方だ。頼まれてもない片付けを勝手にやって。……清子は間違ったことは言っていないんだ。

放っておけば良い。流せば良いのだ。ひょっとしたらそうかも知れない。だが、その後、この女は自立出来るだろうか。

……多分、生きる為に買い物に出掛けるくらいなら餓死するだろう。長年の付き合いから、剣にはその光景が容易に想像出来た。

多分、追い込まれていた。

ゲームや隕石。少し前までは遠い話だったが、結菜があんなことになって……。

だから、こんなことを言ってしまった。

「……俺じゃ、先輩を助けられませんか？」

剣が言う。彼女にしては珍しい、しよげた声。

助ける、は少し大袈裟過ぎる。後々思い返せば恥ずかしくなるであろっ誇大妄想に他ならないのだが。

——自分の力なんかじゃ、誰も救えない。
地球どころか、知り合いの引きこもり一人、動かすことが出来ない。

それを痛感させられるようで、我慢ならなかったのだ。

「はい？」

客観的に見る清子には、剣のそんな感情を知ることはい出来ない。
表情を見れば、彼女の不安定な精神状態を想像することくらいは出来たかも知れない。だが、清子は相変わらずパソコンの画面に夢中だった。

「結菜も、瑞樹も、光村や透生や先輩も……。俺じゃあ、助けられないんですね」

震えを隠すような静かな声で、剣は言った。どうかしている自覚はあった。だが。

止まらなかった。溜めこんでいたものが一気に溢れ出したような、そんな状態だ、と。

心のどこかでそう分析する。まだ理性は保っていると思ったかっただけかも知れない。

「珍しいなあ。剣ちゃんが感情をコントロール出来なくなるなんて結菜や瑞樹くんの存在がそれだけ大きいってことなんでしょうけど……。キレるタイミングが急でしたね」

ようやく目線を剣に向け、茶化すように言う清子。

その一言がトリガーとなった。

「……何もしてないアンタに何が分かんだよ！」

へらへらと笑っていた服部にそう吐き捨てると、剣は玄関を飛び出した。

感情が理性を越えてしまった。あとで後悔することは、この時点で予測出来た。この時既に後悔していたかも知れない。

それでも、勢いに任す他無かった。……任せてしまった、の方が正しい。他に道が無いなんて言い訳だ。

マンションから出る際に剣とすれ違ったおっさんが、何かと言わんばかりに剣を二度見した。彼女がよほど怖い顔をしていたからだろう。それでも……今は、表情を変えることが出来なかった。

おかしい。どうかしている。今日の自分はらしくない。
行き場のない怒りと、悔しさと自己嫌悪。

——そんな感情さえ、数分も経てば少しずつ解けていく。

残ったのは、子供じみていて滑稽な、数分前の自らの姿。

勝手にキレて、勝手に落ちこんで。……思いっきり甘えてしまったと反省した。

「……くそが……」

自分に。清子に。透生や光村に。……全部に向かって吐き捨てる。
歩きながら、頭の中で無意味な葛藤を繰り返して、子供みただ

と惨めな気分になりながらも、仕方が無い、と自分を妥協させる。ただでさえ低い自尊心を、これ以上自分で削つてもどうしようもない。

帰る気にもならず歩き回り、辿り着いたのは小さな公園だった。ベンチに座り込み、さっきまでいたマンションに目をやる。

清子のあのへらへらした笑いが浮かんできて、少しおかしかった。

——ふと気を抜くと、結菜や瑞樹の顔がよぎる。

「……頼むから、誰も死ぬな」

——祈るしか出来ない自分が許せない。力で解決……出来れば良かったのに。

と、そんな時。

剣は人の足音を耳にした。近付いてくるその音の主が誰か、察しはついていたが。

「お悩みですか？ 珍しいですね、鬼なのに」

「……光村か。何か用？」

「いつも通りですよ。夕方、あの男を逃がす貴女を見て再認識しました。……貴女は、私の敵なんだって」

相変わらず人形のような目をした彼女の考えが、剣には分からない。

鬼を殺してどうなる。世の中にはもっと悪い奴だっていくらでも

いる。それなのに何故、執拗に自分達を狙うのか。……答えを知りたいとは思わなかったが、問いただしてやりたいとは思った。

全て聞いて、全否定して、説いて、納得させてやりたい。……剣の中の凶暴で勝手な正義が、収まった負の感情を再燃させる。本当に自分らしくないと、剣自身、少しだけ戸惑いながら。

「てめーも鬼だろうが。鬼の力を根絶やしにしたいなら、まずは自分の首を切り落としやがれ」

「いつになく感情的じゃないですか。……遺言なら、いくらでも聞いてあげますよ」

光村は一本の金属バットを握っていた。銀色に光るそれは、見様によつては鬼の武器である金棒だ。

「……つくづく存在そのものが皮肉だな、お前。まあいいよ。今晚くらいは本気で相手してやるから、覚悟しな」

桃太郎の行いに疑問を。

バットを片手に、光村雫は猪のように駆ける。

星野剣の目の前まで接近し、そして、

金棒が風を斬る。ブン、という、鋭く無骨な音が鳴り、

……それだけだった。

剣の脳天目掛けて振り下ろしたバットは、彼女のたった一本の指に止められてしまった。

「大技を避けさせて、ヒトダマか何かで繋いで連続攻撃。自分のペー
ースを作り、俺に何もさせずに押し切る。……そんなとこだろ。無
駄だけだな」

人差し指でバットと対等以上の押し合いをしながら、剣が言う。

その余裕の表情に、雫の感情は逆撫でされる。

「……全然違います。見えない壁を力ずくで破るつもりだったんで
すけど」

「ああ、あれな、本当は壁にするより、こうして体の表面にメッキ
みたいにしく方が便利なんだ。強度は落ちるが、これで十分」

「……ということは、本当に指一本だけで止めたという訳ではない
んですね。ホッしましたよ」

ホッとした。嘘だ。

口で笑いながらも、雫は内心焦り始めていた。

動かない壁さえ壊せなかったのに、標的と共に動き回るメッキを
どうやって壊せというのだ。

——無理。不可能。

頭に湧いた後ろ向きな言葉を、すぐに前向きな思考で消していく。分かっていたことじゃないか、死ぬ気で戦わないと星野剣には勝てないなんてことくらい。

雫は一度飛び退いて間合いを取ると、空いている左掌に、ボウとヒトダマを発生させた。

「そのメッキ、どうすれば破れますか」
「猛攻かな。思いつきり来いよ」

剣は笑っている。わずかに酒でも入ったような笑み。挑発だ。金属バットという凶器を利用した猛攻さえ防ぎ切る自信があるのだから。

挑発に乗るのは、あまり賢いことではない。踊らされるだけだ。だが、踊らないとこの状況を打破出来ない。踊るしかない。……なら、いつそ乱舞してやる。

バットを槍のように構えると、雫はヒトダマと共に突進する。

その余裕と自信を碎いてやる。

彼女そのものが、燃え盛る矢になって、

「覚悟！」

その懷に、バットを突き立て、

「まっすぐかよ。流石に芸が無いな」

剣はそのバットを掴むと、その場で勢いを流すように数回回転。後方の金網に向かって、雫ごと放り投げた。

カシャアアン、と、その衝撃が金網に吸収される。当然、ダメー
ジはほぼ無い。

……剣の情けだろう。だからこそ、腹が立つ。

「……馬鹿にしないで下さい！」

立ち上がると、雫は一気に剣との距離を詰め、少女の力では不可
能であろう速度でバットを振り回す。

マンガの中の剣士がやるような、次元の違う猛攻。当然、剣にも
避けられない。

というより、避ける気がないようにしか思えない。

一発一発が致命傷になりかねないその連続攻撃を、仰け反りもせ
ずに受け続けているのだ。

「ああああああ！」

常人なら死んでいる。

常人でなくとも。剣でも、例のメッキさえ無ければ死んでいるは
ずだ。

相手にしているのは人間ではない。鬼の力という、科学を越えた
技術そのもの。

「せめて……避けて下さいよ！ 無抵抗な貴女にさえ勝てないんで
すか私は！」

「俺が知るかよ。あ、呼吸の為に口元を開けてるから、頭の方は少
し脆いぜ」

バットが炎を纏う。決めの一撃。挑発に乗る形で、雫は最後にフ
ルスイングで剣の頭を叩いた。

だが相変わらず、剣はその場で涼しい顔をしている。

「残念だったな」

「……そんな」

固いことは分かっていた。事実、雫は一度もこの壁を破ったことはない。

だがそれは、素手で戦っていたからだ。正々堂々とは言い難いが、凶器というハンデがあれば、あるいは……。そう考えていた。

考えは、たった今ぶち壊された。

「壁の使い方は、死んだ先人を含めたって多分俺がトップだ。俺を覆うメッキには、まだヒビも入ってない。それでも……。まだやんのか」

雫は無言のまま、剣を憎しみのこもった目で睨む。それ以上の形相で、剣は雫を見る。

大人が愛する子供を本気で叱る時の目。相手に真摯に対応する親だからこそ向けてしまう、本気。

相手が自分に敵意を持っていないことを、雫は知っている。だが、だからこそ腹立たしいのだ。

その余裕が、力の差を物語っている。

本気を出すと言った剣は、自分からは一切動いていない。

それなのに歯が立たない。信念も努力も憎しみも、結局何も変えてくれない。

……バットを振った。

不意打ちなら、一発くらいは入れられるかも知れない。

勝算は無い。——でも、やっぱり一矢報いたいじゃないか。

振ったバットは剣に止められ、

その握力によって碎け散った。

「……嘘だ」

驚愕した様子で呟くと、雫はその場に膝をつく。

散らばった金属片と発砲ウレタンが、敗北の二文字を表していた。

「認める。負けたんだよお前は。今日の俺の機嫌は悪くてな。自分でもコントロール出来ないんだ。……だから、手が出る前にさっさと逃げる」

バットと共に、闘志も碎かれたような、そんな気分だった。

座り込んだ雫は、魂の抜けたような顔で、剣の顔を見上げた。

「……ならいつそ殺して下さい。もう疲れました」

「それが、お前を育てた人の望みだと思うか？」

「……何が分かるんですか」

「知ってるよ」

「……」

「お前の母親を殺した光村……お前の育ての親は、罪悪感からお前を養子に引き取った。お前から親子は平和に時が経っていったが、ある日、光村は俺の伯母と戦って行方不明となってしまう。血の繋がらない一人の娘を残して。……知ってるよ。お前が辛い過去を歩んできたことくらい。でもな、それはお前だけじゃなくて」

「言葉にしまうとやけにあっさりしますね」

剣の言葉を無理やり中断させると、雫は感情も覇気も無い声で言葉を紡ぎ始めた。

「違うんですよ。私が言いたいのはそうじゃない。辛いバックスト
ーリーの八つ当たりがしたい訳じゃない。私は……」

その先をはつきりと言語化出来るなら、もっと器用なやり方で自分の目的を果たそうとしているだろう。

鬼の敵に育てられた自分自身が鬼。当然、周囲からは悪意の目が向けられる。守ってくれる親が消えて、向けられた悪意の強さに気付いて。

その悪意は自分に向けられたものではなくて、鬼に対するものなんだ。そう思い込んで。

鬼に憎しみを持った。
持たざるを得なかった。

雫は立ち上がろうとしなかった。憎しみの籠ったというより、何事も上手くいかない子供のような泣き顔で、じっと剣を見つめている。

「……殺して下さいよ」

「何で」

「私がそうしてきたからです。貴女の親戚に勝った時、私は寿命を奪い取った。なら、負けた時は私が死ぬのが筋です。……それに、私自身も鬼ですから」

「結菜を助けたのもお前だろ」

「助けることが殺すことと釣り合う訳が無いじゃないですか。それに、命があるならまた繰り返しますよ、私は」

分かり合えないから戦っている。分かりあえるはずがない。
解決法は一つ。どちらかが消えるしかないのだ。

だが、剣は溜息をついた後、雫に背中を向けた。

「帰る」

「……は」

「妥協したくないんだよ。確かに、自分に都合の悪いものは消したら楽なんだろうけど……そんな正義、俺らしくもないしな」

「……偽善者。そんなのは甘えです」

「かもな」

誤魔化すように笑う剣を、雫は苛立ちを感じながら睨む。

雫だって分かっている。剣が、ただの感情の揺るぎくらいで誰かの命を奪う訳が無いということくらい。

一番甘えているのは自分だ。自分に危険が無いことを理解した上で、相手を殺そうとしている。

厳しい道が正義だと、自分を誤魔化している。……だが、それは確かに妥協かも知れない。

「……でも、それを認めたら私は……」

鬼という人を殺した自分。その過ちを認めてしまえば、

——ただの、殺人鬼になってしまう。

自分を庇う自尊心が、それを許さない。

全力の言い訳をしないと。自分の正当性を証明してやらないと。

……正しくなくなれば、自分の存在価値は無いのだから。

「まあ、なんだ、その……悩めよ。答えは……出ないかも知れないけど……」

剣は、少し自信無さげにそう言った。……まるで、自分にも言い聞かすかのよう。

凡人2（前書き）

くあらずじく

ゲームの中に入ったりなんだりでピリピリしていた剣が爆発。服部先輩に八つ当たりして飛び出した。そして犬猿の仲である光村雫と戦い、何やかんやで光村を大いに悩ませ、自身も悩むのであった。

そんな中、ゲームの中に入った瑞樹は、町の門付近で一人の少女を見つける。

凡人2

「どこやねん、こっ……！」

町の門付近でたじろぐ少女がプレイヤーだということは、一目で分かった。

つり目のポニーテールといえば強気な印象を受けそうなものだが、彼女の雰囲気には、散りかけた桜のような儚さを感じる。ドット絵じゃなかったら美人に見えたんだろうな。己の頭のスペックを呪う。

「……アルス、これって……」

「心波の影響は何も結菜に限ったものではありませんから。結菜と同じようにこのゲームに入ってしまった……。十分、考えられます」

どこからともなく、脳裏に声が届く。

確かに、結菜は別に特殊な人間ではない。あいつがゲームに入っただって、事故みたいなものだ。事故がもう起きないなんて言えるはずもなく。

「ということは、これから他にも犠牲者が増えるかも知れないってことか……」

「その通りですね。警戒のしようがありませんが、頭に入れておくべきでしょう。あと、一度伝えましたが、僕の声はパソコン経由ですから瑞樹さんにしか伝わってませんよ」

「……そっいゃ、そうだったな。ちようど、何で変な目で見られて

いるのか気になってたところだよ」

変な目というか、思いつきり警戒している目。手に持った剣が震えている。

向こうが臨戦態勢なので、俺も下手に近付くことが出来ない。こんな時に人を和ませるトークセンスなど当然ながら持ち合わせていない凡人だぜ、俺。

「えー、あー。……まず、大丈夫か？」
「……………」

返事はない。少女は一步踏み出し、さらにキツイ目で俺を睨みつける。

「まず落ち着けよ」
「……………なあ、どこなんや、ここー！」

声かけとか意味無く、少女は半分叫び声だった。何というか、恐怖で失神するんじゃないのかこの子は。

ここはどこか、と。言われても。別に断れない訳でも無いが、果たして俺はゲームと答えても大丈夫なんだろうか。この少女が失神したり襲ってきたりすると、何か色々と困る。

まあ、答えないと許されそうにない訳だが。

「早う教えるや……………！ 早うー！」
「……………あー。びっくりしないで聞くなら言うけど、無理だろ」
「馬鹿にすんなや」
「震えを止めてから言えよ……………」

試しに俺が一步踏み出す。やっぱりというか何というか、少女は

「ヒア！」と叫んで大袈裟に退いた。一步でここまで怯える子に、ここがゲームの中だぜなんて絶望的なことを教えて泣かす訳にもいかんたろ。泣いた先のパニックとか、何が起るか分からなくて怖い。

それに、この子が本当に知りたいのは場所じゃなく、その先。元の場所への戻り方や、安全の確保の仕方だろう。

「そうだな、とりあえず……お前、どこから来た」

「……自分の部屋に、おった……はず、や」

「ってことはあれだ。これは夢だ。だから起きれば良いんだ。けどまあ、夢の中だからって怪我すんのもよろしくないよな。だからしばらく町に引きこもってるのがベストだと俺は思っぜ」

それが一番良い。だろう。多分。

夢だという認識があれば、自発的に意識が現実に戻るかも知れない。そうならなくても、ずっと町にいてくれれば、ひとまずゲームオーバーで死ぬことも無い。

「……………」

「ホント危ないから町の外出んなよ」

向こうにはまだ言いたいことが沢山ありそうだったが、変なボロを出したくないのでそろそろその場を後にすることにした。

元の世界に帰す方法が分かれば、また戻ってくればいい。その時に今の子がいなけりゃ、それはあの子の責任だろうし。

最低限の忠告はしたからな。死ぬなら俺の関係無いところで……。

「……あー。何か後味悪いけど、まあいいか」

「連れていけば良かったんじゃないですか？」

アルスの声に首を振る。……あれじゃあ、絶対に足手まといだろ。

七月二日。月曜日。

朝。少なくとも楽しくはない気分で、光村雫はフラフラと席に着く。

桜木春風のような意図的な仲間外れを喰らう訳でもなく、ナチュラルに彼女は孤立していた。

だが、そんなことは彼女にとってはどうでも良い事だ。

「……えー、この前から休んでる桜木なんだが、入院したらしくてな。しばらく学校に来れないそうだな」

教室がどよめいた。その反応に、教師の方が逆に驚かされる。

心配する風な声、不思議がる声、驚く声。それら全てが「えー！

？」という一言に集約される。

「どう思う？」

「同時期にっていうのが怪しいよね」

——無理も無いか、と溜息をつく。須上結菜と桜木春風、クラスの中でも何となく浮いた二人が、揃って謎の入院。世間話のネタとしては丁度良い。

「そっぴゃ、昨日病院で事故だか事件あったみたいよ。窓ガラスが割れたとか」

「公園で砕かれた金属バットがあったとか……。最近変だよな」

「今年の十二月で世界滅びるとか言うじゃん。その予兆なんじゃない

い？ 隕石とかの噂もあるし」

結局、話題は見る見るうちに桜木春風から離れていき、いつしか世界が終わる話へと向かって行った。

……平和だな、凡人は。

それが、雫の率直な感想。親がいて、不自由など無くて、他人事のように世界の終わりを語って、イベントに変えていく。

自分の力ではどうにも出来ない。……そうやって逃げて、何も考えようとしない。脆弱。不快。

——自分もそうだった。鬼さえ消せばどうにかなる。そうやって逃げていた。だがこの考えは甘い。星野剣を認めた訳ではないが、正義について、平和について……。妥協して、誤魔化していた。考え抜く。そして、今度こそ自分の正義を貫き、世界を救う。……自分はただ何もかも否定してグループと結び付くような、低能な凡人とは違う。

HRが終わった直後、やることもなく文庫本を開いた雫の元に、瀬尾夏鈴が歩み寄ってきた。

「……ねえ、どういうことよ」

「何が」

「須上結菜と桜木春風のこと。何か知っているんじゃないの？」

「……さあな」

二人とあまり良好な間柄ではない彼女が、何故それを聞くのか。何故、自分に聞いたのか。……知る気もなかったが。

雫は文庫本に目を向ける。読んではいない。ただの逃避だ。

「……何か知っているんでしょ？ 昨日、桜木さんの家に行っただ、体調は特に悪そうでもなかったのよ。その後怪我したつても考えられるけど、何か……あの二人には、特別な事情があるんじゃないかと思えなくて」

「特別な事情、とは？」

何も知らない野次馬が、好奇心で自分の知らない世界に入ろうとしているだけのことだ。

凡人はいつもそうだ。自分の現状がどれだけ幸せか気付かず、どこか別の世界に踏み込もうとする。

瀬尾夏鈴もそういう人間だ。須上結菜も……。大人しくしていればそれで良いのに。

「……神になれるゲーム」

「……」

「ポーカーフェイスに見えて、意外と顔に出るわね。……ねえ、何か関係があるんでしょ？」

「……どこでそのゲームのことを知った？」

「とある人とのチャットで」

「相手は？ 誰からその話を」

「さあね」

瀬尾は溜息をつくと、雫に対して背を向けた。

「つままないよ、光村さん」

そうして一歩、向こうへと踏み出していく。

つままない。それは、瀬尾にしては珍しい、ストレートな否定だった。傷付く、とまではいかなくとも、気にはなる。

だがそんなことはどうでもいいのだ。気にしないふりをしつつ、

今すべきことをする。

「……その相手と話がしたい」

「クラスメイトともまともに話さないのに？」

冷たい声だった。突き放すような、残酷とも言えそうな声。

「この際だから言いたいことを全部言うけど、そんな態度だから友達が出来ないのよ。自分は必死で問題解決しようとしています。普通のことになんか構ってられません。興味ありません。邪魔するな、入ってくるな、自分が正しい。正義だって。……馬鹿じゃないんだから、そんな子供みたいなことしないでよ。アンタはただ、そうして自分に価値を与えようとしてるだけでしょ？」

「……ハ」

また否定だ。……自分より遥かに価値の低いと思っていた者から、二回も。

「それとも怖いのか？ 外気に触れると今の自分が壊れるって、そう思っているんじゃないのか？ 特別だって勘違いして、下らない若さにしがみついていたんじゃないでしょ」

「……何が分かる」

「分からせようとしなないその態度が嫌なのよ。空気を読むのが社会で生きる為のルールなのに、平然とその義務を破って、勝手なことを言う奴がいることが嫌なの。分かる？ 引きこもりとか、不登校とか入院とか。……何よ、その例外。何がどう特別なのか分かんないから、納得も出来ないのよ。ただ事情を知らない”下”を作って、優越感持ちたいだけじゃないの！？」

凡人だって戦ってるのよ！」

瀬尾はそう吐き捨てると、教室の外へと静かに出ていった。
もうじきチャイムは鳴るのに……。授業に出ないつもりだろうか。

凡人2（後書き）

クリスマス短編とか考えてましたがあまりにも話が膨らまずボツになりました。

本編もあんま膨らんでねえじゃねえか！（涙）

拍手、コメントありがたいです。

小心者と偽りの世界

「何やねん、ここ……」

見たことのない変な生き物……モンスター？ だらけの得体の知れない森。手には剣を持っていた。服はそのまま。武器を持つにはふさわしくない、パジャマのままだった。

部屋におったはずや。なのに何やこれ。……戦えってことなんか……？

おそろおそろ、いわゆるスライムのようなモンスターに近付いてみる。ゲームの世界とかなら、戦うところなんだと思う。……けどここはただの森。原生生物にやたらめったら攻撃しなくても……。スライムは体当たりしてきた。腹にまともにそれを受けて、後ろに倒れるあたし。

「……このっ」

一旦距離をとって叩き斬る。剣道の真似みたいな素人の動きだったけど、スライムは動かなくなった。……死んだらしかった。

——あたしが殺した？ いや、でも虫と同じようなもんや、こいつは。

いちいち気に病んでいたら、今度はウチが生きていかれんやろうが……。

森を出ると、草原が広がっていた。丘のふもとには町。モンスターは森の外にもいるらしく、町は壁に覆われていて、入るには門を通る必要があるそうだった。

と、冷静なフリをしてみても、あたしの混乱は止まらなかった。

——だって、何やこれ。安っぽい言い方やけど、こんなまるでゲームの世界やないか。

「……行くしかない、か……」

モンスターと出くわしても逃げ切れるよう、若干勢いをつけて坂を駆け下りる。足を動かしながら。あたしの頭の中には、また一つ新しい不安が生まれていた。

——入ってええもんなかな、あの門。いきなり余所者が入って、変な目で見られないか。そもそも言葉が通じるのか。無断立ち入りの罪で殺されたら……。

けど、外にずっといたらモンスターに襲われるし、方向も何も分からんのに適当に進んで、元の場所に戻れるとも思えない。

モンスターも人間も、どっちも怖いけども……。正直、人間の方が怖いけども、それでも現状を打破する為には町で情報を得ないと……けど、

「……くそ、迷つとる場合じゃないやろ……！」

ずっと一人だった。だから今までずっと一人でやってきた。誰も助けてくれないことくらい理解している。自分で決断せんでどうするんや。

考えるな考えるな考えるな。ただ目の前の状況だけに集中すれば大丈夫や。先のことは考えたらあかん。そんな風に頭を麻痺させるようにして、ぐんぐんと門に近付いて、

「あれ？」

門付近に人の姿が見当たらない。

……おらん？ いや、それならそれで構わんけど……。門どころか、その先から微かに覗く町の中にも、全くといえるほど人影が見当たらない。

いよいよ無人の門をくぐった。ひょっとして何かの罠かとも思ったけど、本当にフリーパスや。考えてみたら日本やったら町と町の移動に許可なんかいらんけども。でも、これでは立派な門とか侵入者を避ける壁とか、そういうったものが無駄になる。こんなん、モンスターだって簡単に入ってしまいそうだ。

「行政の無駄遣いか……？」

人件費の削減で門番がリストラされた、という予想を立ててみたけど、外れらしい。人がいないのは入口だけではなかった。

……おかしい。どういう訳か通行人が全くいない。通行人どころか、町の中に本当に人が存在するのか疑問に思えてしまつくらい、音がしない。

案外近くに大量生産の工場が何かあつて、ここが極端なベッドタウンになってしまっている……と思うにしても静か過ぎる。人がいないだけじゃない。誰かが住んでいるという気配とか雰囲気とか、そういうものが無いのだ。

地面も、家も、木も草も。上手く言えないけど、本物のような気がしなかった。映画のセットのような、決して実用として使われることのない、カタチだけを本物に似せた偽物みたいに見えて仕方がない。

——偽物。カタチだけを似せた、本物でないもの。まるで、ただ誰にも認知されない空間で、何もせずに生きているあたしのことみたいだ。

……現実にとって必要の無いあたし。だから、こんなところに捨てられた？

「……いやいやいや、流石に」

そんなもん普通じゃない。普通じゃないことは有り得ない。脱出不可能な“普通”の枠の中で、傷付くことなくひっそりと暮らしていくのがウチの人生のはずや。結菜とは違う。あたしは現実を受け入れて、程良い妥協の上で生きて、これからもそうやって生きていくはずや。きつとまやかし。気のせいや。……きつと、今のこの現状も誰かが説明してくれる……。

血眼になって探し回るとは、こういうことを言うのだろうか。出来るだけ人間に会わないようにと思っていたはずのあたしは、今、

何としても人間を見つけようと町を走り回っている。

誰でも良い。会話が出来るのなら誰でも。人間関係を遠ざけ、自分から一人になろうとしていたあたしがこんなことを思っている。クソが。何であたしばかり……。

町の隅。「INN」という看板を見つけた。宿屋なら店主がいるはず。いないとおかしい。頼むから誰かおつてくれよ……！

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚100Gになりますが……」

「――」

おった。人が。

思わず力が抜け、あたしはその場に座り込んでしまふ。安心した。使っている言葉は日本語。大丈夫。ここは得体の知れない外国じゃない――。

「あ、あの――」

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚100Gになりますが……」

「……あの……？」

去って行った不安が、再び心に湧き上がる。

何やこれ。ボケとんのか？ それとも、からかつとんのか？

――何で、違和感。さつきまで町全体にあつた無機質な雰囲気、どうして人間から……。

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚100Gになりますが……」

「――」

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚100Gになりますが……」

「――」

「ようこそ、ここは旅の宿屋。一晚100Gになりますが……」

「――やばい。」

奇怪な状況に吐き気を催す。体の感覚が恐怖でなくなっていたけど、無理やり足を動かして、外へと飛び出した。吐いた。ついでに泣いた。

これ以上町の中にいたらおかしくなりそうな気がした。あの熱の無い機械みたいな店主みたいに、自分がなつてしまいそうな気がし

て。……だから門に戻ってきた。でも、ここを離れてモンスターだらけの外に行くのも怖い。

……どうすりゃええねん。人もモンスターも怖くて、外にも中にも居場所が無い。夢なら早く覚めてくれよ。安心して一人になれるあの場所に、早く帰してくれよ——。

しばらく門の傍に座り込んでいると、町の中から人間が出てきた。顔もスタイルもアニメキャラみたいに完璧な、背の高いたくましい美女だった。

さつきみたいなやばい人間だろうか。人間を見るのは、ようやく二回目。

「うお」

彼女はあたしと目が合った瞬間、自然な動きで驚きの意を見せた。……自然だった。人間らしかった。宿屋の店主とは明らかに違う、表情の変化。動き。人間。

「——あ」

人間。——人間だった。

探し回っていた存在が、今、目の前にいた。

「……………」

瞬間的に喜びや警戒心が溢れてきて、次にすべき行動が見つからなくなる。

美女はあたしを確認するように見つめると、

「プレーヤーか、こいつ」

誰か別の人に確認するように言った。ウチとこの人以外、誰かがこの場にいるのだろうか。……いや、そんなことはこの際どうでも良くて！

「ど、どこやねん、ここ！」

震える声で聞いてやった。

……同時に、相手が怖くなる。人間味のない「無」の世界も怖いけど、善も悪も何でもある人間一人の「在」の世界もやっぱりすごく怖かった。

「……アルス、これって……ああ、だよな。……ということは、これから他にも犠牲者が増えるかも知れないってことか……」

見た目は美人だったけど、彼女の口調は完全に男のものだった。あたしとは別の誰かに喋りかけているみたいだけど、通信機の類を持っているようには見えなかった。……それとも、精神を病んでいるのかも知れない。この世界に長居すれば、おそらくどんなに意思の強い人でも壊れると思う。

「……そういや、そうだったな。ちょうど、何で変な目で見られているのか気になってたところだよ」

美女は面倒臭そうな顔で溜息をついた。そして、あたしを見て何か考えるように唸った。

いきなり襲われることはない。……と、断言は出来ない。こういう何も無い世界で、若い女はそれだけで商売道具としての価値がある。捕まえられても不思議じゃないし、怖いのは、それを今、他の誰も目撃してくれないこと――。

まだ襲われた訳でもないし、相手が敵だと決まった訳でもない。けど剣を構えずにはいらなかった。剣を構えた手が震える。情けないけど、この醜態が今のあたしの全力の威嚇だった。

そんなあたしを見て、美女は困惑し、もう一度溜息をついた。

「えー、あー。……まず、大丈夫か？」

相変わらずの男口調。悪い奴に見える訳ではない。けど、分かり易い悪党よりも、こういう一見害にならない人からの暴力が一番怖い。あたしにとっては。

「……まず落ち着けよ」

怖い。怖いから隙を見せたくない。

「……なあ、どこなんや、ここ！ 早う教えろや……！ 早う！」
ひとまず、それさえ分かれば安心出来る気がしていた。たとえそ

れの安心が蜃気楼だったとしても、絶望するよりはマシだ。

「……あー。びつくりしないで聞くなら言うけど、無理だろ」

——びつくりするような場所なんかい。

既に一番隠すべき部分を言ってしまうている彼女だが、本人がそれに気付くことはなさそうだった。……からかわれているのかも知れない。何に對してか良く分からないけど、漠然とあたしの中に苛立ちのようなものが生まれる。

「っ……馬鹿にすんなや」

「震えを止めてから言えよ」

「……………」

反論出来ない。そんなあたしにまた溜息をつく、とうとう美女は一步踏み出し、あたしに襲いかかる……フリをした。

「……っ」

それで、びつくりして腰抜かして尻持ちつく自分はあまりにも情けなかった。

美女はかすかに笑っていた。

「悪いな。嫌がらせじゃねえんだ。ただ、度胸試しというか」

「ええから教えろや！　ここがどこか！　その先はアンタが心配することとちやうやる！」

何回か声がひっくり返った。相変わらず怖くて、喉が上手く動いてくれない。

「んー……そうだな、とりあえず、お前どこから来た」

……部屋から。か？　そんな馬鹿らしいことを言ったら笑われるか、怒らせてしまうかも知れないけど……。

他に答えようもない。素直にそう言くと、案外リアクションは薄かった。

まさか、この世界ではそれが当たり前なんか？

「自分の部屋から来た。ってことはあれだ。これは夢だ。だから起きれば良いんだ。けどまあ、夢の中だからって怪我すんのもよろしくないよな。だからしばらく町に引きこもってるのがベストだと俺

は思っぜ」

「……………」

片手間に、自分の意見だけまくしたてられた。

「……え」

それだけ？ いや、確かにこの世界そのものの存在を夢と言われれば、あたしが部屋からこの世界に来たことの説明もつくけども。けど何やそれ。こっちの意見も希望も何も聞かんと、美女はさっさとあたしから背を向け、どこかへと進んでいく。

「ホント危ないから町の外出んなよー」

「……は、はあ」

美女が去っていくのを、あたしはしばらく呆然と眺めていた。森とは反対の方向。彼女の向かう先には、大きな川が見えた。

……おいおい。ここが夢っていうのは納得出来ん訳でもないけど。でも、気味の悪いこの町に引きこもるなんて無理だ。体の前に心が壊れる。忠告に歯向かうことにはなるが、彼女のように外を散策している方がマシだ。

……ウチやて、森を抜けてきたんや。大丈夫。モンスターは人間よりは怖くないから。

の、はずだったのに。

今まで見てきたモンスターはボーリングの球くらいの奴とか、子供くらいの身長くらいしかない奴とか、全体的に小さい奴ばかりだった……のに。

おかしいやろ。ちょっと町から離れたくらいで、少なくとも高さ三メートルはある獅子が出てくるなんて思わない。この都合の悪さは、ここがゲームの世界なんかやない。という証拠かも知れない。

……クソ、こんなに怖いのに、何であたしは冷静なんだろ……。

「……絶望したんやな、きつと」

そうか。保身さえ考えんかったら、結構人間たくましくなれるんやな。

自分を捨てて、あとは潰されるのを待つだけの現状で、ようやくあたしは自室以外の場所で、「ウチ」を捨てて、あるがままの自分になれている……。

「——ま、最期だけでも嘘つかずに済むなら悪くないか。あたしの人生」

諦めた……というか、覚悟を決めたよ。剣を置き、目を閉じる。

敗因はきつと、自分を大事にしすぎたこと。守り過ぎたあたしは、外気に対する免疫が無かった。

——もう少し早く気付いたら良かったのに。それともこれが夢なら、明日から頑張れるんかな……。無理か。こんな世界の記憶、きつと起きた瞬間に忘れてしまうから。

さよなら、あたし。……もしくは、あたしの人生。

獅子は凶悪な目をあたしに向け、

「つけええええええええええ！」

「え」

無粋な声が、あたしの最期を台無しにした。目を開けると、その獅子の腹には大きな槍が刺さっていた。……獅子は凶悪な顔のまま、起き上がるうとしなかった。……即死、か。

「……マジかいな」

この獅子があの一瞬で。しかも近代的な兵器などではなく、刺すという原始的な手段で仕留められたんか……？

しかも。この獅子を仕留めたあの声の主は、あたしの聞き間違いでなければ……。いや聞き間違いははずもない。

「……アンタなんか？ 今のはアンタがやったんか！？」

「へ？ その声って春風？ 何で？」

場違いなくらい、いつも通りの調子で。

獅子の上からひょっこりと、須上結菜が顔を出した。

小心者と偽りの世界（後書き）

改行の有無について悩む時期。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8909m/>

須上ユイナの地球救済

2012年1月13日16時57分発行